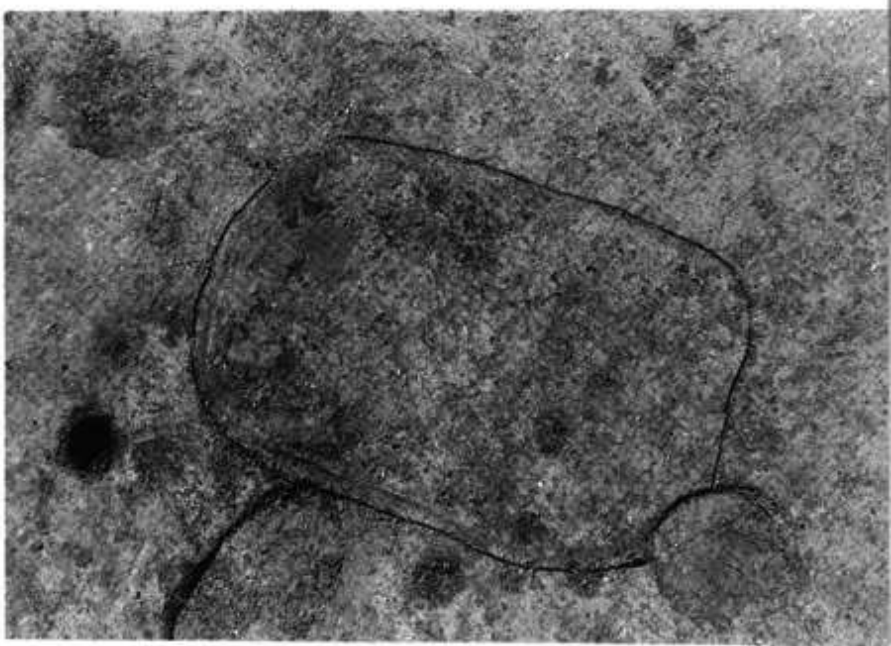
荒神谷遺跡A－3・4区
全景（東から）

荒神谷遺跡A－3・4区
全景（北から）

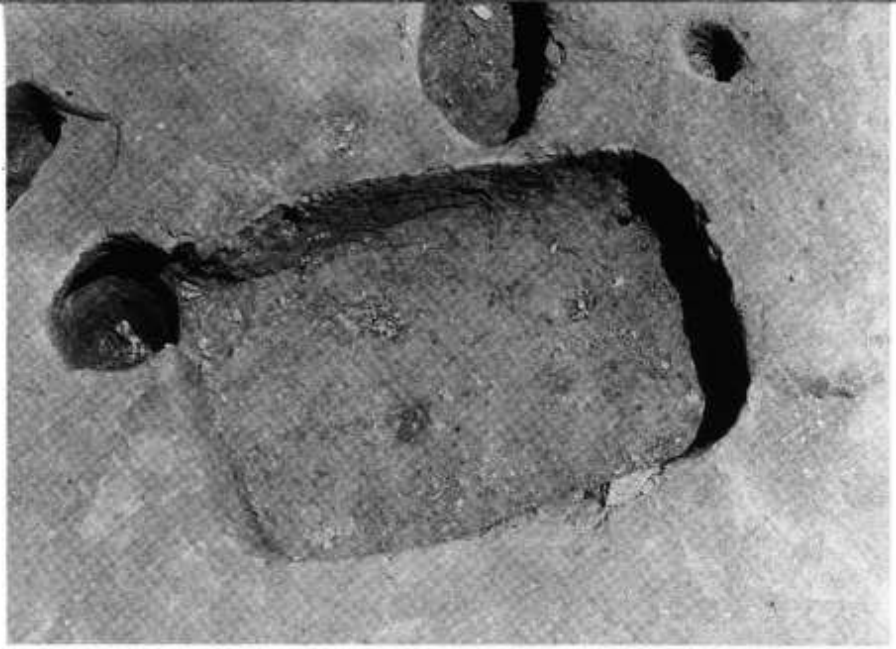
荒神谷遺跡A－3区
SK－01①

荒神谷遺跡A－3区
SK－01②

荒神谷遺跡A－3区
SK－01③

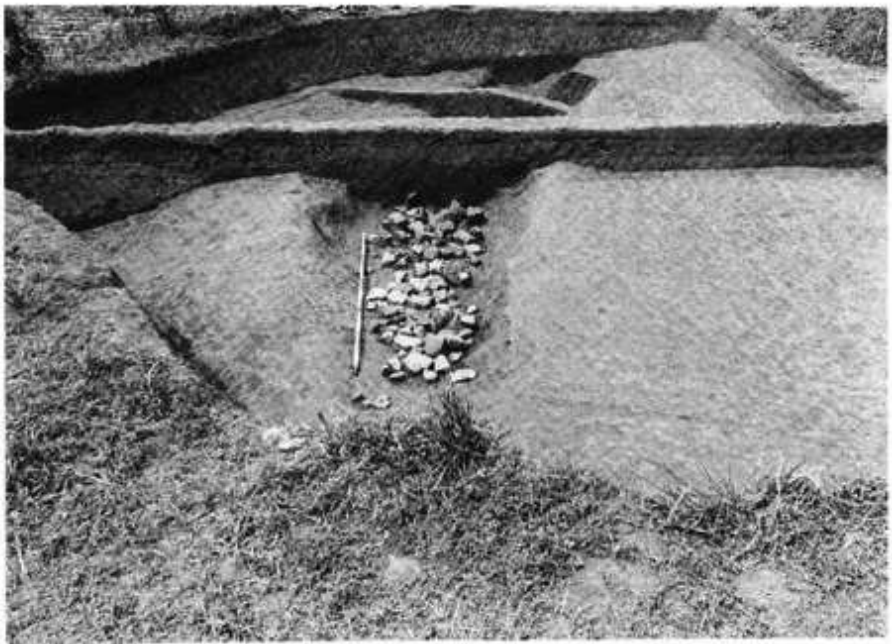


荒神谷遺跡A－3区
SK－02①



荒神谷遺跡A－3区
SK－02②

荒神谷遺跡B区
調査前の状況



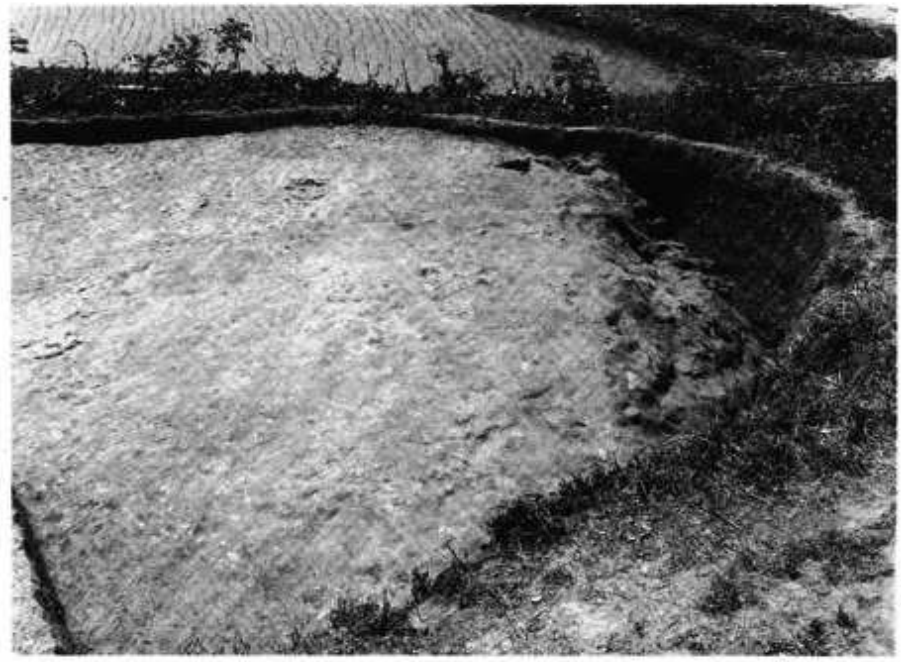
荒神谷遺跡B－1区
全景（西から）

荒神谷遺跡B－1・2区
全景（東から）

荒神谷遺跡B－1・2区
溝状遺構

荒神谷遺跡B－2区
土馬出土状況①

荒神谷遺跡Ｂ－２区
土馬出土状況②

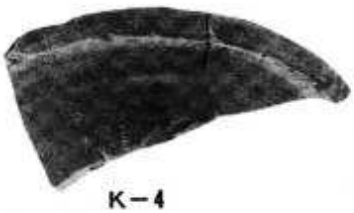


荒神谷遺跡Ｂ－３・４区
全景（調査終了時）

K－1

K－2

K－3



K－4

K－5

K－6

K－7

K－8

K－10

K－14

K－13

K－9

K－11

K－12

荒神谷遺跡出土遺物

K－15

K－16

K－17

K－18

K－19

K－20

K－21

K－22

K－23

K－25

K－27

K－24

K－26

K－28

K－29

荒神谷遺跡出土遺物

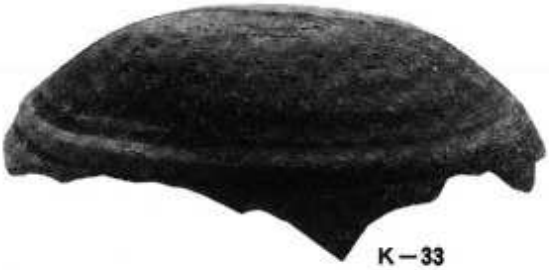
K－30

K－31

K－35

K－36

K－32



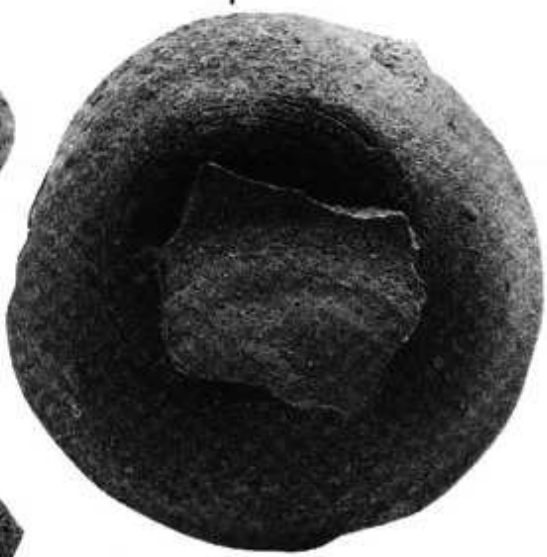
K－33

K－38

K－37

K－39

K－34



K－40

K－41

荒神谷遺跡出土遺物

K－42

K－43

K－46

K－44

K－45

K－47

K－48

K－50

K－49

荒神谷遺跡出土遺物

イガラビ遺跡

イガラビ遺跡

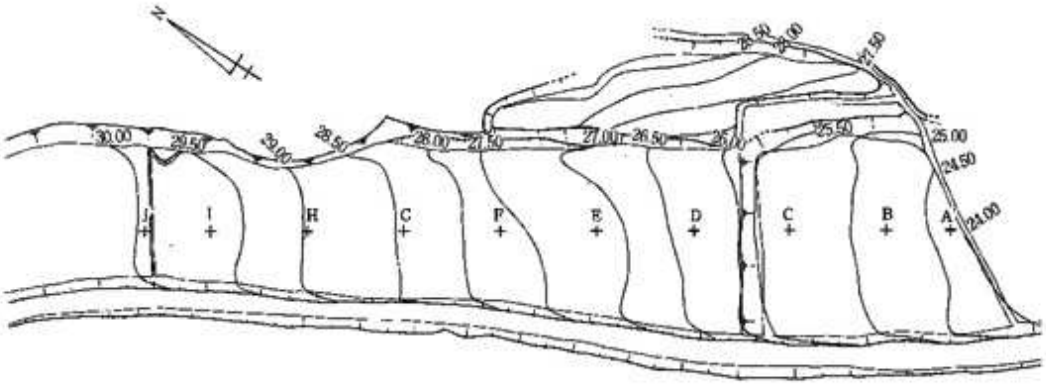
1. 調査に至る経緯

本遺跡は，大井神社の北側に位置する北西から南東に細長く伸びる谷間の東方入り口に立地している。標高は24～30mを測り，以前は畑地として利用されていた。北側低丘陵の中央最高所に池ノ奥1号墳が，その東側緩斜面上に池ノ奥C遺跡，低丘陵東端部には池ノ奥D遺跡が所在する。

この谷間に遺跡があることが判明したのは，松江東工業団地造成事業計画に伴い昭和57年12月に実施した大井地区での分布調査の結果による。すなわち，谷間東方入り口付近に，須恵器片が点々と散布しているのが認められた。そこで，この遺物散布地に，地形に沿って10mグリッドを設定し，全面を発掘して遺構と遺物の検出に務めることにした。

グリッドは，谷間を南北に分割し，東方入り口側から奥に向けて南側をA－1・B－1・・・・1－1区，北側をA－2・B－2・・・・I－2区と呼称した。（第1図）

調査は，昭和60年度（8月1日から12月27日までのうち計86日間），昭和61年度（4月7日から9月16日までのうち計90日間）と2回に分けて実施した。



第1図　イガラビ遺跡地形測量図（S＝1/800）

2. 調査の概要

［昭和60年度の調査］

調査期間および排土の置き場の都合上，A－1・B－1・・・・E－1区，H－1・I－1区，H－2・I－2区の各グリッドについて調査を実施した。また，C－1区についてはグリッドのほぼ中央に畑の境界を示す石組が南北方向に存していたので，C－1(東)区，C－1(西)区と

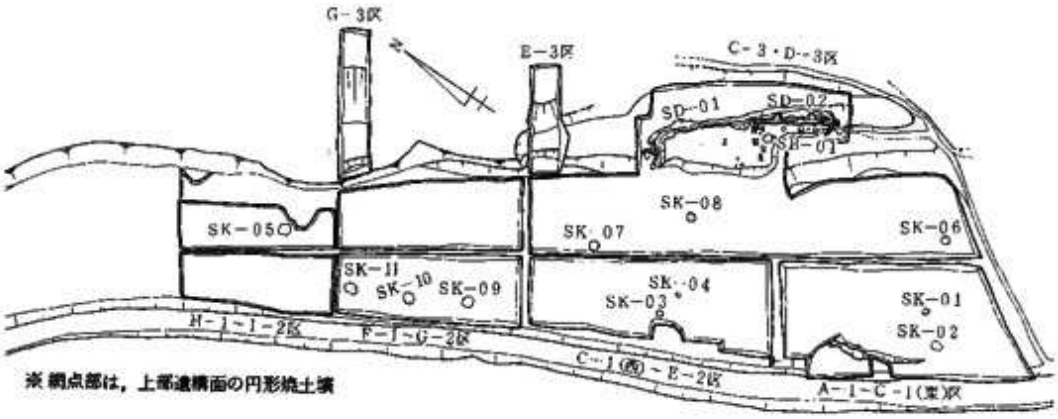
再分区を行った。

調査の結果，上下二つの遺構面を確認し，円形焼土壙5基と多数のピットを検出した。ピット群からは建物を復元するまでには至らなかった。伴出した須恵器からおよそ7世紀代から8世紀代頃の遺構と推定された。

［昭和61年度の調査］

昭和60年度の調査において，排土の置き場にしたA－2・B－2‥‥E－2区，F－1・G－1区およびF－2・G－2区の各グリッドについて調査を実施した。さらに，C－2・D－2区北側の緩やかな斜面に，C－3・D－3区を，E－2区およびG－2区北側の斜面に，それぞれE－3区，G－3区の各拡張区を調査の中途で追加した。

調査の結果，上下二つの遺構面を確認し，掘立柱建物址1棟，円形焼土壙6基，またこの他にも，昭和60年度の調査と同様に建物を復元するまでには至らなかったが，ピット多数を検出した。（第2図）



第2図　イガラビ遺跡調査成果図（S＝1/800）

3. 遺構と遺物について

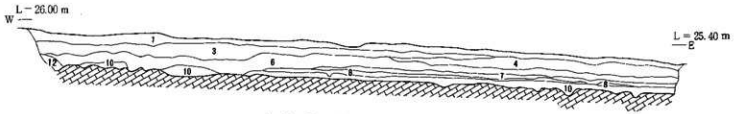
［A－1～C－1(東)区］

この区域は谷間の東方入り口部分に位置し，次のC－1(西)～E－2区とは石組により画されていて，一段低くなっている。

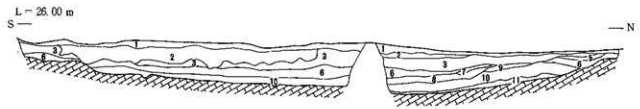
表土から最下層の地山までの間に，表土を含め12層を数える。深さは谷間中央部の1・2区間畦畔のところで，1.0～1.3mを測り，明褐色の地山に達している。2区側では，部分的に黒灰色を呈している。（第3図）

調査の結果，三つの遺構面を検出した（検出層位が異なっていても，平面的位置がほぼ

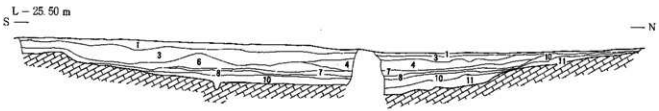
1 表土(耕作土)
2 耕作土下撹乱土
3 褐色土
4 やや暗い褐色土
5 やや暗い茶褐色土
6 暗褐色土
7 黒褐色土
8 やや明るい褐色粘質土
9 赤褐色土
10 明褐色粘質土
11 明茶褐色粘質土
12 黒色土



A－1～C－1（東）区北壁断面図



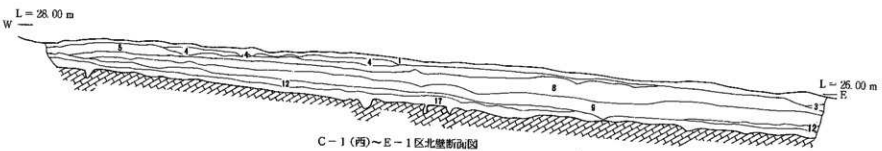
B－1・2区西壁断面図



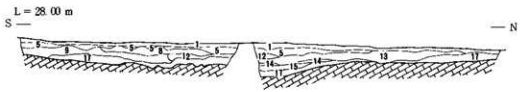
A－1・2区西壁断面図

第3図　A－1～C－1（東）区土層断面図（S＝1/120）

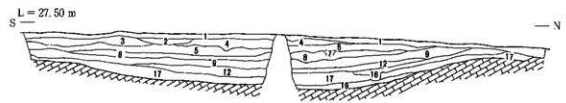
1 表土(耕作土)
2 やや明るい茶褐色土
3 淡褐色粘質土
4 暗赤褐色粘質土
5 茶褐色土
6 やや暗い褐色土
7 撹乱土
8 褐色土
9 暗褐色弱粘質土
10 赤褐色土
11 明茶褐色土
12 黒褐色粘質土
13 やや明るい赤褐色粘質土
14 暗茶褐色粘質土
15 やや明るい褐色粘質土
16 やや暗い茶褐色土
17 明褐色粘質土
18 暗茶褐色土
19 明茶褐色粘質土



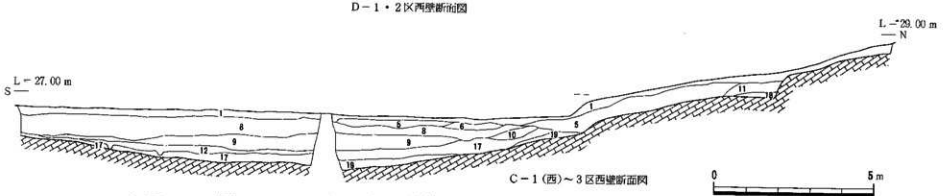
C－1（西）～E－1区北壁断面図



E－1・2区西壁断面図



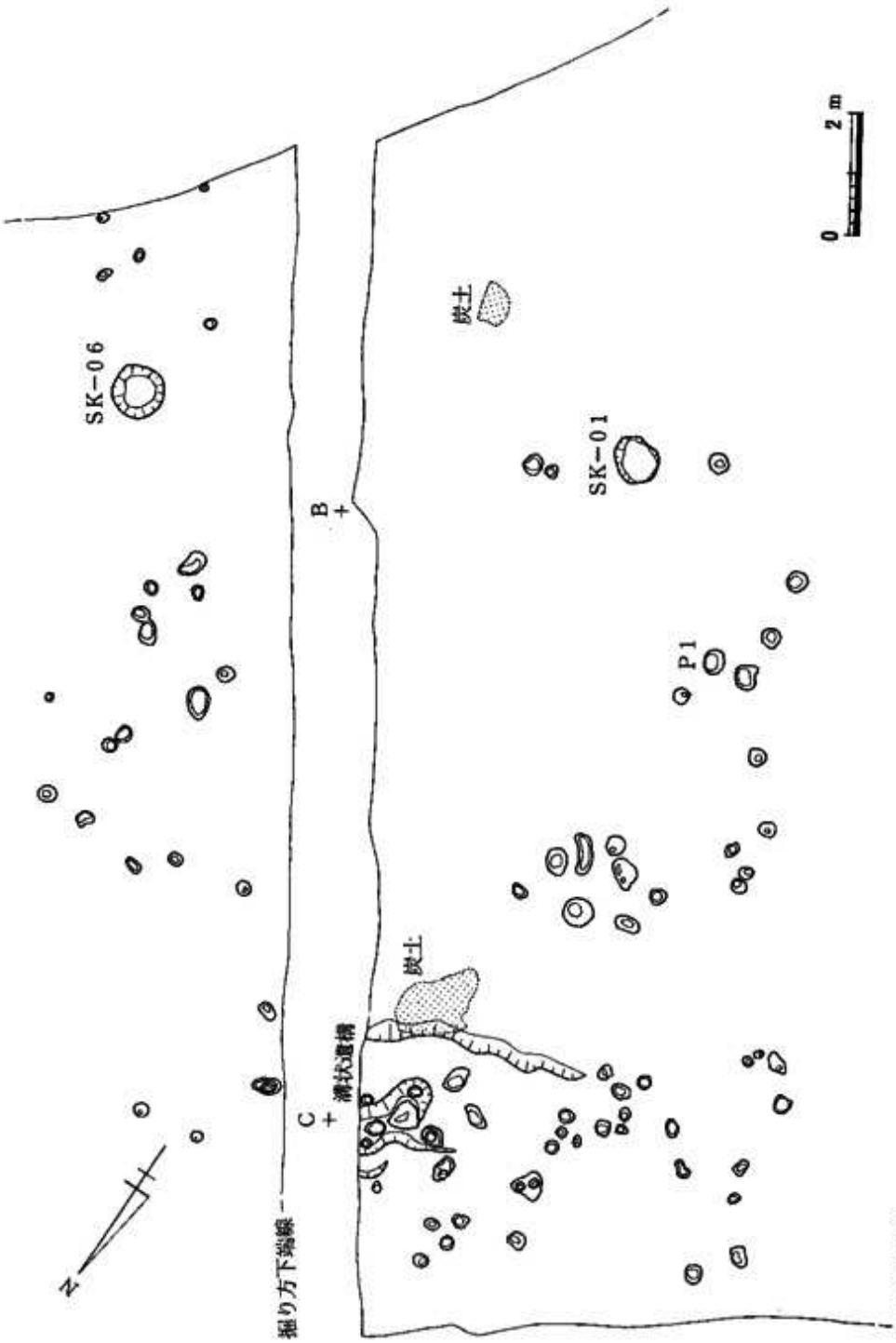
D－1・2区西壁断面図



C－1（西）～3区西壁断面図

第4図　C－1（西）～E－2区土層断面図（S＝1/120）

同一と思われる遺構については，同一遺構面であろうとみなした)。遺物は，小範囲にしか存していない5層，9層，12層以外の各層から出土している。また，表土および7層黒褐色土までの堆積土層内から，池ノ奥C遺跡の特殊土器片が37片，池ノ奥1号墳の須恵器

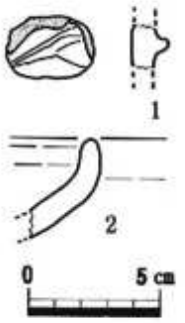


第5図　A－1～C－1（東）区第1遺構面平面図（S＝1/120）

甕片が2片出土している。

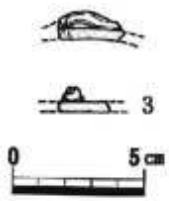
○第1遺構面

10層明褐色粘質土上面で検出した遺構面である。円形焼土壙2基（SK－01・06），ピット81穴，炭土2所，溝状遺構1所を認めた。ピットの形状，法量はまとまりがなく，建物とするには至らなかった。（第5図）



第6図
第1遺構面覆土内出土縄文式土器 (⅓)

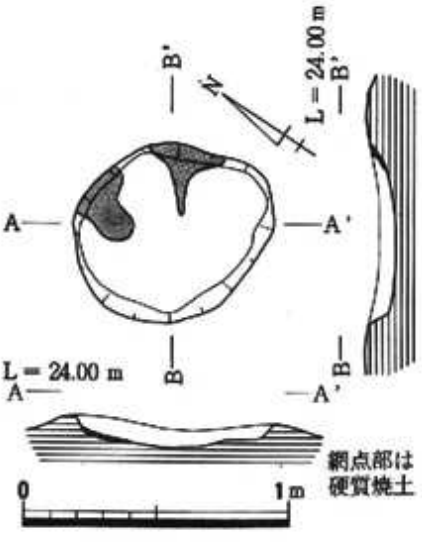
覆土内および遺構面上の出土遺物は，須恵器が大半を占めるが，縄文式土器片2片（第6図1・2）もみられる。後期のものであろう。P1内からは，土師質土錘（136頁第95図427）が出土している。また出土した位置は不明だが，やはりピット内から白磁片（第7図3）も出土している。蓋のつまみと思われ，作りが丁寧なので中国産とも考えられる。



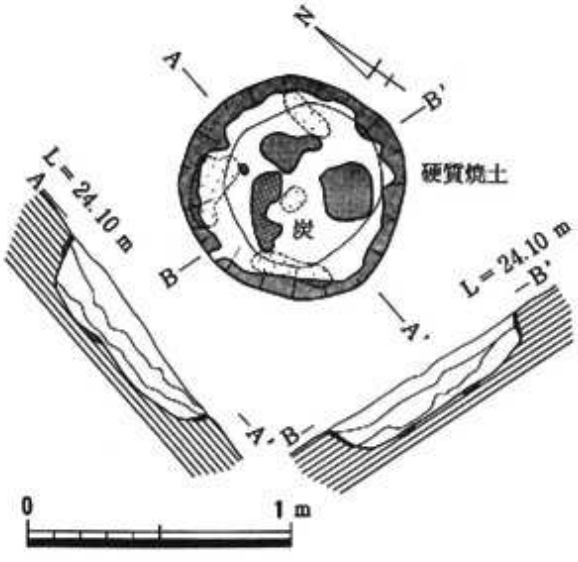
第7図
第1遺構面ピット内出土白磁 (⅓)

SK－01（第8図）：平面プランは楕円形を呈し，上端径80×65cm，下端径70×55cm，深さ7cmを測る。側壁上部の極一部，および，床面の一部が固く焼け締まっていた。土壙内の堆積土は，暗褐色土一層で炭が少量混入していたが，遺物はなかった。

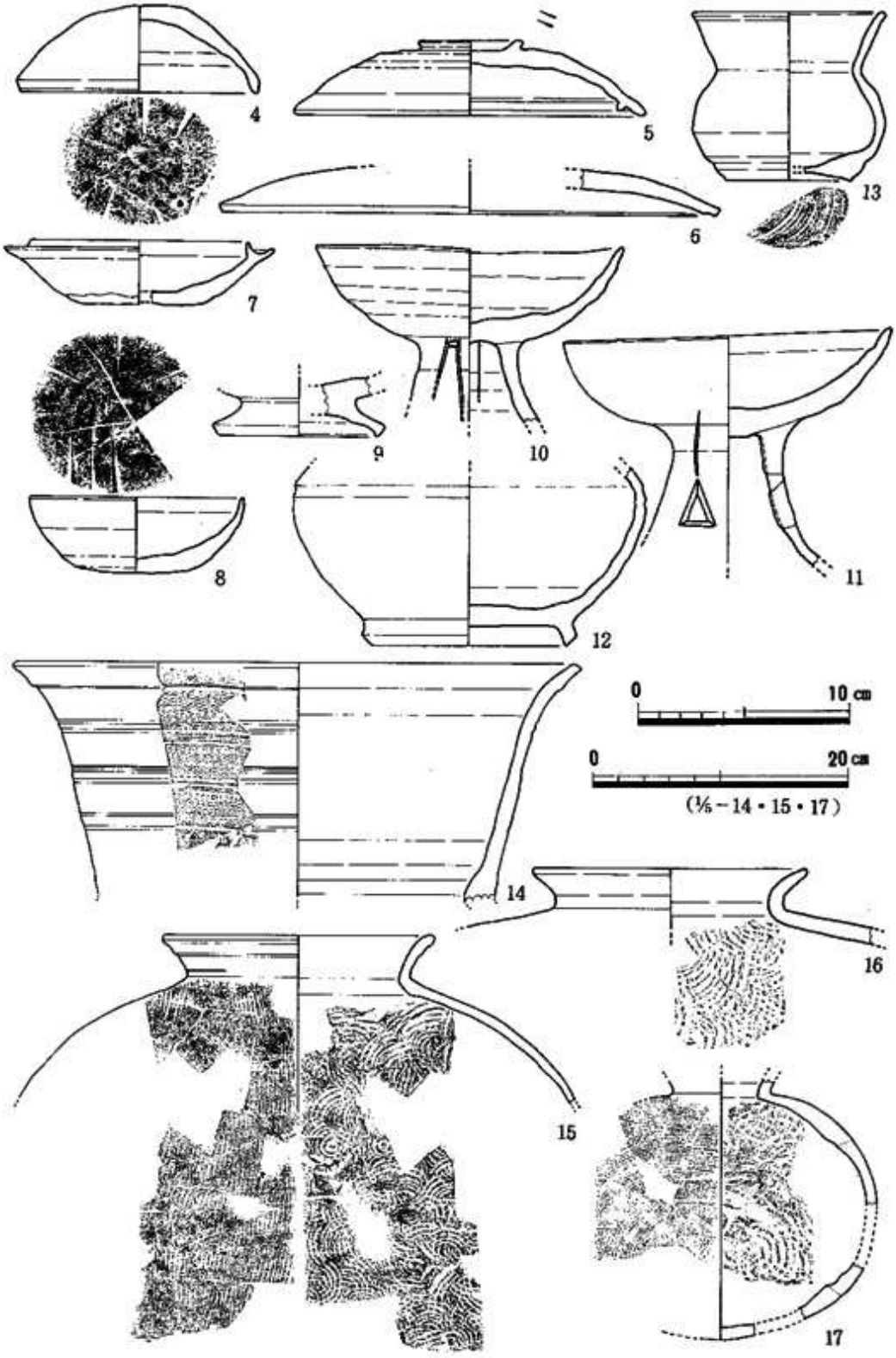
SK－06（第9図）：平面プランは円形を呈し，上端径88×86cm，下端径70×65cm，深さ20cmを測る。壁面上部は厚み8～15mm程の固く焼け締まった赤褐色焼土が，床面4か所には厚み7～19mmの青灰色焼土があった。土壙内の堆積土は，上層炭が少量混じった暗褐色土，



第8図　A－1区SK－01実測図
(S＝1/30)



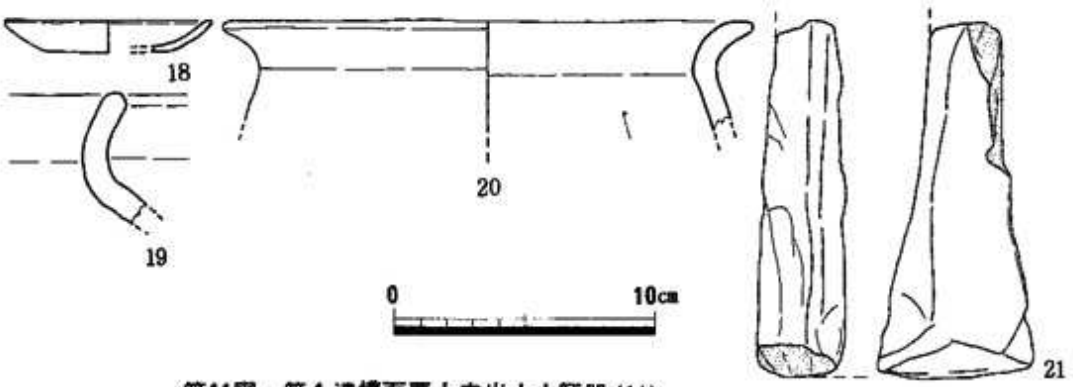
第9図　A－2区SK－06実測図
(S＝1/30)



第10図　第１遺構面上および覆土内出土須恵器 (⅓, ⅙)

中層1cm角ぐらいの炭塊を含む褐色土，下層炭土に分かれた。上層から須恵器片，土師器片が10数片出土した。

須恵器（第10図）は，蓋・坏・高坏・壺・坩・甕・横瓶が出土している。4～6は蓋である。4は天井部内面に「×」印の篦記号を施し，5には天井部外面に篦傷が二つみられ，輪状つまみを付し口縁端部は丸く，かえりの端部は鋭い。6は口径が23.1cmもある大形品である。7～9は坏である。7は，立ち上がりが短く内傾している。8は小形のもので，底部内面に「×」印の篦記号がある。9は低脚の付く坏であろう。4・7・8は，高広編年のⅡA期[註1]か。10・11は高坏で，10は脚部の一方に台形の透しを，他方に篦状工具による切り込みを有し，11は脚部の二方向に，上段は切り込み下段は三角形の透しを施したものである。12は壺で高台を付す。13は坩で，底部に糸切り痕を残している。14・15は大甕で，16・17は横瓶である。



第11図　第1遺構面覆土内出土土師器（⅓）

土師器（第11図）は，小形の坏（18），壺・甕類の口縁部（19・20），竈片（21）等が出土している。

第12図22は，土馬（須恵質）の脚の一部である。

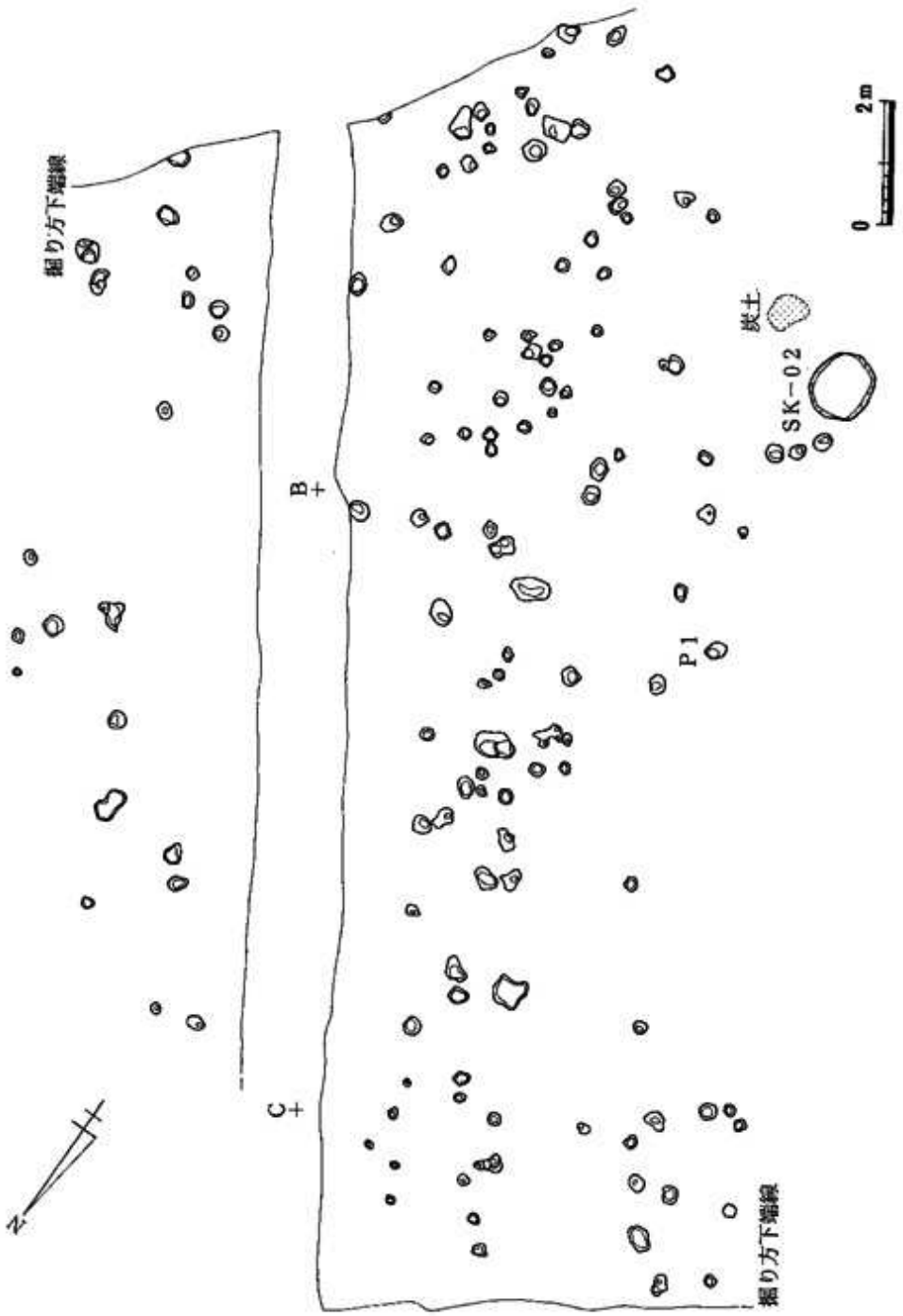
土師質の土錘（136頁第95図426）も出土している。

第12図　第1遺構面覆土内出土土馬（⅓）

○第2遺構面

1区側では地山上面，2区側では11層明茶褐色粘質土上面にあたる遺構面である。円形焼土壙1基（SK－02），ピット134穴，炭土1所を認めた。ピットの法量は概ね上端径65×45×深さ35cmから，14×12×11cmぐらいで，形状についてもまとまりがなく，第1遺構面と同様に建物とするには至らなかった。（第13図）

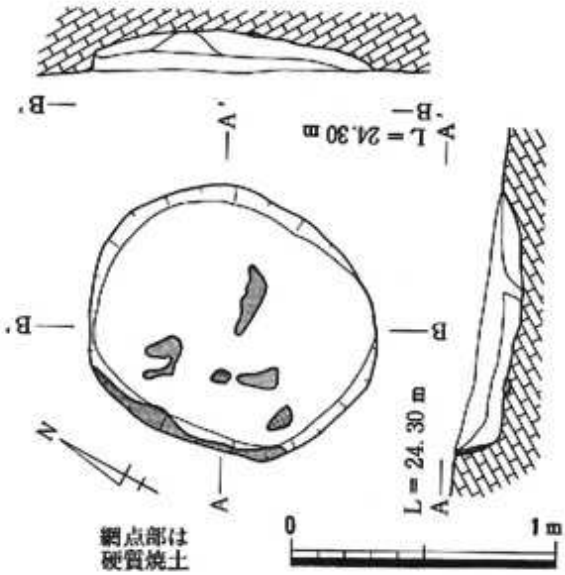
覆土内および遺構面上からは，須恵器，土師器，石鏃が出土している。またP1内から土師質の土錘（136頁第95図428），位置は不明であるがやはりピット内から須恵器が出土



第13図　A−1〜C−1（東）区第2遺構面平面図（S＝1/120）

している。一本の沈線を巡らし，二方向に二段の切り込みを入れた高坏の脚部（第15図25），および，壺（第15図26）である。

SK−02（第14図）：平面プランは楕円形をしており，上端径105×87cm，下端径100×80cm，深さ13cmを測る。西壁上部および床面5か所が固い焼土となっていた。土壙内の堆積土は，上層炭化物を含む暗褐色土，中層やや暗い褐色土，下層炭化物混合層の3層に分か

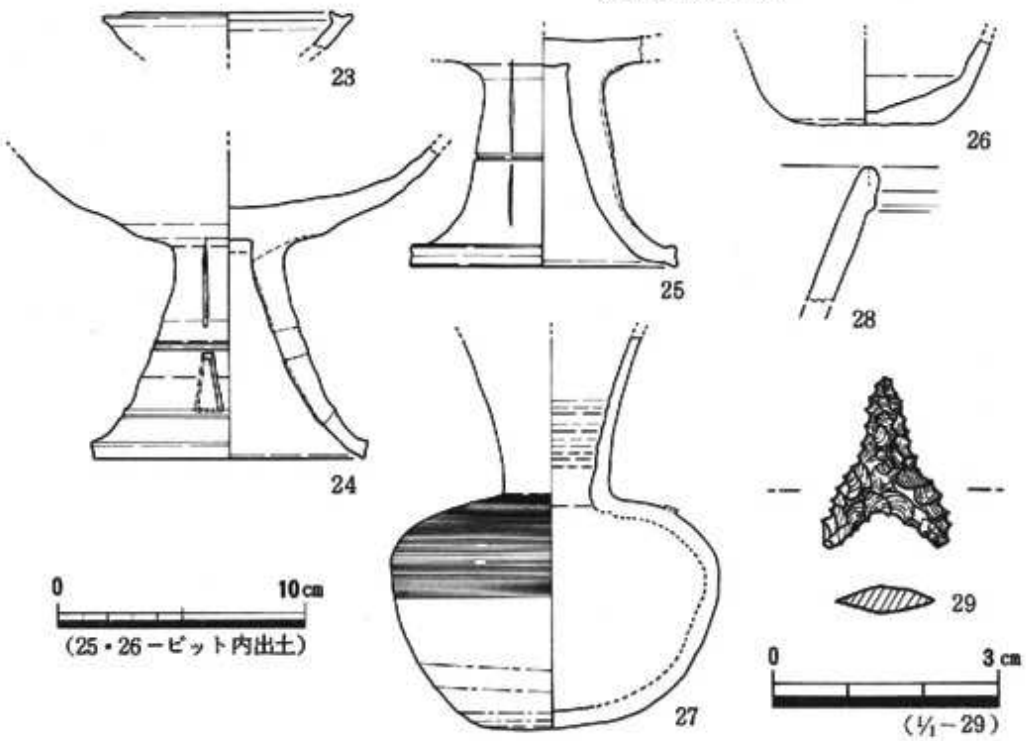


第14図　A－1区SK－02実測図（S＝1/30）

れた。遺物はなかった。

須恵器では，坏・高坏・壺・甕が出土している。第15図23は小形の坏で，立ち上がりが短く内傾しており，高広編年のⅡA期か。24は高坏で，脚部中央に沈線を一条巡らせ，二方向に上段は切り込み下段は透しを入れている。27は長頸壺で，体部上半に櫛状工具によるカキ目がみられる。28は甕の口縁部で，突帯部は貼り付けか。

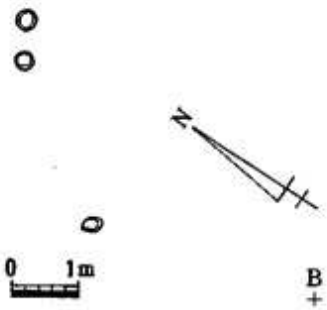
第15図29は，鍬型凹三角形の黒曜石製の石鏃である。[註2]



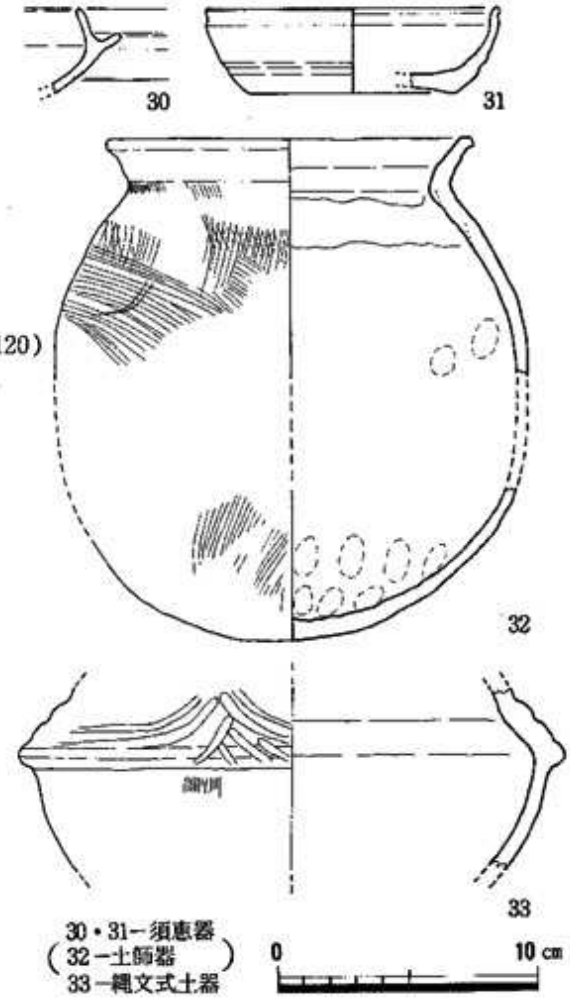
第15図　第2遺構面上および覆土内出土遺物（1/3，1/1）

○第3遺構面

B－2区南側の谷底付近の地山面で認められ，上端径25×20cm，深さ15～10cm程度のピットを3穴検出した。地山面上覆土内から須恵器，土師器，縄文式土器が出土しているが，地山面上に遺物はみあたらなかった。（第16図）



第16図 B－2区第3遺構面平面図(S＝1/120)



第17図 第3遺構面覆土内出土土器 (⅓)

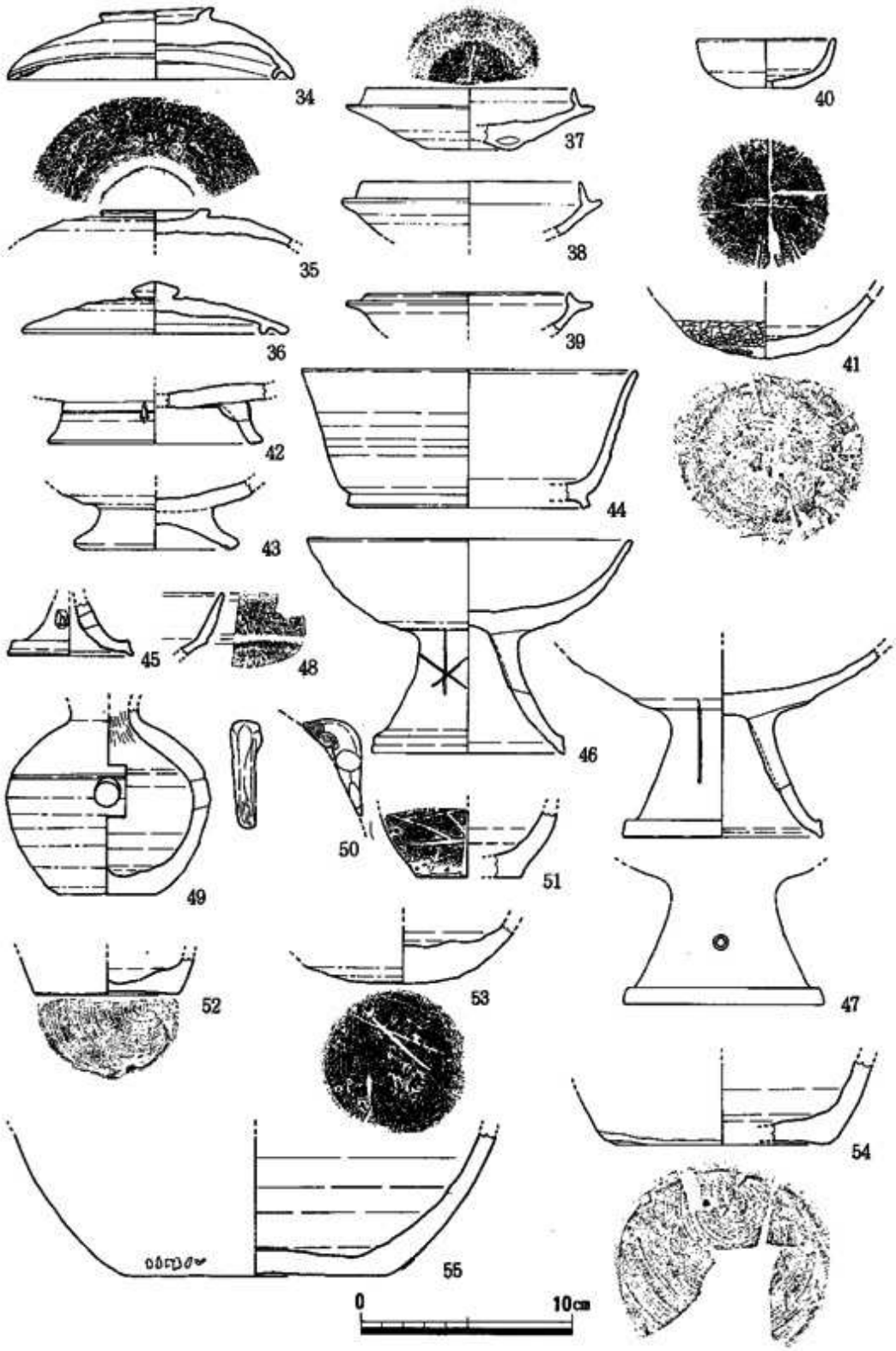
第17図30・31は須恵器の坏で，30は山本編年のⅡ期[注3]，31は高広編年のⅣA期頃か。32は土師器の甕で，体部全体に刷毛目調整を施している。また土師質の土錘（136頁第95図429），深鉢型の縄文式土器（後期，第17図33）も出土している。

○表土および堆積土層からの出土遺物

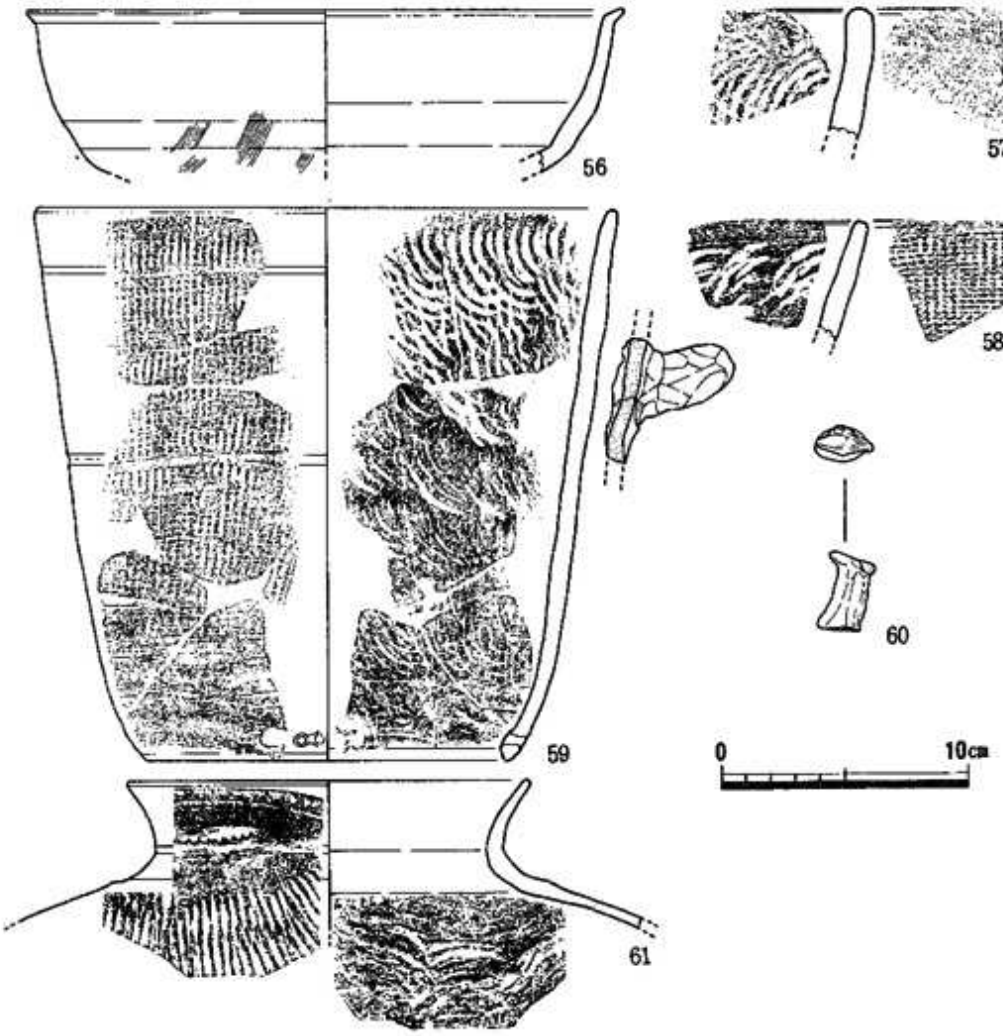
出土遺物には，須恵器，土師器，土馬，縄文式土器，中世の陶器，鉄製品および土錘がみられる。

須恵器（第18～20図）は，蓋・坏・高坏・鼈・壺・鉢・甑・ミニチュア土製支脚・甕が出土している。34～36は蓋である。34は口縁部内側にかえりがあり，輪状つまみを付す。35は天井部外面に竹管文が二つ観察され，輪状つまみを付している。36は口縁部内側に大きなかえりがあり，宝珠状つまみを付す。丁寧な作りである。37～44は坏である。37・38の口縁立ち上がりは，やや長く内傾し，端部は少し細く鋭い。37の底部内面には，「－」印の篦記号がある。39の口縁立ち上がりは短く内傾する。40は小形の坏である。41は外面の底部と体部との境目に，胎土とは異なる別の粘土が貼り付けられ一周している。底部内面には「－」印の篦記号がある。42・43は低脚付坏で，42の脚部には4か所（？）に三角形の透しを施している。44は高台付坏である。

45～47は高坏である。45は低脚の高坏で，透しがみられる。46は脚部に貫通している切り込みが一か所あり，その切り込み部分に「×」印の篦記号を施している。47は脚部に切り込み二か所と，竹管文二か所が観察される。



第18図　堆積土層内出土須恵器(1) (⅓)

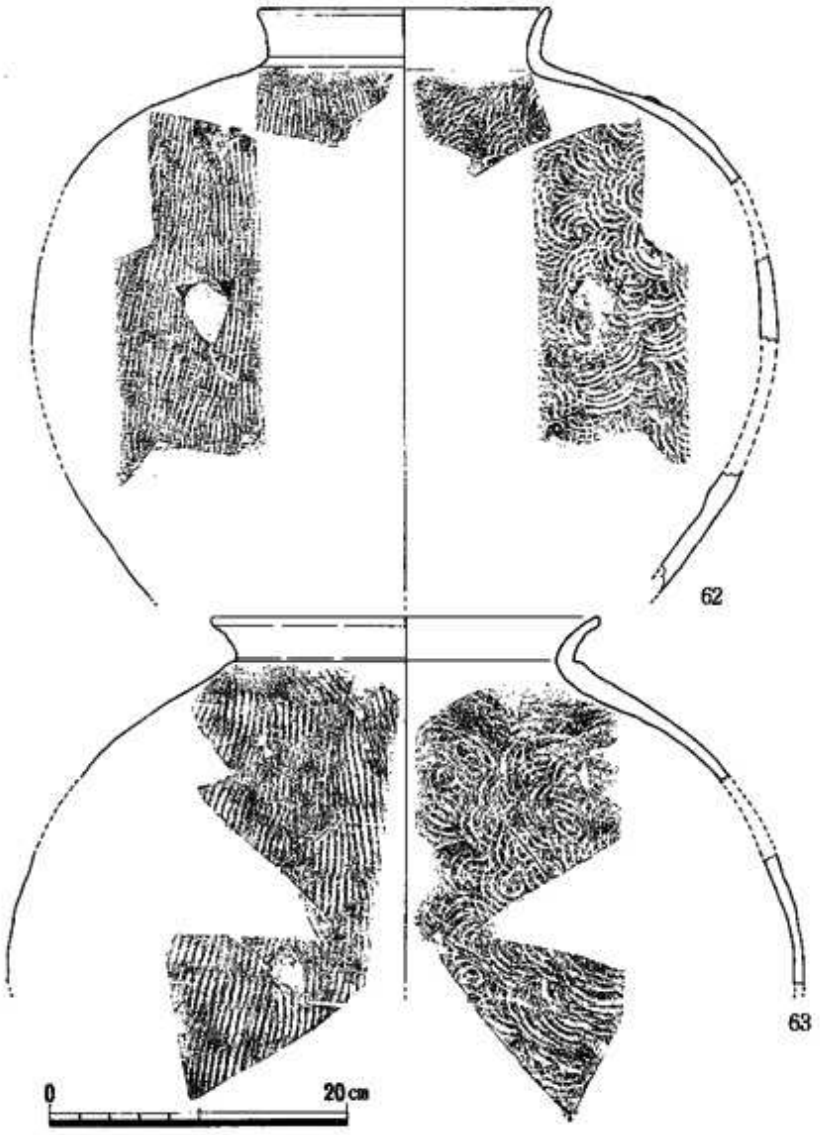


第19図　堆積土層内出土須恵器(2)(⅓)

48は甕の口縁部で，沈線と波状文が施されている。49も甕で，体部中央に一条の沈線を有する。丁寧な作りである。

50～55は壺である。50は把手の部分である。51・52は小形壺で，51は体部外面下方に，52は底部外面に篦記号を施す。53は底部外面に，「×」印の篦記号がみられる。54は回転糸切り痕を残している。55は外面体部と底部の境目に平行叩き目文が施されている。

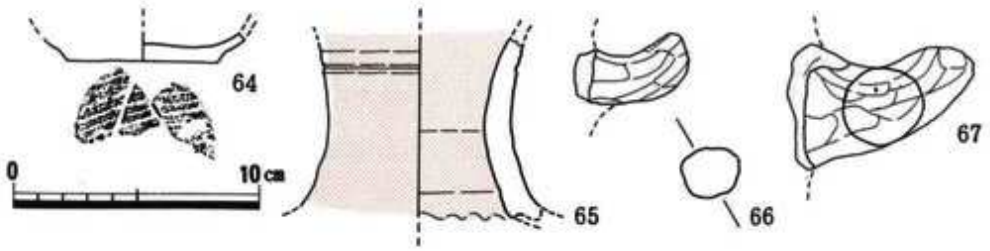
第19図56は，鉢と思われる。57・58は，甑かあるいは鍋の口縁部ではなかろうか。59は甑で，把手を付し，円孔が底部に一か所につき２穴穿かれている。60はミニチュアの土製支脚で，須恵質というのが珍しい。池ノ奥Ａ遺跡でも須恵質のミニチュア品が１点，さらに，中形品が１点出土している。61，第20図62・63は大甕である。61には，口頸部に平行叩きの押し当て具の木口部分が当たった痕がみられる。



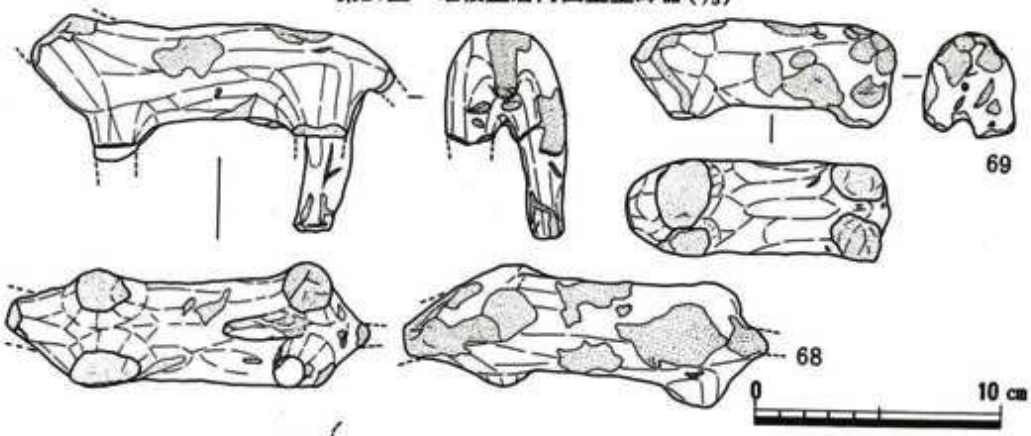
第20図　堆積土層内出土須恵器(3) (⅓)

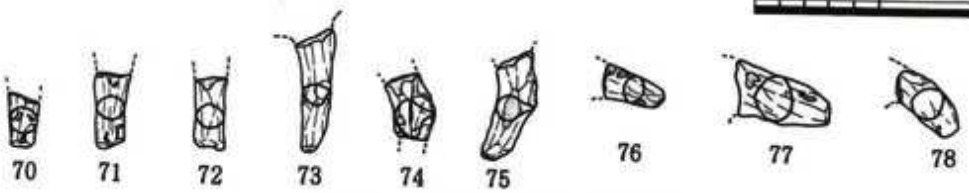
土師器（第21図）は，坏・壺・把手・甕が出土している。64は小形の坏で，静止糸切り痕を残す。65は長頸壺の頸部で，内外面ともに赤色塗彩を施している。66・67は把手で，66は小形品である。

土馬（第22図）は，須恵質のものが出土しており，11点を数える。完形に近いものは1点もない。胴部が2体，脚部が6本，尾が3点で頭部は出土していない。68は裸馬で，頭部，尾，右後肢を除いた3肢が欠損している。尻に篦状工具で肛門孔を穿ち，股間には男根を表現する粘土を貼り付けている。69も裸馬で頭部，4肢，尾を欠損している。尻に1孔を穿ち肛門を表現している。性別は不明である。74・75は，同一個体の脚部と思われ，形態的には馬よりも牛の脚ともみえる。



第21図　堆積土層内出土土師器(⅓)

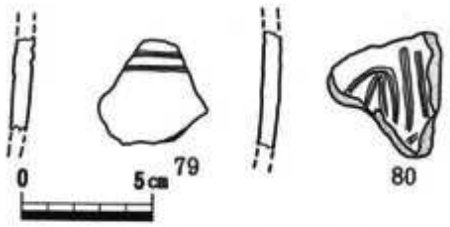




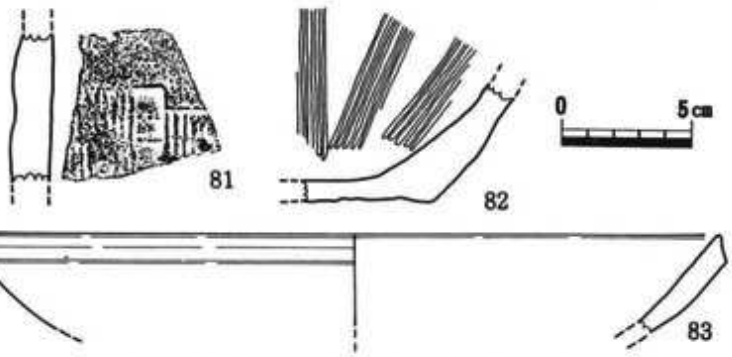
第22図　堆積土層内出土土馬(⅓)

第23図79・80は，縄文式土器片で後期のものであろう。

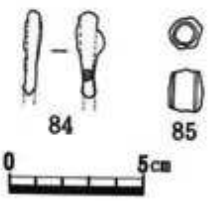
第24図は，中世の陶器である。81は常滑焼，82は備前焼の擂鉢，83は亀山焼系統の皿と思われる。



第23図　堆積土層内出土縄文式土器(⅓)



第24図　堆積土層内出土中世陶器(⅓)



第25図
堆積土層内出土鉄製品(⅓)

第25図84・85は，鉄製品である。

土錘は，38点出土している。土師質のものが大半を占めるが，須恵質のものが2点みられる（土師質；136頁第95図390～425，須恵質；137頁第96図494・495）。

註

註1　島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984年

註2　島羽市教育委員会『島羽鷲遺跡』1975年　の石鏃分類法による。

註3　山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』1971年

［C－1(西)～E－2区］

A－1～C－1(東)区西側のつづきに位置するが，畑の境界の石組によって一段高くなっている。

表土から最下層の地山までの間，C－3・D－3区の拡張区の土層を含めて19層に分けられる。深さは，谷間中央部の1・2区間畦畔のところで，0.7～1.8mを測る。地山は，E－2区ではやや赤みを帯びているが，明褐色を呈している。(77～78頁第4図)

調査の結果，三つの遺構面を検出した。遺物は，小範囲にしかみられない2層，3層，7層，14層以外の層全てから出土している。また，表土，9層暗褐色弱粘質土までの堆積土層，および，第1遺構面上の覆土である12層黒褐色粘質土内から，池ノ奥C遺跡の特殊土器片が38片も出土している。

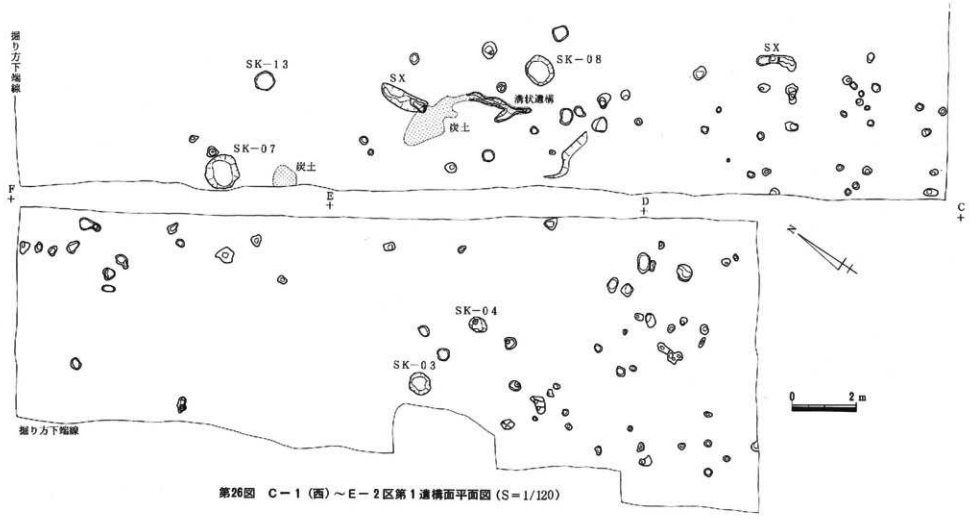
○第1遺構面

17層明褐色粘質土上面で検出した遺構面で，A－1～C－1(東)区の第1遺構面のつづきであると思われる。円形焼土壙4基（SK－03・04・07・08），円形土壙1基（SK－13），ピット106穴，炭土2所，溝状遺構1所，性格不明遺構2所を確認した。ピットは，形状，法量ともに大小様々でまとまりがなく，建物とはならなかった。(第26図)

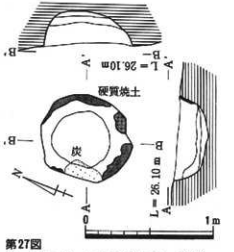
ピット内から，内外面ともに赤色塗彩を施した土師器片（99頁第37図152），須恵器長頸壺の口頸部片が出土しているが，どのピットかは不明である。

SK－03（第27図）：平面プランはほぼ円形を呈している。上端径71×66cm，下端径45×43cm，深さ24cmを測り，やや小型である。南側および東側の壁面上部がよく焼け締まっている。土壙内の堆積土は，上層炭少量含む褐色土，中層炭を多く含む褐色土，下層は炭化物層の3層に分かれる。土器片はみあたらなかった。

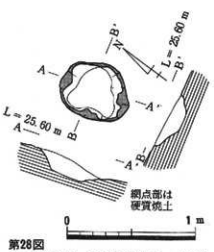
SK－04（第28図）：平面プランは楕円形をしている。上端径55×45cm，下端径38×36cm，



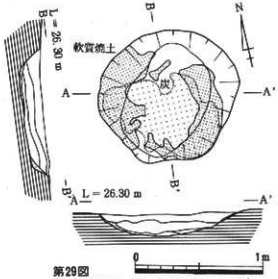
第26図　C－1（西）～E－2区第1遺構面平面図（S＝1/120）



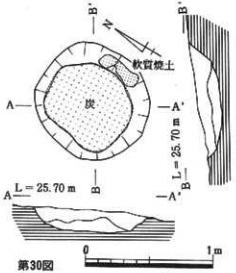
第27図
D－1区SK－03実測図（S＝1/30）



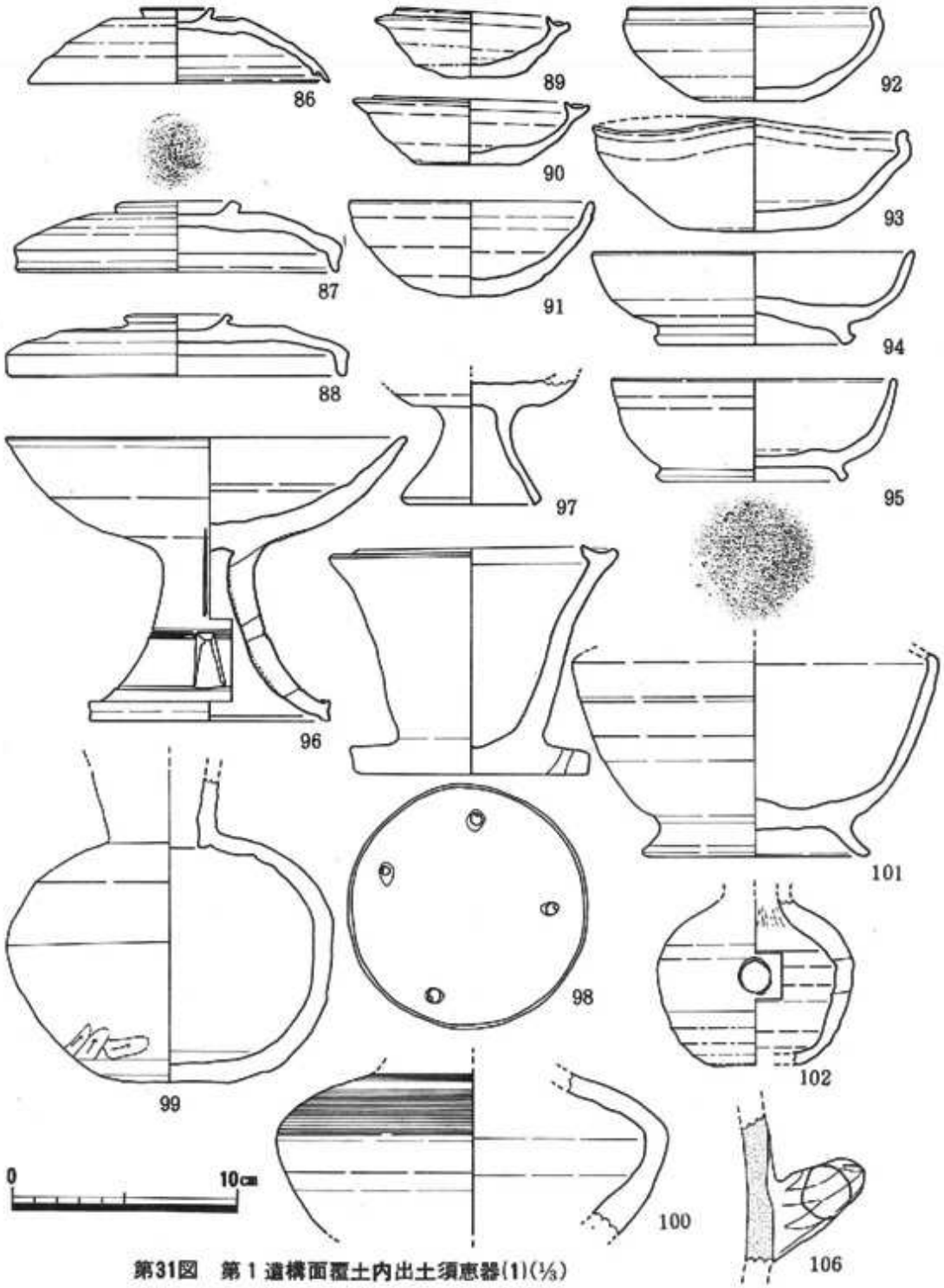
第28図
D－1区SK－04実測図（S＝1/30）



第29図
E－2区SK－07実測図（S＝1/30）

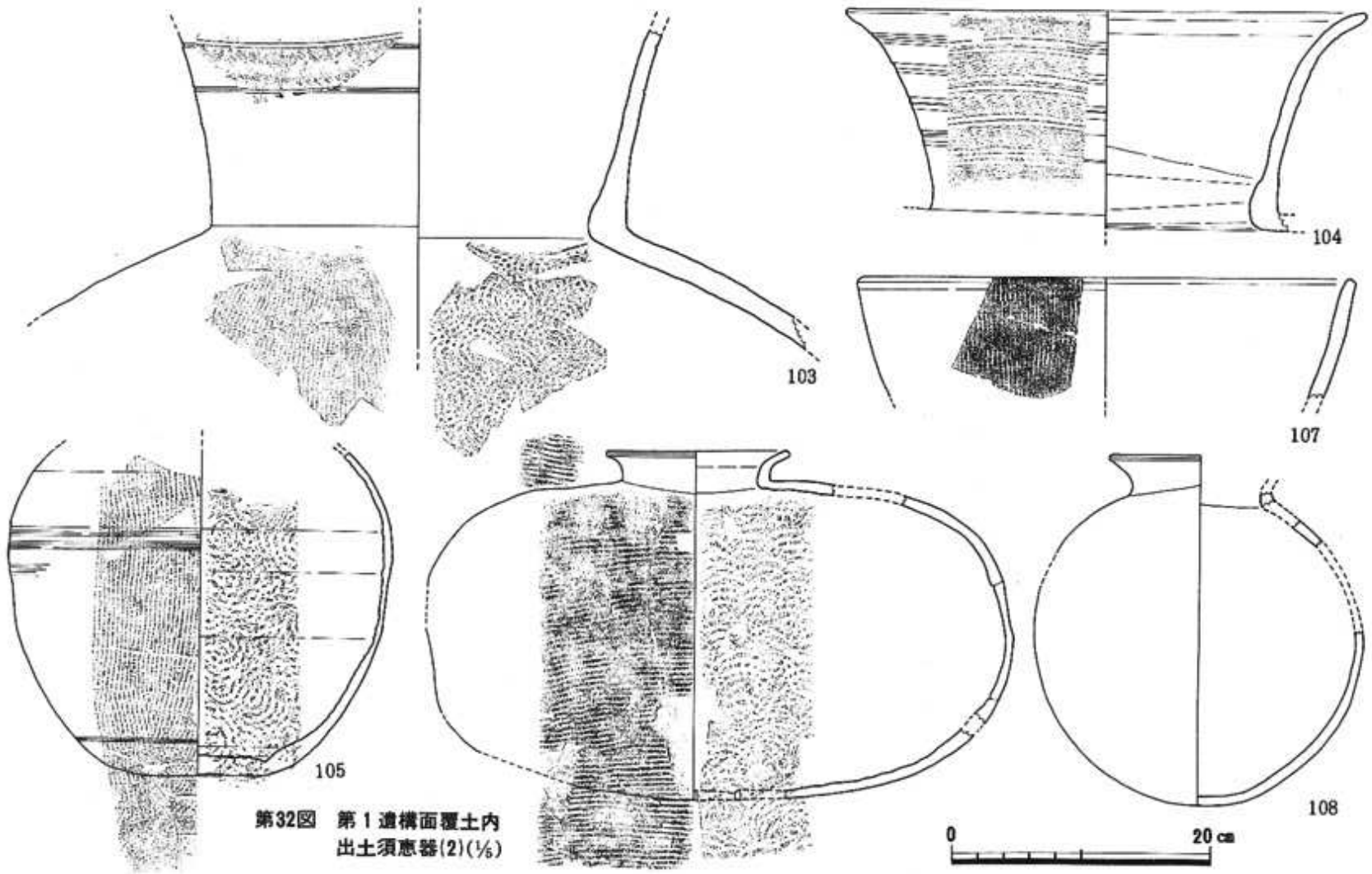


第30図
D－2区SK－08実測図（S＝1/30）



第31図　第1遺構面覆土内出土須恵器(1)(⅓)

深さ12.5cmを測り，小型の円形焼土壙である。壁面はよく焼けているが上縁部だけである。床面に焼土はなかった。土壙内の堆積土は暗褐色土一層で，炭が混じっていた。土器片は入っていなかった。

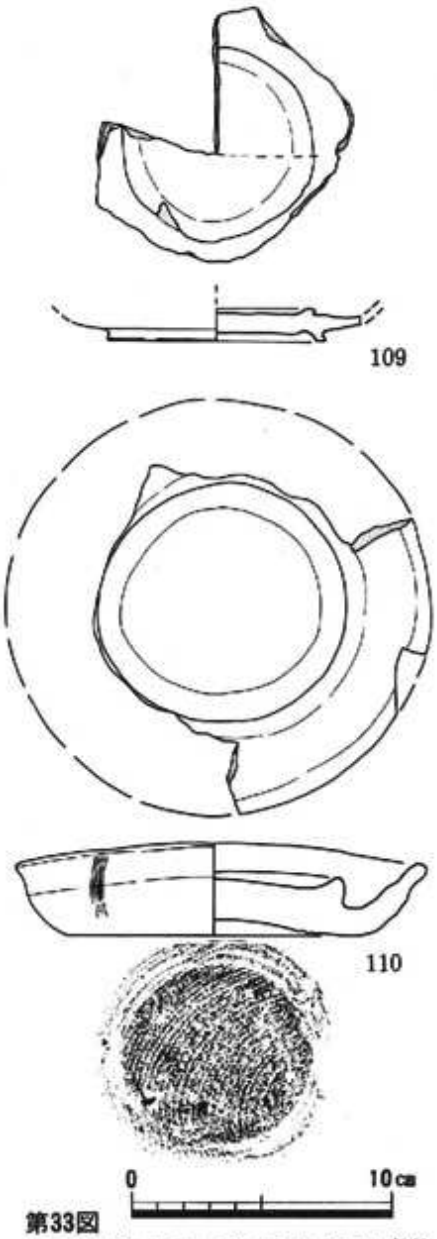


第32図　第1遺構面覆土内
出土須恵器(2)(⅙)

SK－07（第29図）：平面プランは楕円形をしている。上端径90×85cm，下端径55×42cm，深さは19cmを測る。東西両側の壁面から床面の一部に軟質の青黒色焼土が残っており，厚さは東側壁面下端で最大50mmを測る。土壙内の堆積土は4層に分かれ，上層礫混じりの暗赤褐色土，中層ブロック・炭混じりの黒灰褐色土，下層炭・灰を多量に包含した黒灰色土，最下層赤褐色土であった。土器片は入っていなかった。

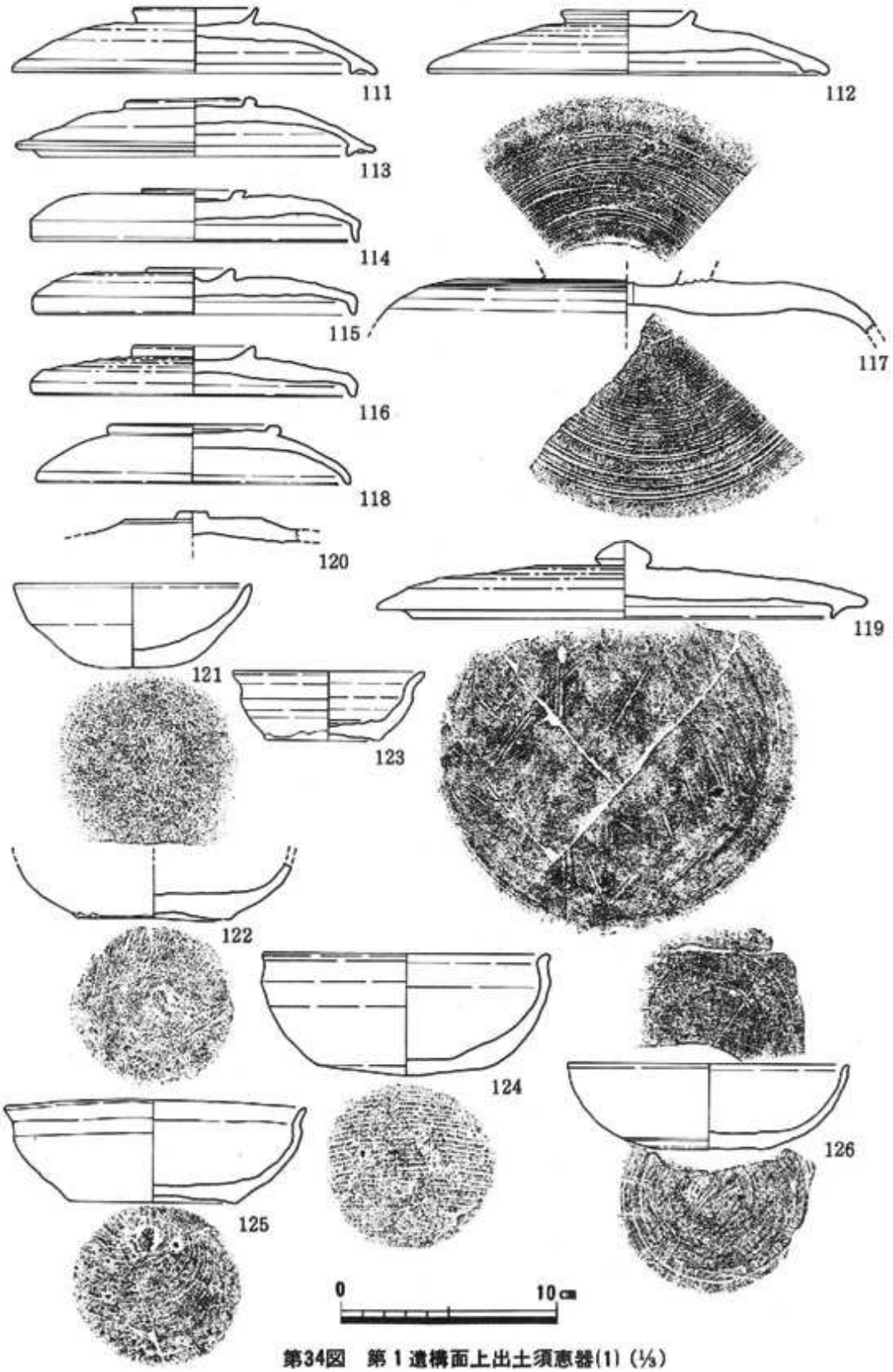
SK－08（第30図）：平面プランはやや楕円形を呈している。上端径90×85cm，下端径55×42cm，深さは19cmを測る。壁面はあまり焼け締まっていなく，床面にも焼土はなかった。土壙内の堆積土は，上層炭化物・礫混じりの暗灰褐色土，下層炭土の2層に分かれた。土器片はみあたらなかった。

覆土内および遺構面上から，須恵器，土師器，石鏃，中世の陶器片が出土している。

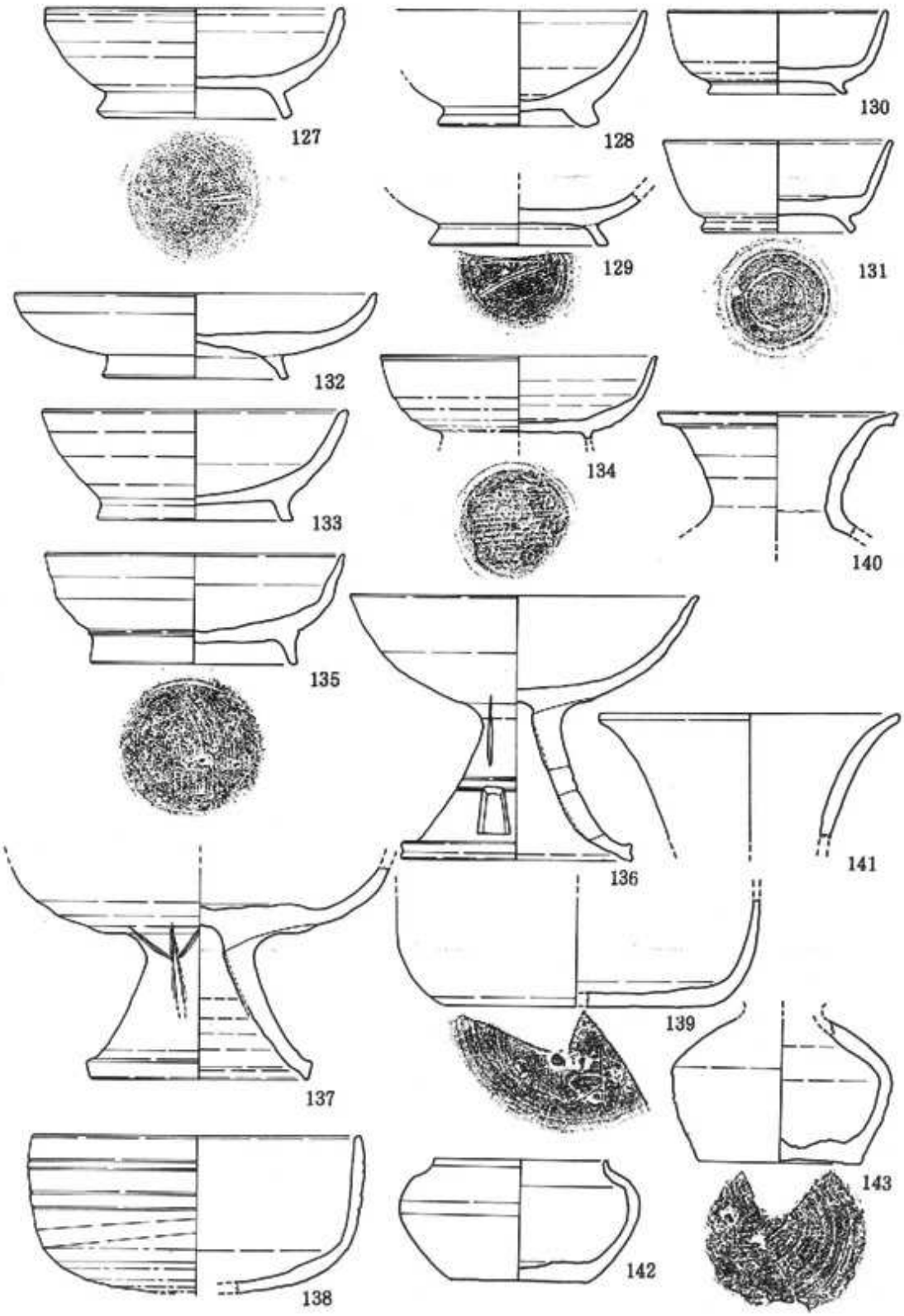


第33図
第1遺構面覆土内出土須恵器(3)(⅓)

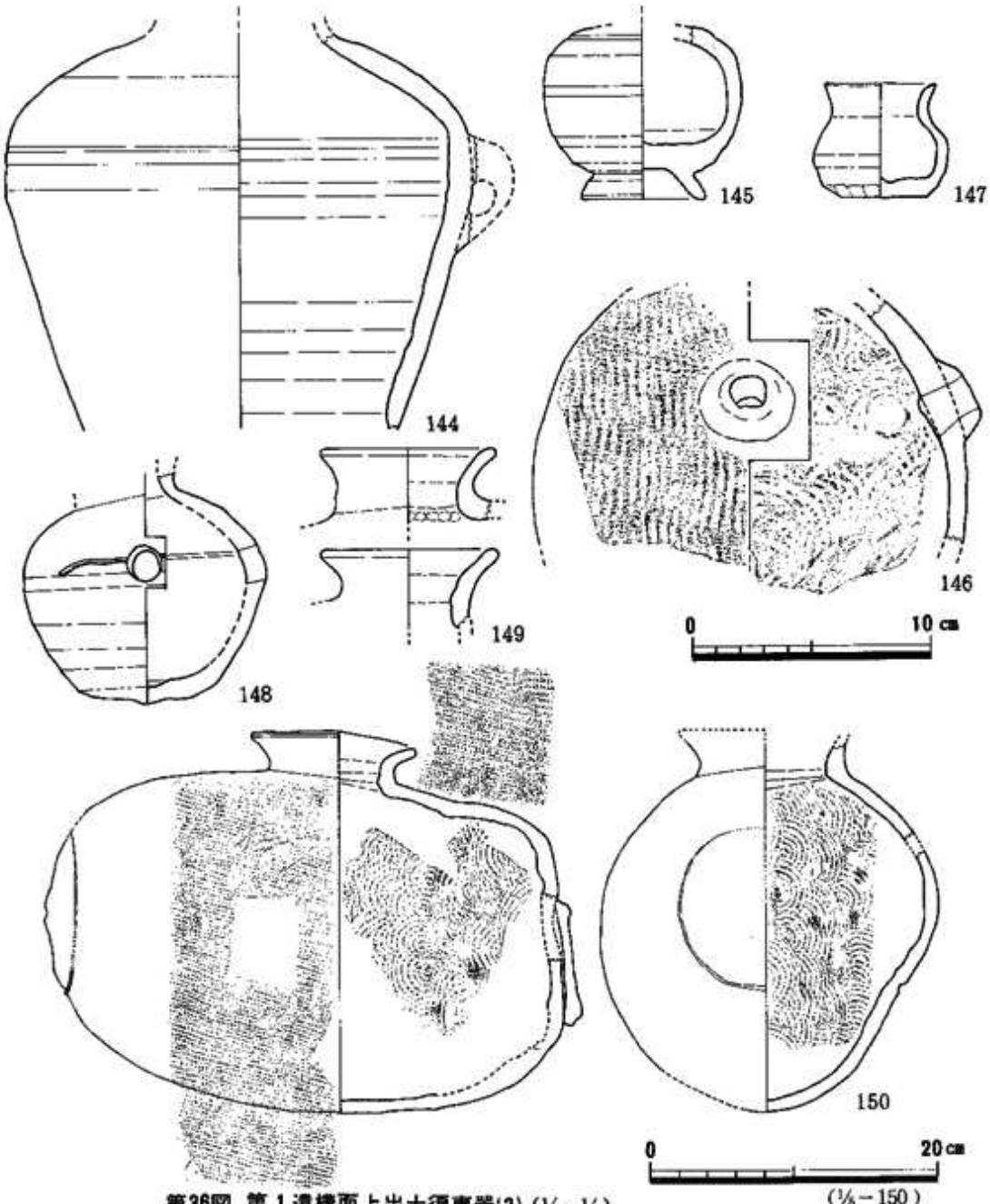
第31～33図は覆土内から出土した須恵器であり，蓋・坏・高坏・鉢・壺・甕・把手・甑・横瓶がみられる。86～88は蓋で輪状つまみを有し，86は口縁にかえりが短く付き，87・88は口縁部が短く直立するもの。89～95は坏である。89・90は小形の坏で立ち上がりは短く内傾している。高広編年のⅡA期。91も小形の坏で，半球状を呈している。やはり高広編年のⅡA～ⅡB期か。92・93は，口縁部が屈曲しており，93の底部は静止糸切り後ナデ調整を施す。高広編年のⅡA～ⅡB期か。94は高台付坏である。95の底部外面には，「－」の篦記号がある。高広編年のⅡB～ⅣA期か。96・97は高坏で，96の脚部には三条の沈線と，上段は切り込みに過ぎないが二段二方向の透しがみられる。98はジョッキ型の鉢か。底部を円盤状の台座にして安定させ，体部から口縁は朝顔状に開き，口縁部の立ち上がりは短く内傾している。台座（底部）外面よ



第34図　第1遺構面上出土須恵器(1) (⅓)

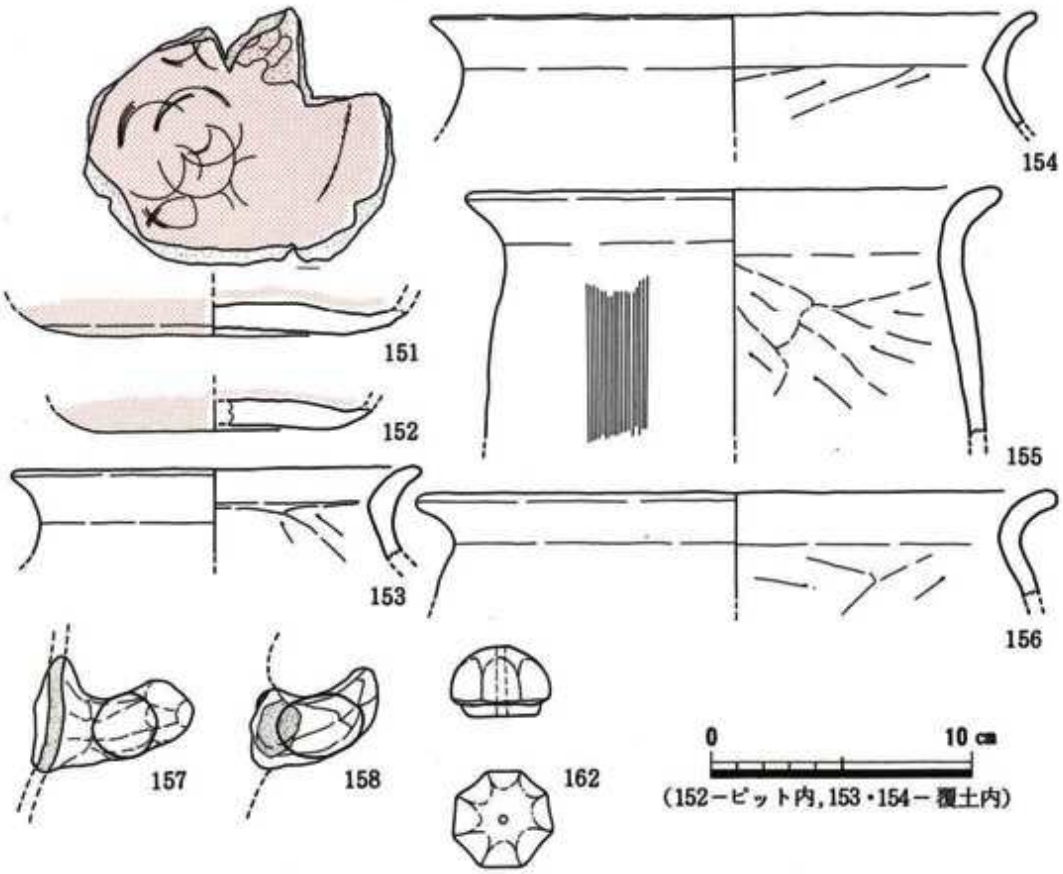


第35図　第１遺構面上出土須恵器(2) (⅓)



第36図 第1遺構面上出土須恵器(3) (⅓, ⅕)

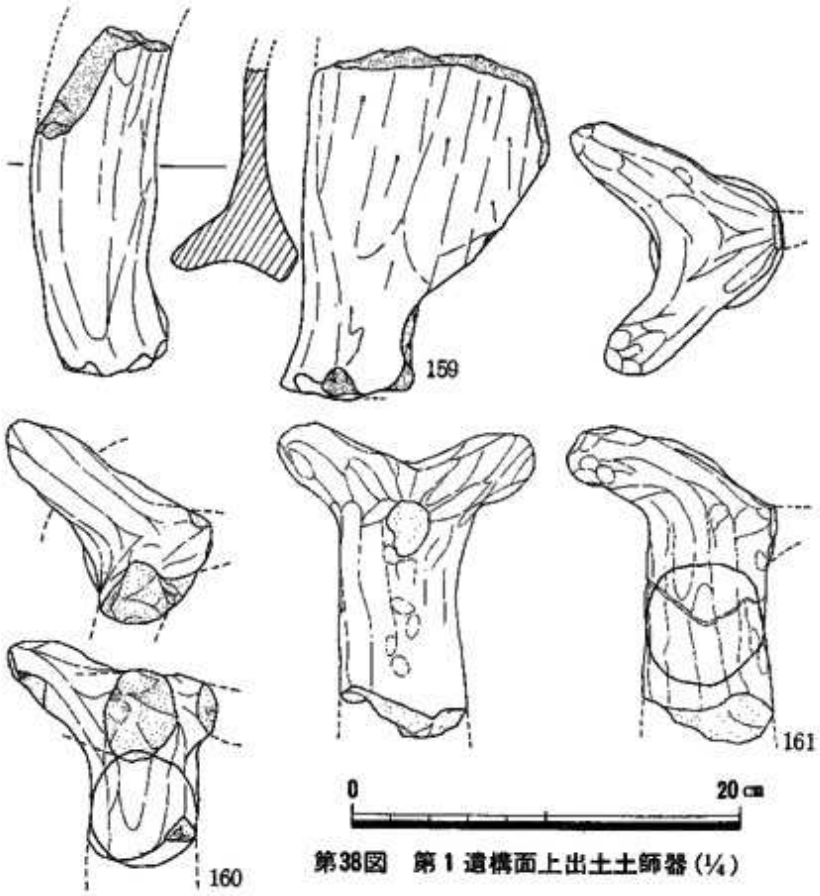
り外上方へ向けて，4か所穿孔している。台座に円孔はないが類似した土器が，池ノ奥窯跡群の灰原地区（表採），近くの鷹沢A遺跡[註1]，および，安来市の高広遺跡[註2]から出土している。この4か所の円孔は，どのような意味を持っているのだろうか。99～101は壺である。99・100は長頸壺で，101は高台を付している。102は鉢で外面に自然釉が付着している。第32図103～105は甕である。第31図106は瓶か鍋の把手と思われる。先端部に切り込みを



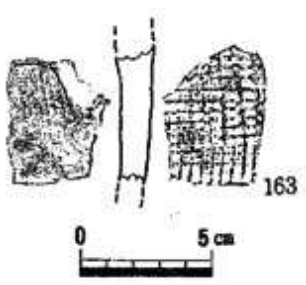
第37図　第1遺構面上および覆土内出土土師器 (⅓)

入れている。第32図107は甑か鍋の口縁部。108は横瓶で，肩部に「×」印の篦記号がみられる。第33図109は托と思われる。110は円面硯か。陸部に使用痕跡は認められず，一定方向の静止ナデがみられる。底部外面には静止糸切り痕を残す。

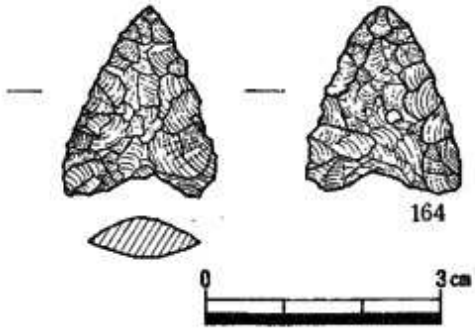
第34～36図は遺構面上出土の須恵器である。111～113は，輪状つまみを有し口縁内面のかえりが付く蓋である。高広編年のⅢA～ⅢB期。114～116は，輪状つまみを有し口縁部が短く直立するもので，高広編年のⅢB～ⅣA期か。117は大形の蓋で，輪状つまみが剝離した痕があり，天井部中心に円孔を穿き，内外面に櫛状工具によるカキ目調整が施されている。円孔の意味は不明である。118も蓋と思われ，口径の大きな輪状つまみを有し，静止糸切り痕を残している。119は大形の蓋で，宝珠状のつまみを有し口縁内面のかえりは鋭い。高広編年のⅢA期か。120は，乳頭状のつまみを有する蓋である。121～126は，無高台の坏である。121は高広編年ⅡA期の坏か。122の底部内面には，「⊥」印の篦記号がみられる。123は小形の坏である。124・125は静止糸切り痕を残す。高広編年のⅢB～ⅣA期か。126には，底部と体部の境目に篦状工具による沈線状のものが，一～三条施さ



第38図　第1遺構面上出土土師器(¼)



第39図
第1遺構面上出土中世陶器(½)



第40図　第1遺構面上出土石鏃(½)

れている。第35図127～135は高台の付く坏である。127・129は底部外面に篦記号が施されている。134・135には，静止糸切り痕がみられる。136・137は高坏である。脚部に，136は二条の沈線と二方向の上段切り込みで下段は台形の透しを施し，137は二方向に切り込みを入れ，片側は「Y」形を呈している。138は鉢で，四条の沈線を施している。139も鉢で，底部外面に「⊥」印の篦記号がある。140～143，第36図144～146は壺類である。140・141は，長頸壺の口頸部である。142は短頸壺である。143の底部は，静止糸切り後ナデ調

整を施している。144は長頸壺の胴部で紐の剝離痕がみられる。145は高台の付く小形壺である。146は，胴部に円孔があるが意味不明。第36図147は坩で，底部から上1cm弱ぐらいまでの間に，粗い篦削りの痕がみられる。148は鉢で，胴部上半に一条沈線が入るが一周していなく中途で切れている。粗雑な感じで焼成不完全か。149は提瓶の口頸部か。150は横瓶であるが，非対称で全体に大きく歪んでいる。肩部に「×」印の篦記号がある。

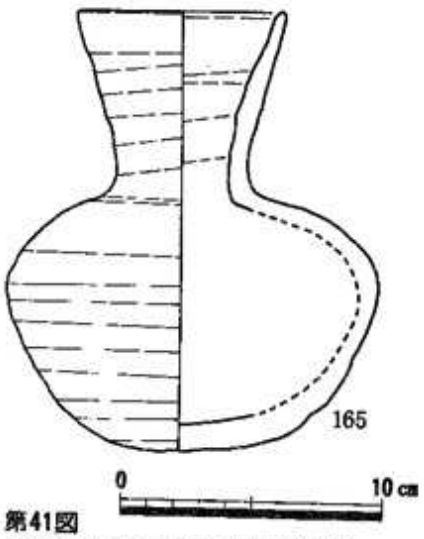
第37・38図は，遺構面上および覆土内から出土した土師器で，内外面ともに赤色塗彩を施し暗文を入れた坏，甕・把手・竈・土製支脚がみられる。また，第37図162は土師質の土製品で，つまみあるいは栓のような形状をしており，上部は8面取りをし中央部に円孔が上下に貫通している。

第39図163は，中世の陶器片で亀山焼系統のものであろう。

第40図164は，鏃型凸二角形をした黒曜石製の石鏃である。

○第2遺構面

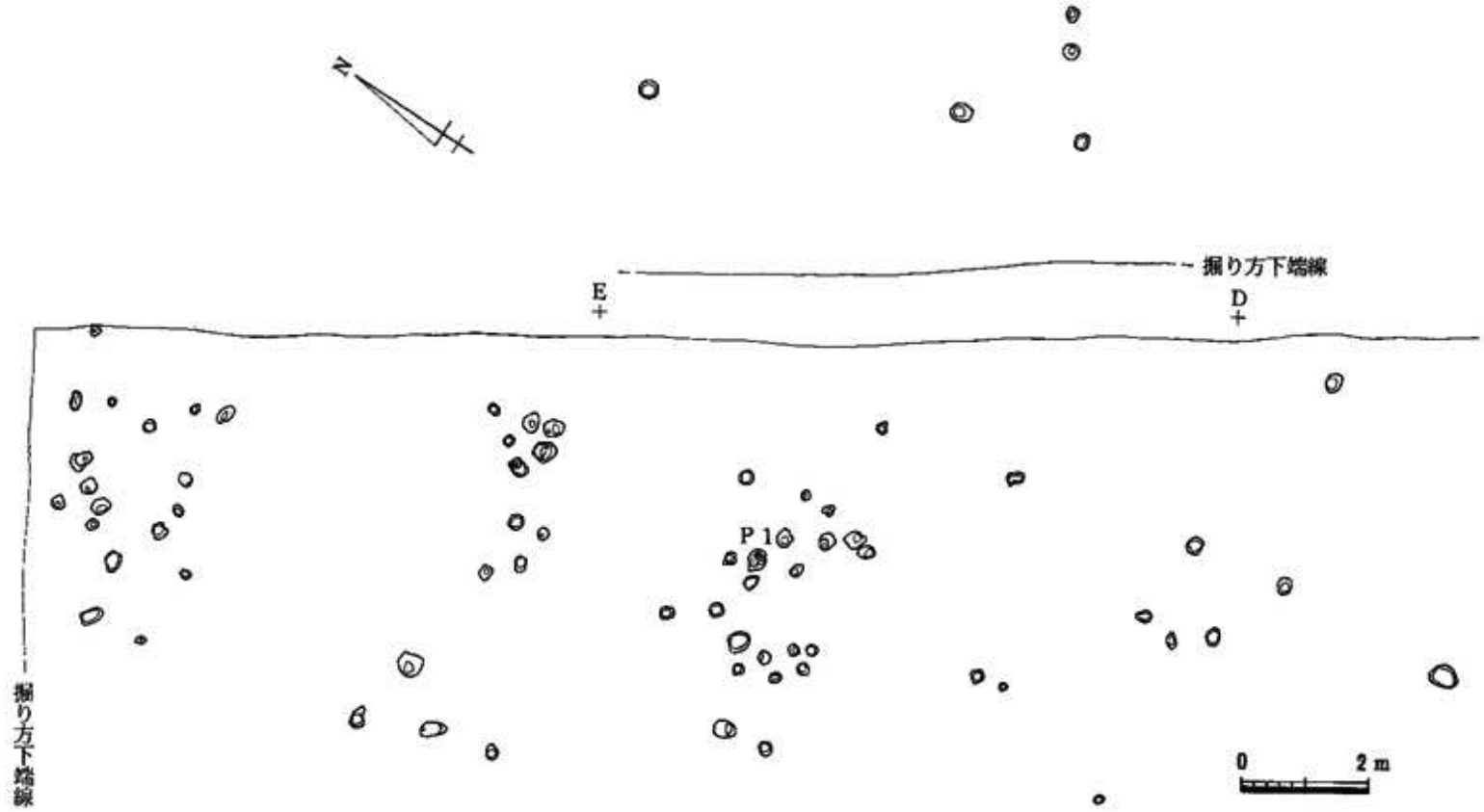
1区側では地山面，2区側では19層明茶褐色粘質土上面にあたる遺構面である。やはり，A−1〜C−1(東)区の第2遺構面のつづきであると思われる。ピット71穴を検出した。このピット群は不規則に並び形状，法量もともに大小様々であり，建物とするには至らなかった。ピットの法量は最大25×30×30cmから，最小15×15×10cmであった。P1内から，ほぼ完形に近い須恵器長頸壺（第41図165）が出土した。（第42図）



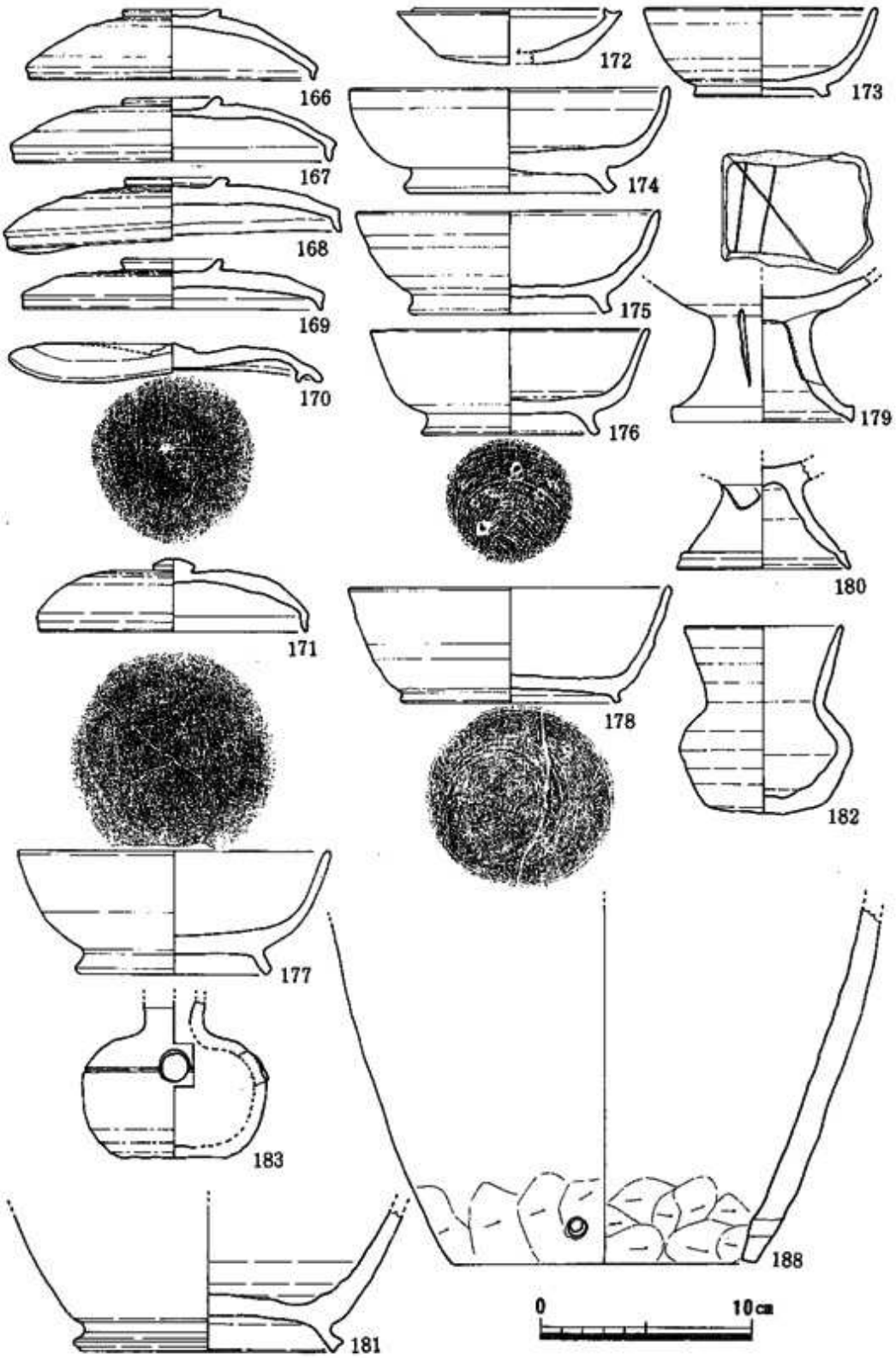
第41図
第2遺構面P1内出土須恵器（½）

覆土内からは，須恵器と少々の土師器が出土している。しかし，この遺構面上からはP1内出土の須恵器長頸壺以外には少量の土器片しか出土していない。

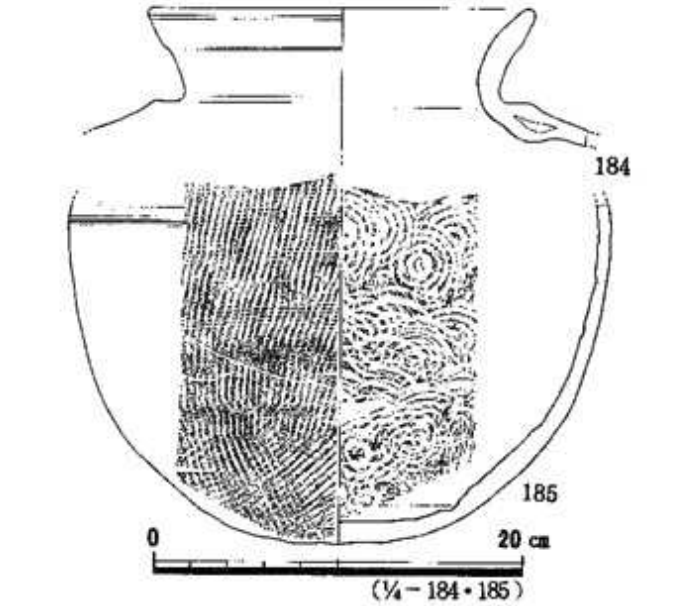
須恵器（第43・44図）には，蓋・坏・高坏・壺・坩・鉢・甕・甑がみられる。166〜169は蓋で，輪状つまみを有し口縁部が短く直立するもの。169の外面は他の土器を重ねられなかったところが赤茶灰色に発色している。高広編年のⅢB〜ⅣA期。170は口縁内面のかえりが付き，天井部内面に「×」印の篦記号があり，171は口縁部が短く直立し，ともに宝珠状つまみを有するもの。172は無高台の坏で，立ち上がりが短く内傾するもの。173〜178は，高台の付く坏である。176は，底部外面に静止糸切り痕を残すもの。177は，底部内面に「×」印の篦記号がみられる。178は高台が底部と体部の境目付近に付き，体部は直線的に開いている。底外面に回転糸切り痕を残し，高台を貼り付けた時についたと思われる

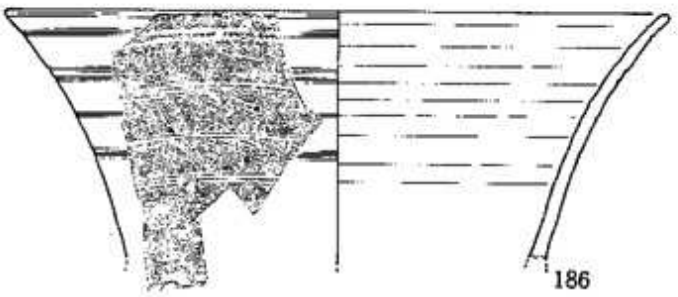


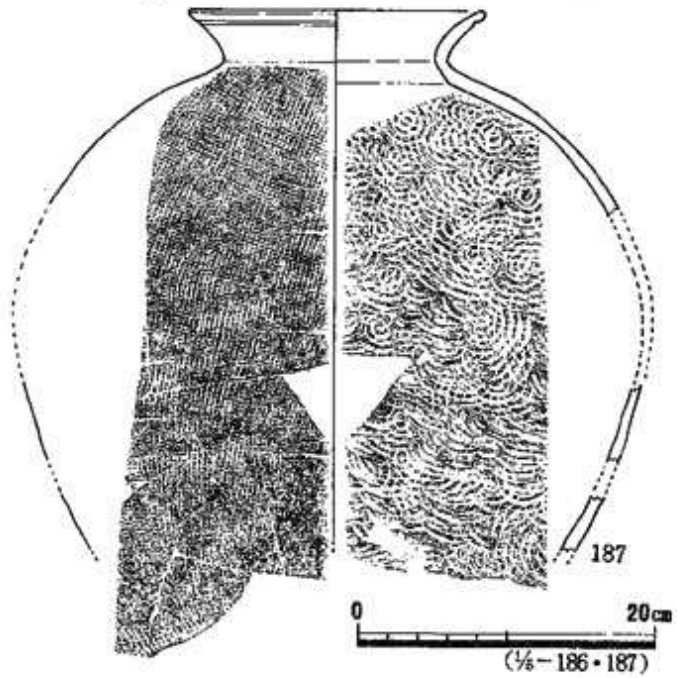
第42図　C－1（西）～E－2区第2遺構面平面図（S＝1/120）



第43図　第２遺構面覆土内出土須恵器(1) (⅓)



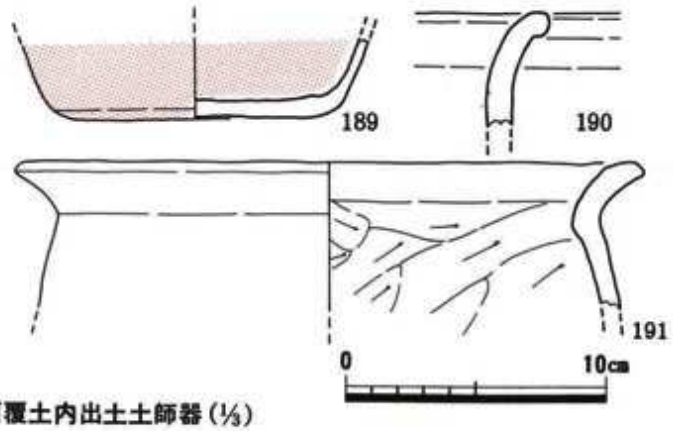




第44図　第２遺構面覆土内出土須恵器(2)(¼，⅛)

爪痕がみうけられる。高広編年のⅣB期か。179・180は高坏である。179は脚部の二方向に篦による切り込みが貫通し，坏部内面には「チ」印の薄い篦記号がみられる。180の脚部も「釣り針」型の篦記号がみられる。181は高台を付す壺で，182はやや大きめの坩である。183は甕で，体部上半に浅い沈線を一条入れる。第44図184～187は甕である。第43図188は甑で，底部の穿孔は４方向と思われる。

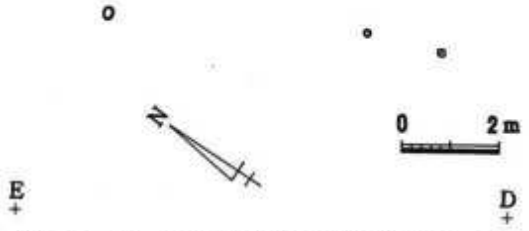
第45図は土師器で，内外面ともに赤色塗彩を施した坏や甕類がみられる。



第45図
第２遺構面覆土内出土土師器（⅓）

○第３遺構面

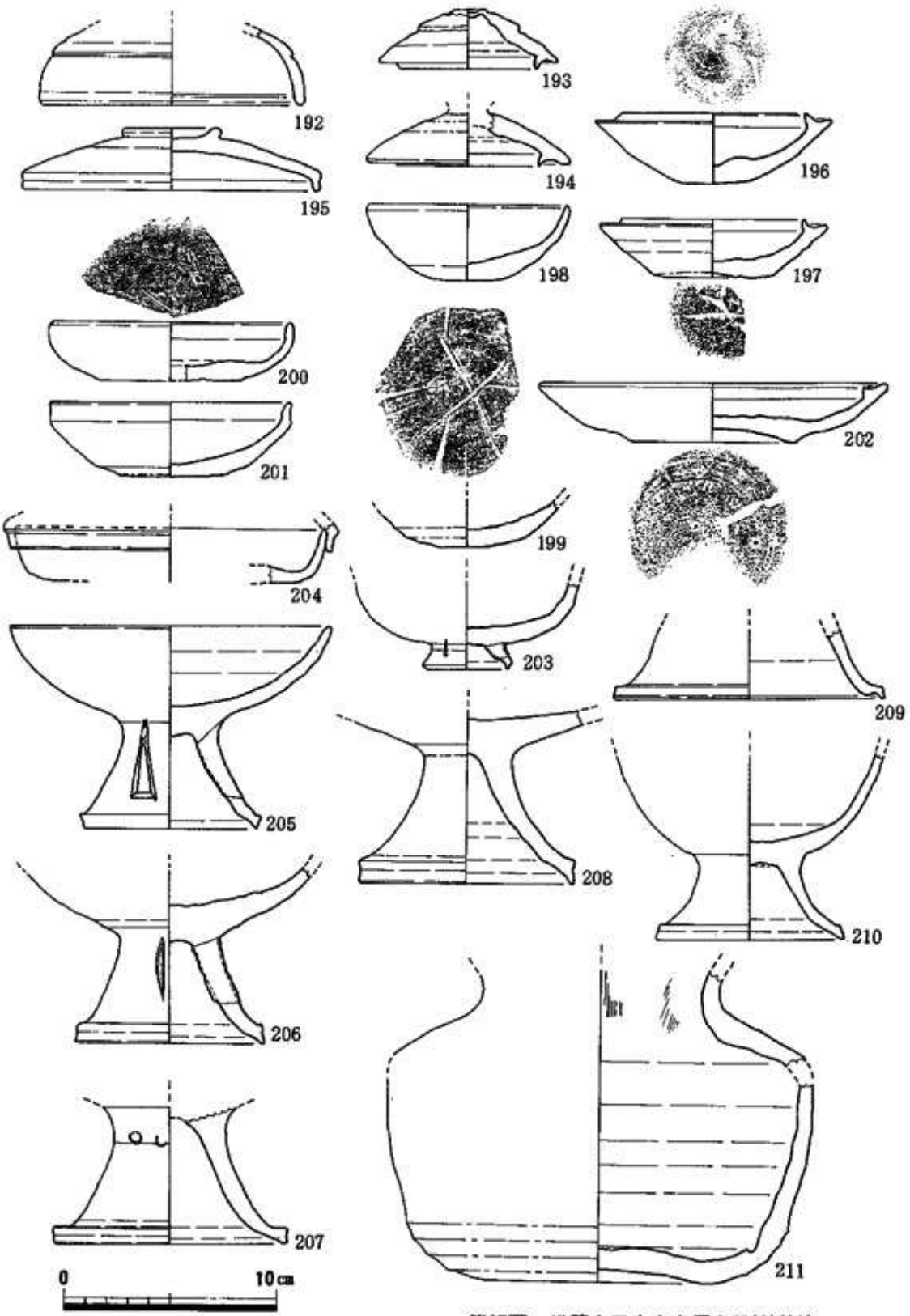
D－2区地山面で検出した。小ピット３穴以外の遺構はみあたらなかった。この地山面からは，土器片も３片しか出土していない。（第46図）



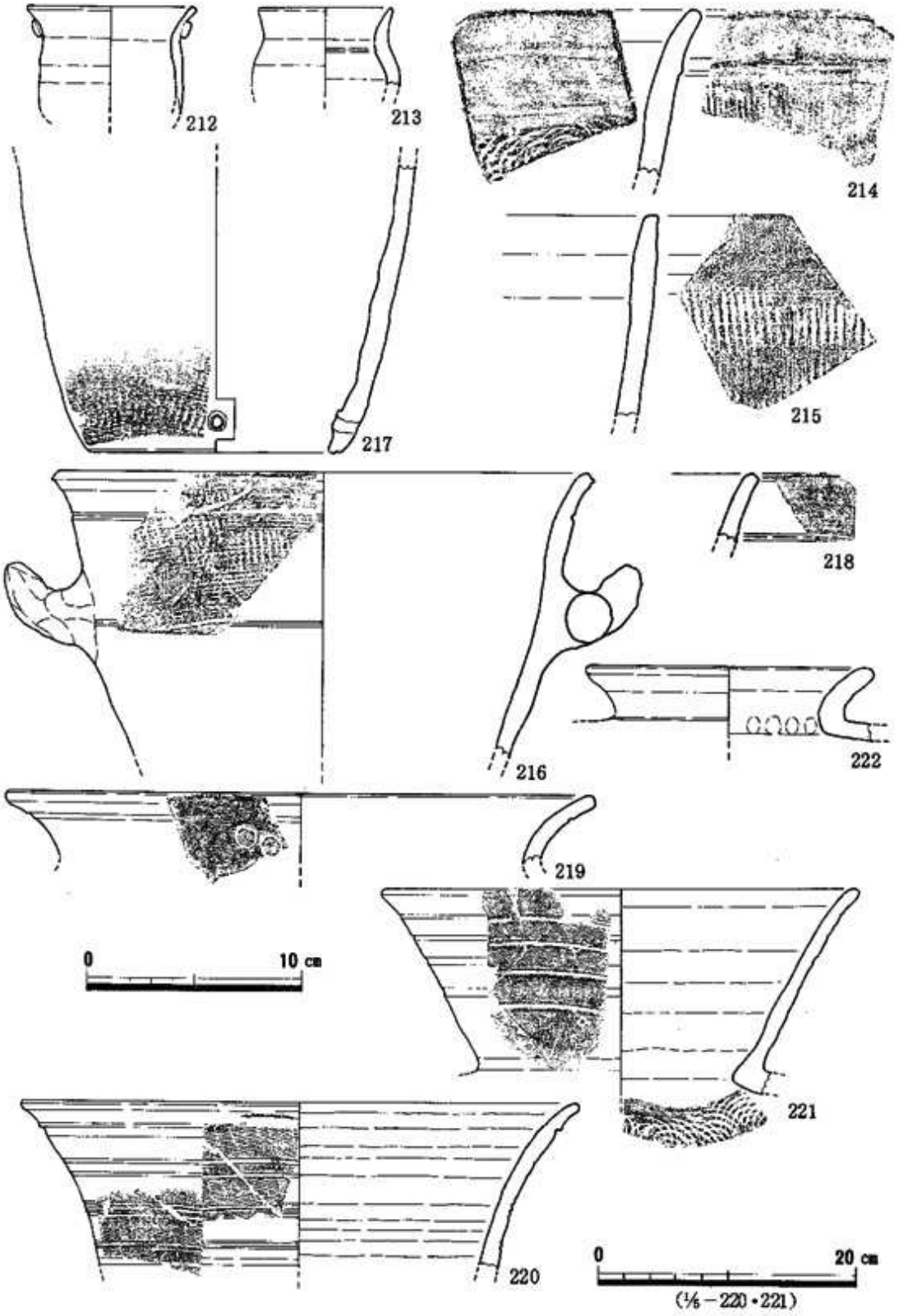
第46図　D－２区第３遺構面平面図（S＝1/120）

○表土および堆積土層からの出土遺物

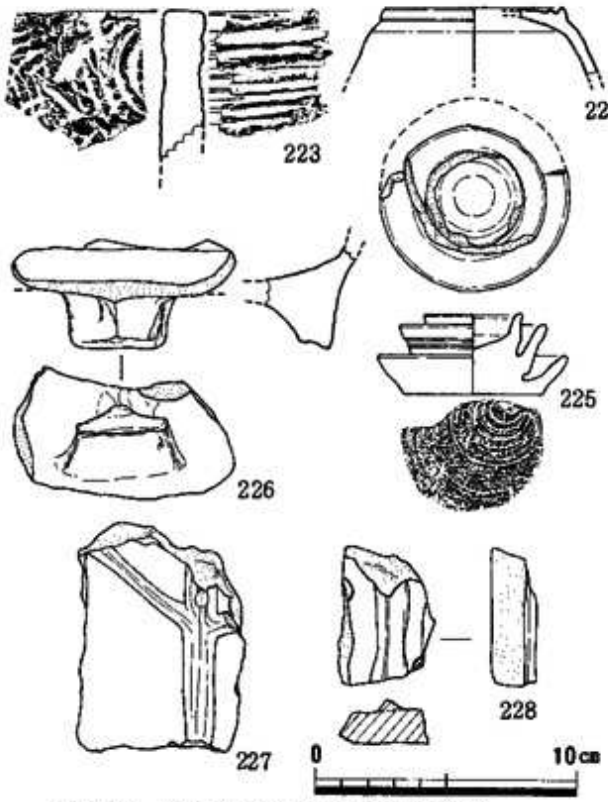
須恵器（第47～49図）は，蓋・坏・高坏・鉢・壺・坩・甑・甕・横瓶と様々な器種が出土している。192～195は蓋である。192は山本編年のⅢ期。193・194はかえりの付いた小形の蓋で，194には宝珠状つまみが付いていたと思われる。195は，口縁が屈曲し輪状つまみを有している。196・197は高広編年のⅡA期のもので，篦記号を付している。198も高広編年のⅡA期。199・200は，底部内面に「×」印の篦記号がある。201は屈曲口縁の坏で，202は回転糸切り痕を残す。203は低脚付きの坏か。204は蓋と坏との重ね焼きの破片である。205～210は，高坏である。205は脚部に二方向の一段透しを，206は二方向の切り込みをもち，207には竹管文が二つみられ，208は透しも切り込みもない。209の外面は，赤茶褐色を呈しており柿渋を塗り付けたものか。210も低脚の高坏か。211は平底の壺である。第48図212・213は坩で，212には頸部にボタン状の飾りが付き，213は内面に一条の沈線を巡らしている。214～217は甑で，217の底部内面に円孔を穿つ時の指押さえの痕がみられる。218～221は，甕である。218は薄い波状文と沈線がみられ，219には竹管文が二つ残っている。220・221は大甕の口頸部で，櫛描波状文と沈線が施されている。222は横瓶の口頸部である。第49図223は壜の破片で，イガラビ１号墳出土の壜とは違うタイプのものである。224は硯の破片か。225は須恵質の灯明皿で，三段重ねで一体化しており，巧妙



第47図　堆積土層内出土須恵器(1)(⅓)



第48図　堆積土層内出土須恵器(2)(⅓, ⅙)



第49図　堆積土層内出土須恵器(3)(⅓)

に作られているので接合痕はわからない。底部に回転糸切り痕を残す。226は須恵質のもので形態不明。底部はゆるやかな丸みを持ち，内面にカキ目調整を施す。脚部は低く三角柱状になっている。生焼けのためか外面灰褐色，内面淡赤褐色を呈している。また，227・228の2片は，池ノ奥C遺跡の特殊土器片で，池ノ奥C遺跡発見以前に出土したものである。

第50図は土師器類である。229は土師質土器片で，内外面にカキ目がみられる。230は内外面ともに赤色塗彩を施した坏で，回転糸切り痕を残す。231・232は壺・甕類で，胴部外面は刷毛目調整を，内面は篦削りを，231は口頸部内面にも刷毛目調整を施している。233は竈で，234・235は土製支脚である。

土馬（第51図）は，須恵質のものが4点出土している。236は胴部だけ残存している。股間に粘土を貼り付け男根を表現しており，胴部に比して頭部はかなり大きいように思われる。焼成前に柿渋を塗った可能性があり，赤褐色に発色している。237は脚の一部，238・239は尾の部分である。

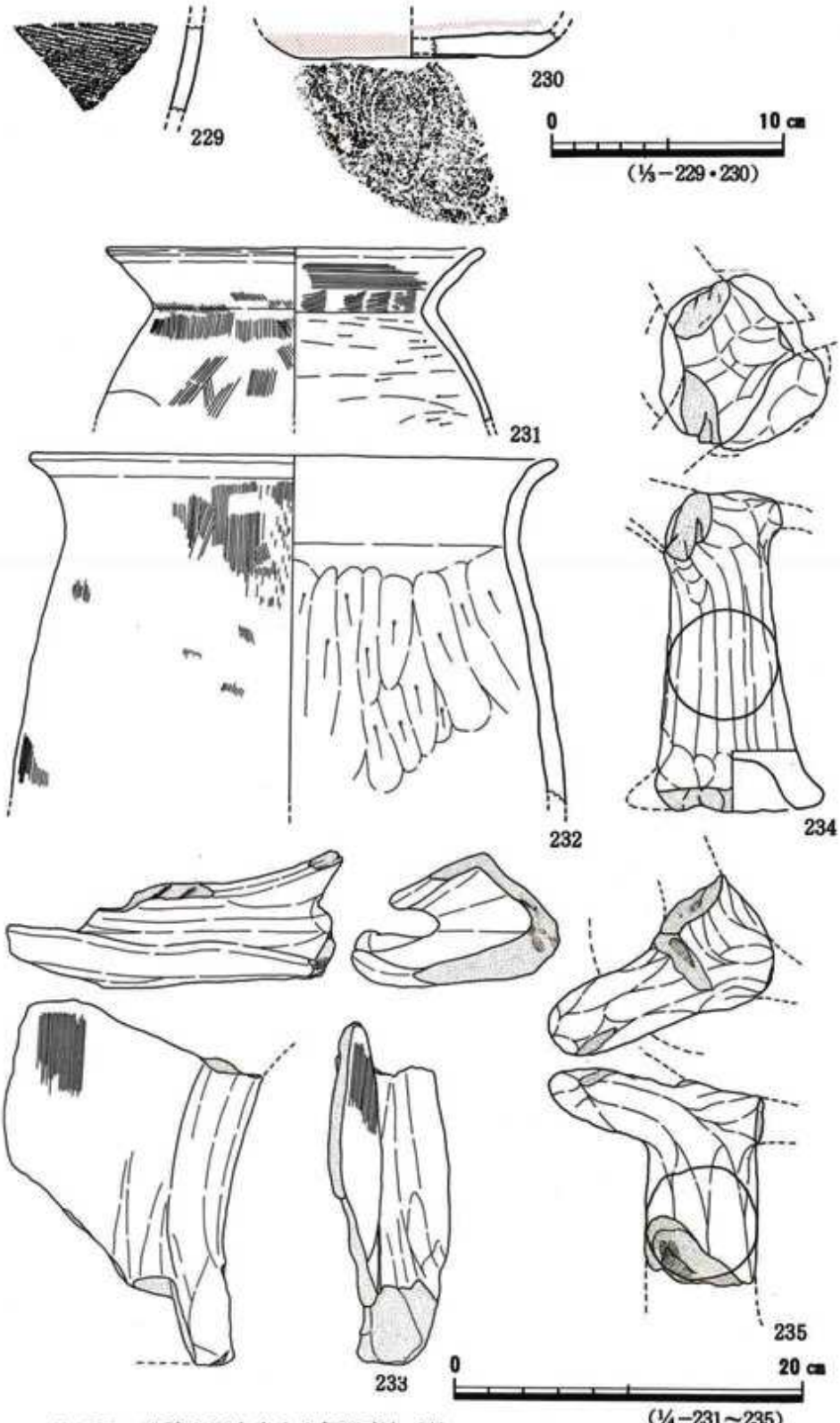
第52図240・241は中世の陶器片で，亀山焼系統のものであろう。

土錘も47点出土しており，1点だけ瓦質のもの（137頁第96図496）で，他はみな土師質である（136頁第95図430～449，137頁第96図450～475）。

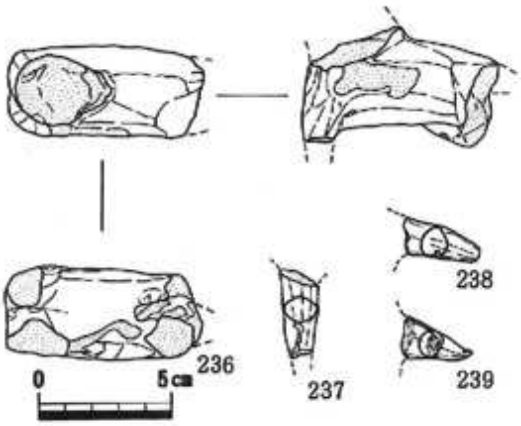
註

註1　松江市教育委員会『鹿沢A遺跡，鹿沢B遺跡，別所遺跡』1988年

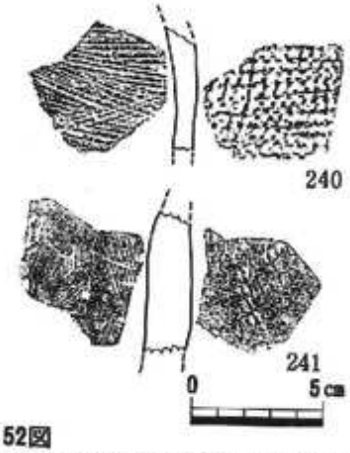
註2　島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984年



第50図　堆積土層内出土土師器(⅓, ¼)



第51図　堆積土層内出土土馬（⅓）



第52図
表土および堆積土層内出土中世陶器（⅓）

［F－1～G－2区］

表土から最下層の地山までの間に14層を数える。深さは，谷間中央部の1・2区間畦畔のところで，1.0～1.4mを測る。地山は，2区側では赤みを帯びているが，概ね明褐色を呈している。（第53図）

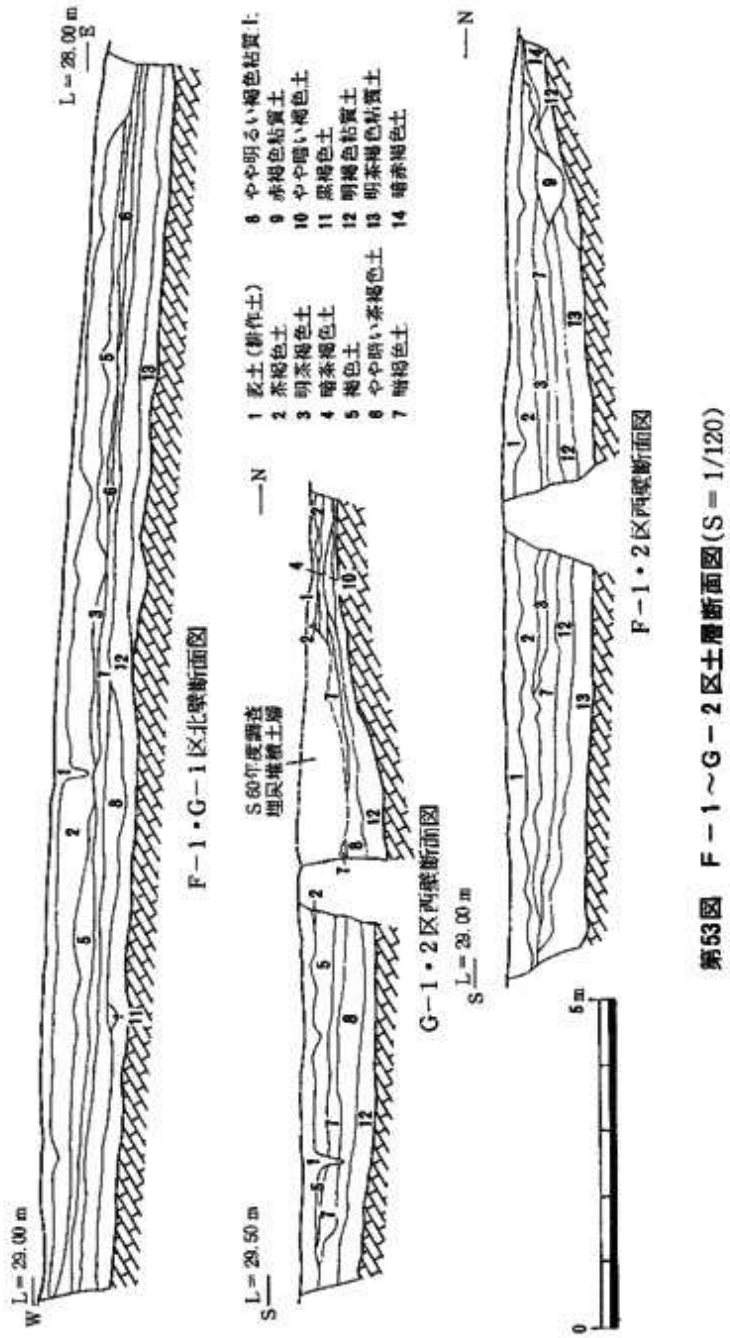
調査の結果，三つの遺構面を確認した。遺物は，小範囲にしか存していない3層，9層，10層，11層，14層以外の層全てから出土しているが，量的には東側のA～E区に比べるとかなり少ない。また，表土および7層暗褐色土までの堆積土層内に，池ノ奥1号墳の須恵器甕片16片，池ノ奥C遺跡の特殊土器片3片が紛れ込んでいた。

○第1遺構面

G区側では8層やや明るい褐色粘質土上面，F区側では12層明褐色粘質土上面にあたる遺構面である。円形土壙1基（SK－14），ピット50穴，炭土2所，性格不明遺構1所を検出した。ピットは，A～E区の各遺構面のピット群と同様に，形状，法量ともに大小様々でまとまりがなく，建物とすることはできなかった。（第54図）

SK－14：平面プランは楕円形を呈している。上端径50×38cm，下端径43×32cm，深さは8cmを測る。壁面には焼土はみあたらないが，南側床面に固く焼け締まった焼土が，堆積していた。土壙内の堆積土は暗褐色土だが，炭の量により，三つに分けることができた。

第55図は，覆土内から出土したもので全て須恵器である。土師器は，図化できるものがなかった。242・243は坏である。242は半球状のもので，篦切り後外面は回転ナデを施している。243は低脚の付く坏。脚部だけ残存。244は壺で，肩部内面に指頭圧痕がみられる。245～248は，坩である。248は，頸部から肩部にかけて沈線が施されている。249は把手の部分。250は甕の口頸部。



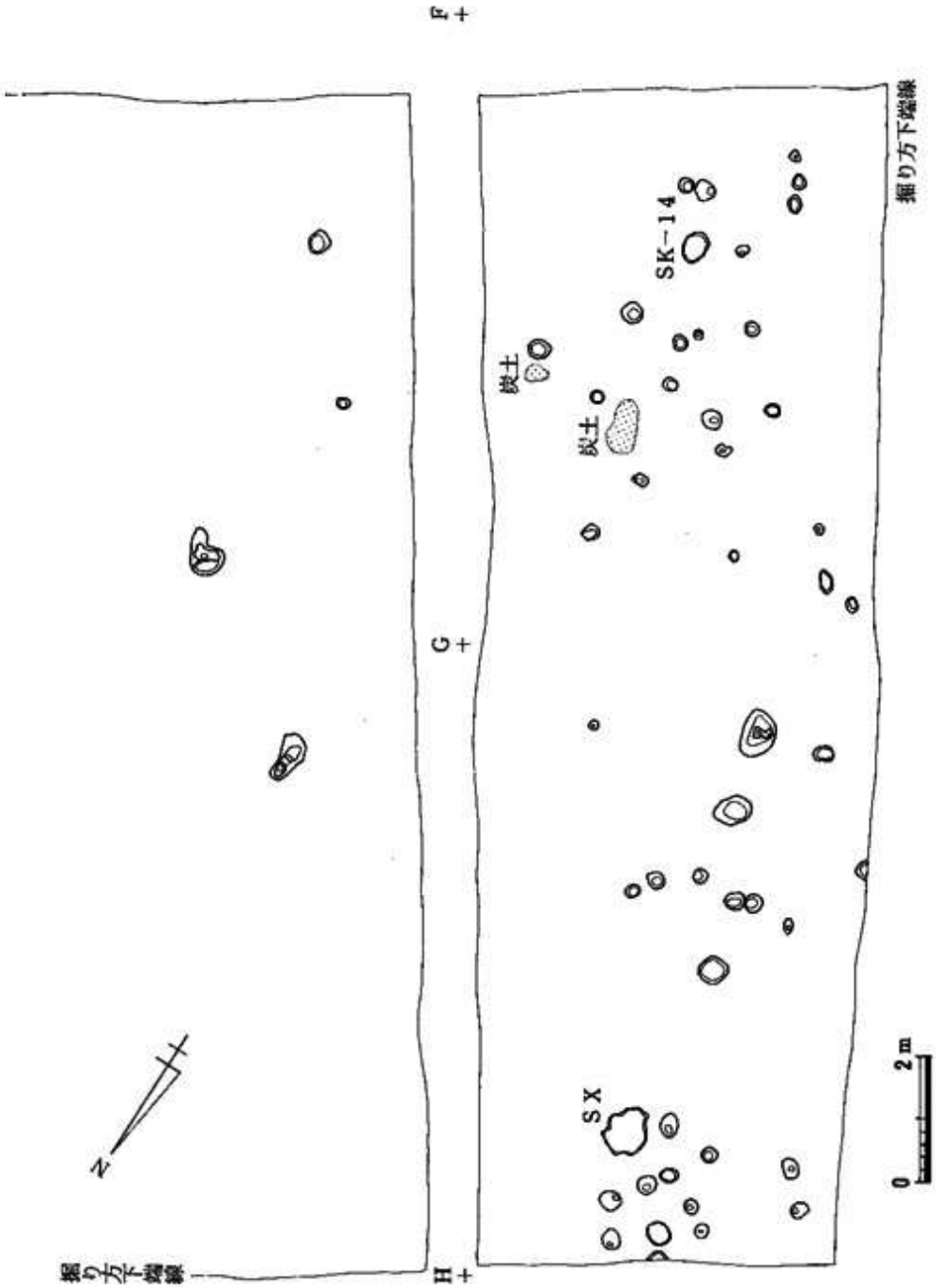
第53図　F－1～G－2区土層断面図（S＝1/120）

第56図は遺構面上から出土したもので，259は土師器の壺類で，他は須恵器である。251は蓋で，宝珠状つまみを有し周囲に回転糸切り痕を残している。252は坏で，底外面に回転糸切り痕を残し，体部はやや丸みを帯びている。高広編年のⅣA期か。253は小形壺で，254～258は坩である。坩は平底をしており，切り離しは篦切りである。256は肩部にボタン状の飾りが三つ貼り付けてある。

○第2遺構面

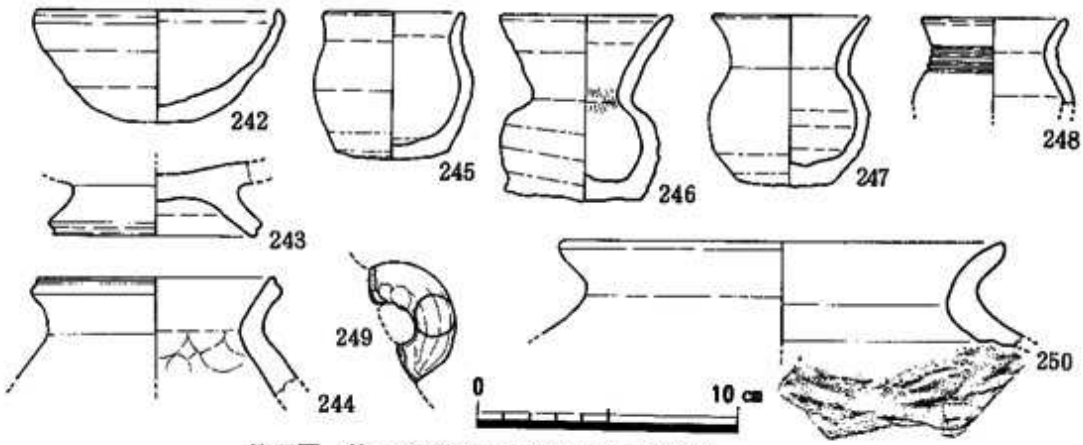
G区において，第1遺構面下約16～36cmのところにある12層明褐色粘質土上面で検出した遺構面である。円形焼土壙2基（SK－10・11），ピット18穴，焼土2所，炭土2所を確認した。ピット群から建物を組むことはできなかった。（第57図）

SK－10（第58図）：平面プランは楕円形を呈している。上端径125×110cm，下端径95×80

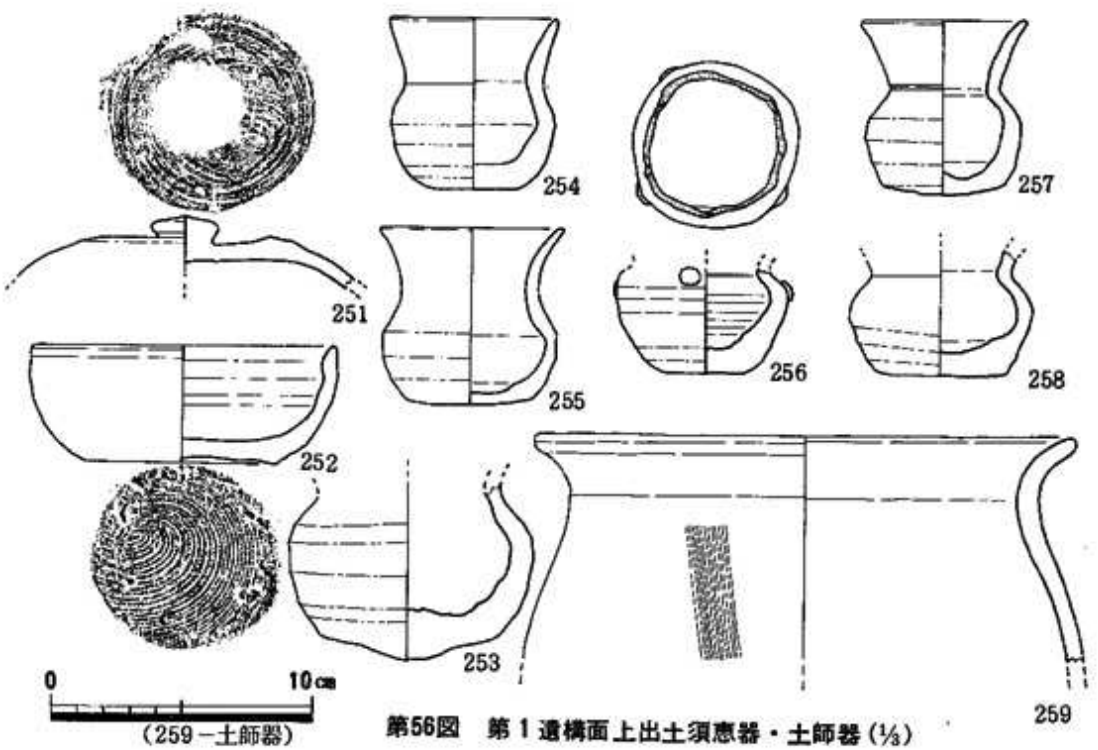


第54図　F－1～G－2区第1遺構面平面図（S＝1/120）

cm，深さは32cmを測る。東側から南側にかけての壁面は，厚さ最大で25mmを測る硬質の青灰色焼土に，北西側の壁面では，やや硬質の襞の付いた茶褐色焼土となっていた。床面には焼土はなく，小ピットが3穴（15×13×20cm，15×13×17cm，10×8×6cm）あった。土壙内の堆積土は，上層炭の混じったやや暗い褐色土，中層炭の混じった褐色土，下層炭土，そして最下層褐色土の4層に分かれた。最下層上には，壁面から崩れ落ちたと思われ



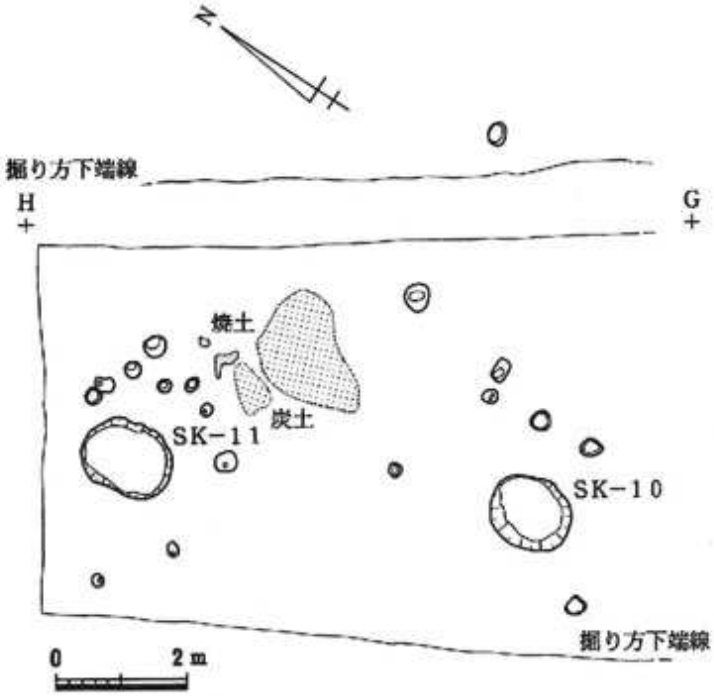
第55図　第１遺構面覆土内出土須恵器（⅓）



第56図　第１遺構面上出土須恵器・土師器（⅓）

る硬質の青灰色焼土，および，やや硬質の茶褐色焼土がみられた。土器片は混入していなかった。

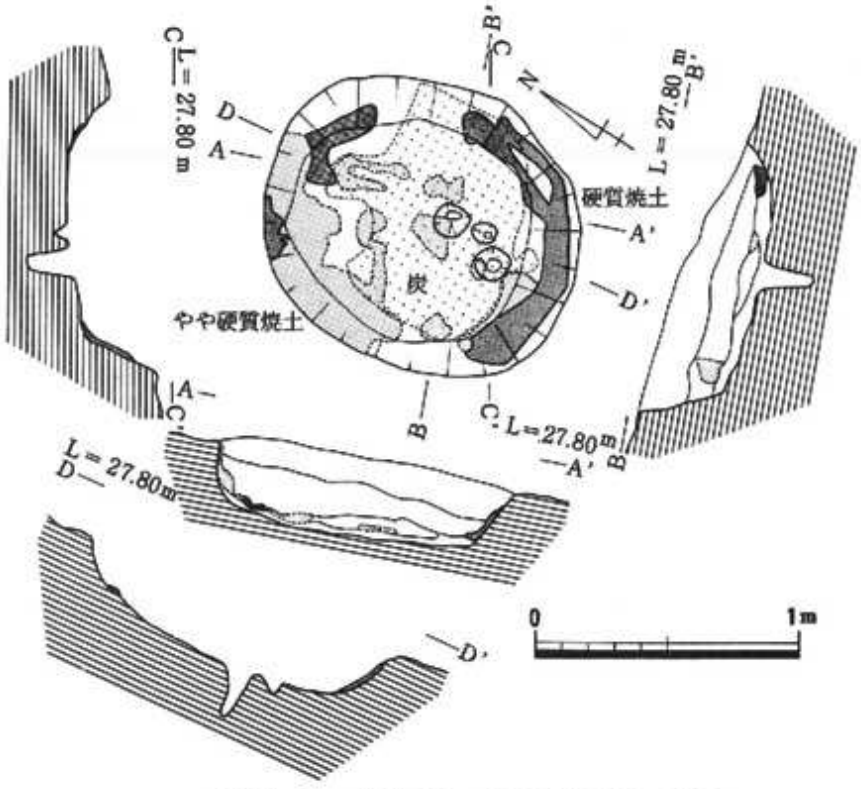
SK－11（第59図）：平面プランは楕円形を呈している。上端径139×105cm，下端径120×90cm，深さ25cmを測り，本遺跡で一番大きな円形焼土壙である。壁面上部のところどころ，および，床面の一部が硬質の青灰色焼土に，床面の数か所が硬質の茶褐色焼土に覆われていた。土壙内の堆積土は３層に分かれ，上層炭を含むやや暗い褐色土，中層炭を含む褐色土，下層炭土であった。土器片は入っていなかった。



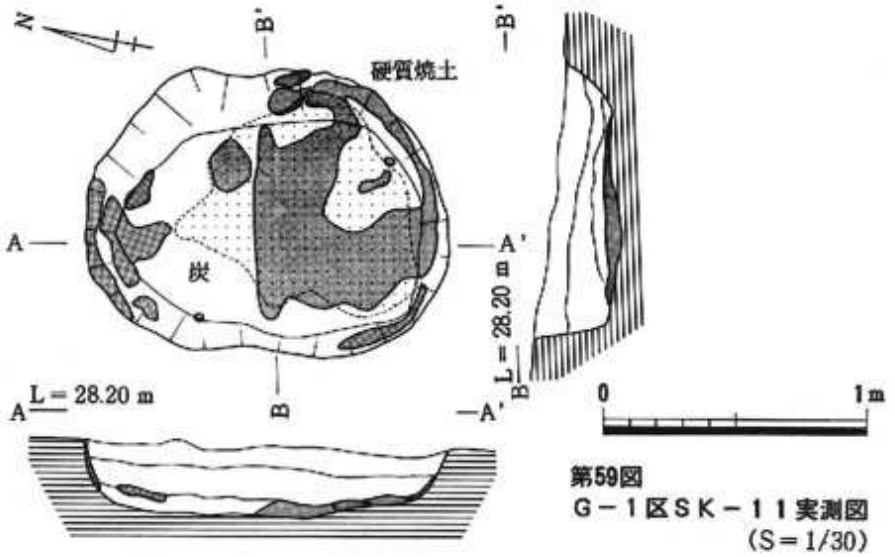
第57図　G－1・2区第2遺構面平面図(S＝1/120)

第60図260～262は，覆土内から出土した須恵器で，260・261は小形の坏である。261は，底部が平坦で「×」印の篦記号がみられる。262は小形壺か。263～265は，遺構面上から出土した坩で，平底をしている。263・264の切り離しは篦切りである。

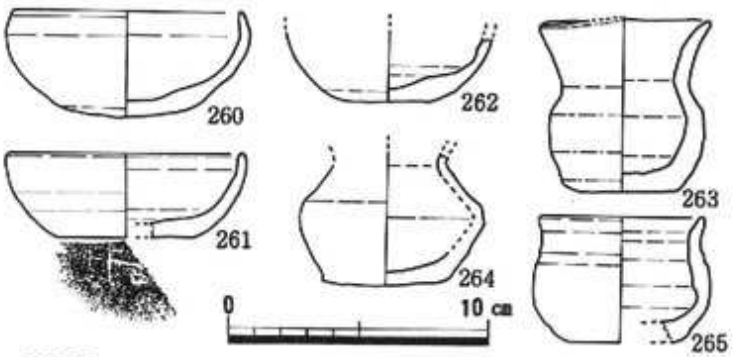
また，第61図266は覆土内から出土した縄文式土器片である。外面の突帯部に刺突文があり，二条の沈線もみられ，内面にも二条の条痕がみうけられる。晩期と思われる。



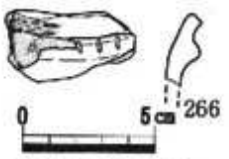
第58図　G－1区SK－10実測図(S＝1/30)



第59図
G－1区SK－11実測図
(S=1/30)



第60図
第2遺構面上および覆土内出土須恵器(⅓)

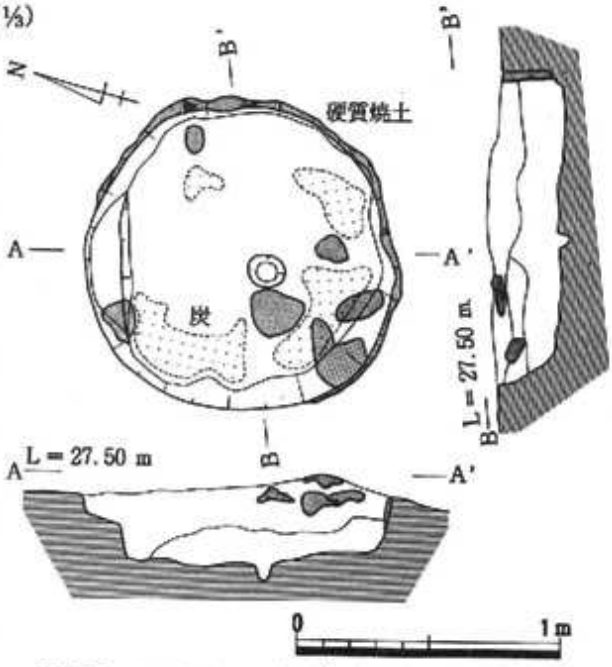


第61図 第2遺構面覆土内出土縄文式土器
(⅓)

○第3遺構面

1区側だけに存し，F区では13層明茶褐色粘質土上面に，G区は地山面にあたる遺構面である。円形焼土壙1基(SK－09)，ピット25穴を検出した。ピットは形状，法量ともにまとまりがなく，建物とすることはできなかった。(第63図)

SK－09（第62図）：平面プランは楕円形を呈している。上端径120×114cm，下端径100×85cm，深さは30cmを測る。壁面は西側を除いて，硬質の青灰色焼



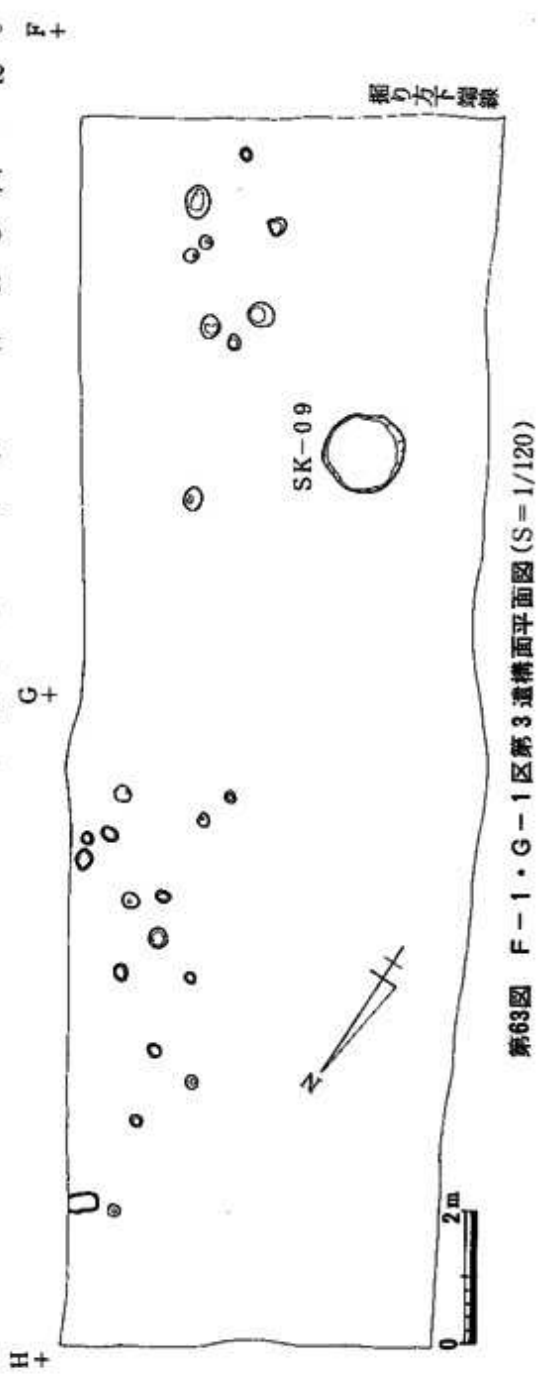
第62図 F－1区SK－09実測図(S=1/30)

土がよく残っており，厚さは最大50㎜を測る。床面には焼土はなく，小ピット（上端直径12cm，深さ7cm）があった。土壙内の堆積土は，上層青灰色焼土・礫を含む褐色土，中層青灰色焼上・炭少量ほど含む褐色土，下層炭上の3層に分かれる。3層とも須恵器，土師器が入っており，須恵器長頸壺（第64図272），土師器壺（第65図274）の一部であった。

第64図は，覆土内および遺構面上から出土した須恵器である。267は覆土内から出土した坏で，低脚が付く。268は遺構面上にあった蓋で，天井部と口縁部の境に上下の削りによって突帯を表している。天井部の篦削りは右回りである。山本編年のⅡ期の新しい段階か。269～271は，遺構面上から出土した坩である。269は丸底気味で，頸部と肩部の境に薄い沈線が施してあり，底部は篦切り後未調整のままで粘土が盛り上がっている。270・271も切り離しは篦切りである。

第65図273は，遺構面上にあった土師器短頸壺でほぼ完形。体部外面には指押さえの痕がみられる。

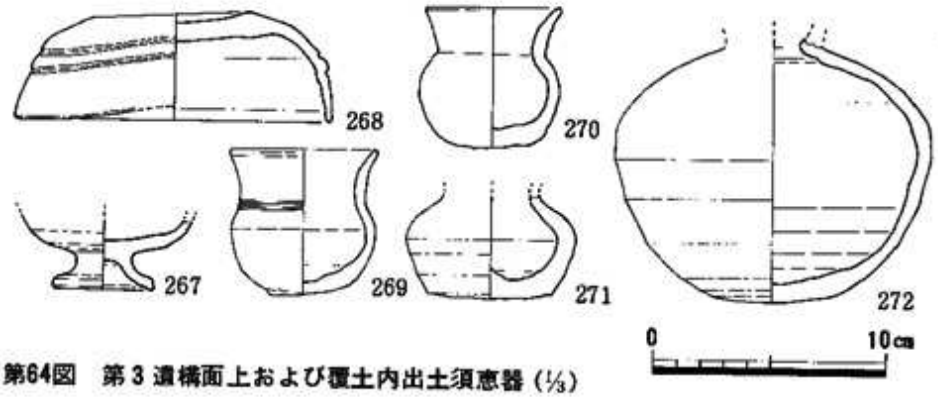
他に覆土内から出土したものには，第66図275の須恵質の土馬と，土師質の土錘が1点（137頁第96図479）ある。土馬は，胴部だけで性別は不明。本遺跡出土の土馬としては，一番小さな胴部である。



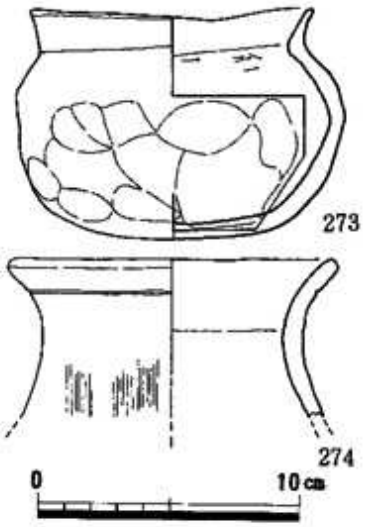
第63図　F－1・G－1区第3遺構面平面図（S＝1/120）

○表土および堆積土層からの出土遺物

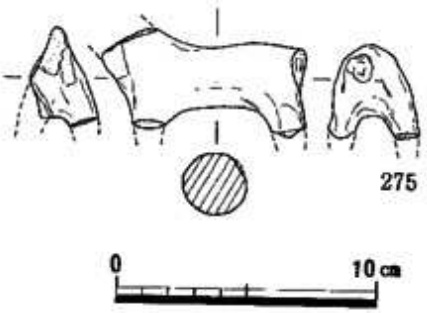
第67図は，表土および堆積土層から出土した遺物である。276は表土内から出土した寛永通宝（江戸時代前期）であり，遺存状態良好。277～280は須恵器である。277は高広編年のⅡA期の坏か。外面は篦削り後回転ナデ調整を施す。278は静止糸切り痕を残してい



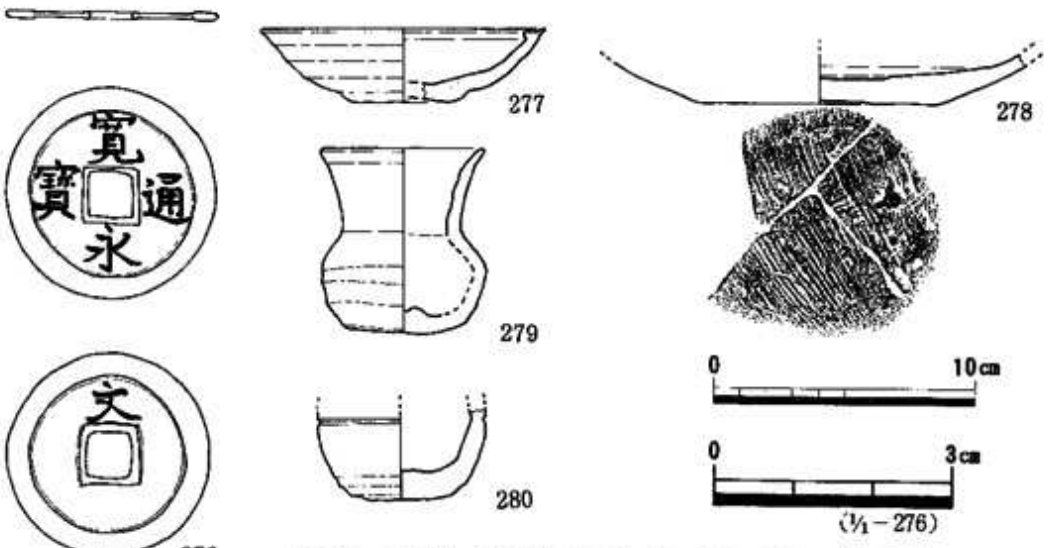
第64図　第３遺構面上および覆土内出土須恵器（⅓）



第65図　第３遺構面上出土土師器（⅓）

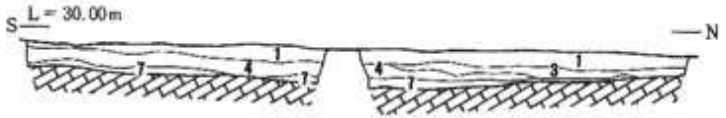


第66図　第３遺構面覆土内出土土馬（⅓）



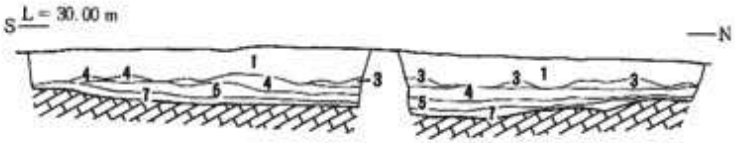
（1/1－276）

第67図　表土および堆積土層内出土古銭・須恵器（1/1，⅓）

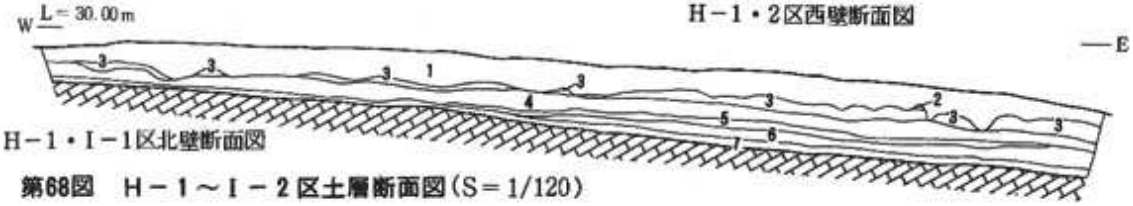


I－1・2区西壁断面図

1 表土（耕作土）　5 黒褐色土
2 明褐色土　6 やや明るい褐色粘質土
3 褐色土　7 明褐色粘質土
4 暗褐色土

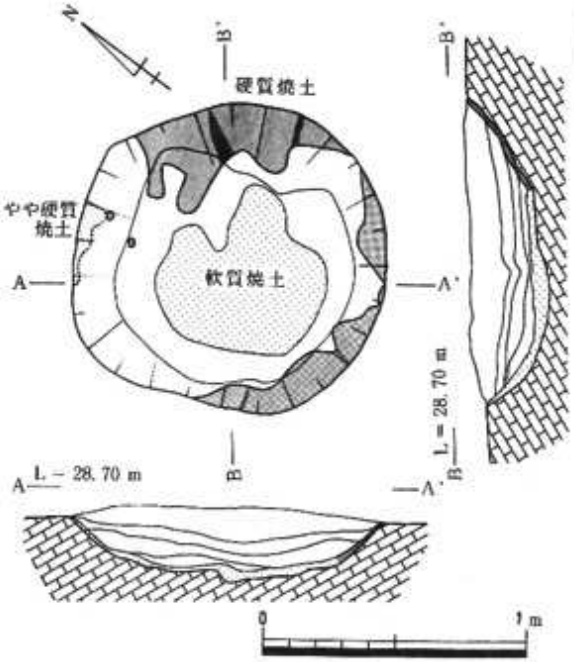


H－1・2区西壁断面図

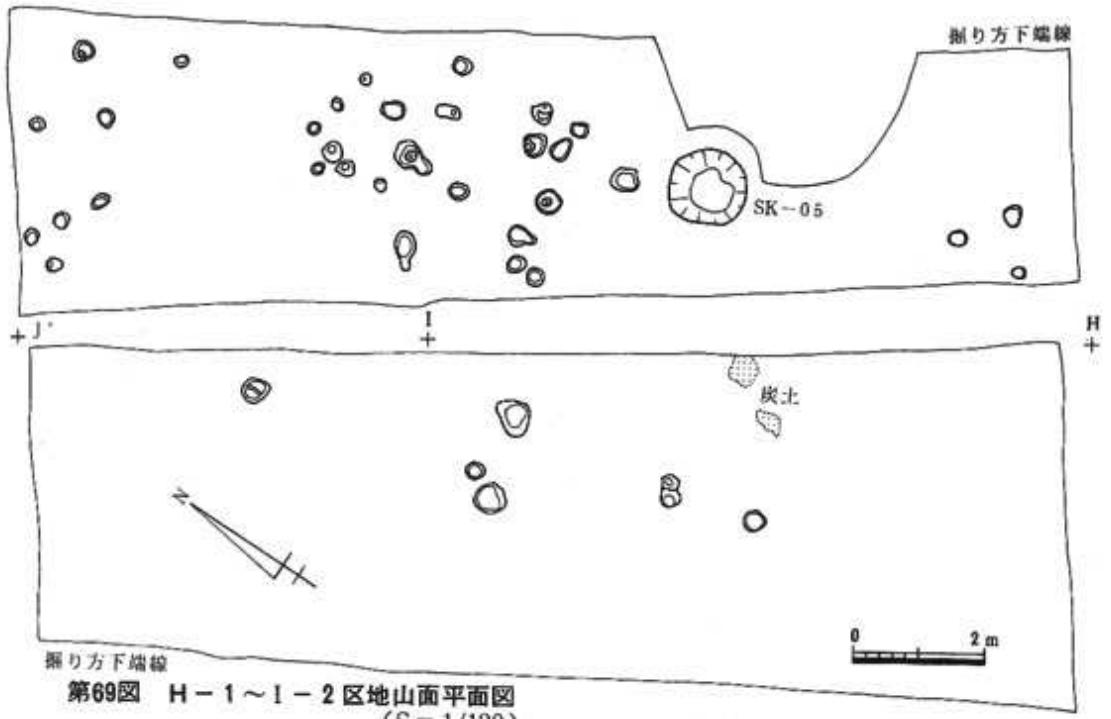


H－1・I－1区北壁断面図

第68図　H－1～I－2区土層断面図（S＝1/120）



第70図　H－2区SK－05実測図（S＝1/30）



第69図　H－1～1－2区地山面平面図
（S＝1/120）

る。坏かあるいは鉢か。279・280は坩である。279は篦切りによる切り離し後ナデ調整を施しているが，280は未調整。

土錘も３点土師質のもの（137頁第96図476～478）が出土している。

［H－1～I－2区］

本遺跡の西端に位置する調査区である。

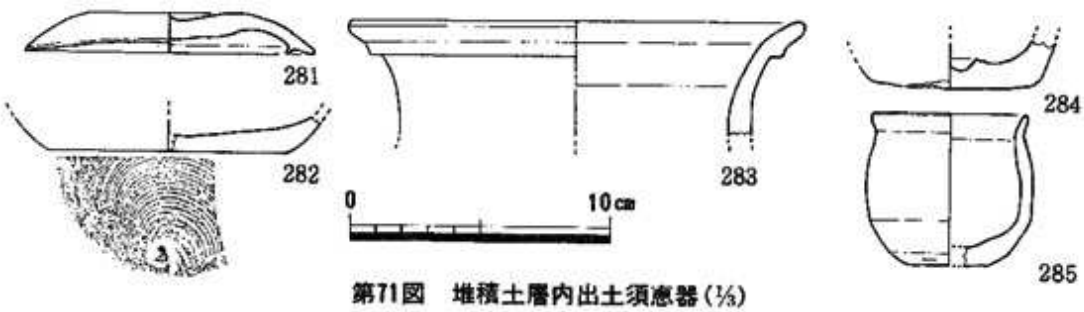
表土から最下層の地山までの間に，７層を数える。深さは谷間中央部の１・２区間畦畔のところで，0.55～1.2mを測り地山面に達する。地山は明褐色を呈しており，粘性が強い。（第68図）

調査の結果，地山面で円形焼土壙１基（SK－05），ピット40穴，炭土２所を検出した。ピットの形状，法量は大小様々でやはりまとまりがなく，建物を組あげることができなかった。（第69図）

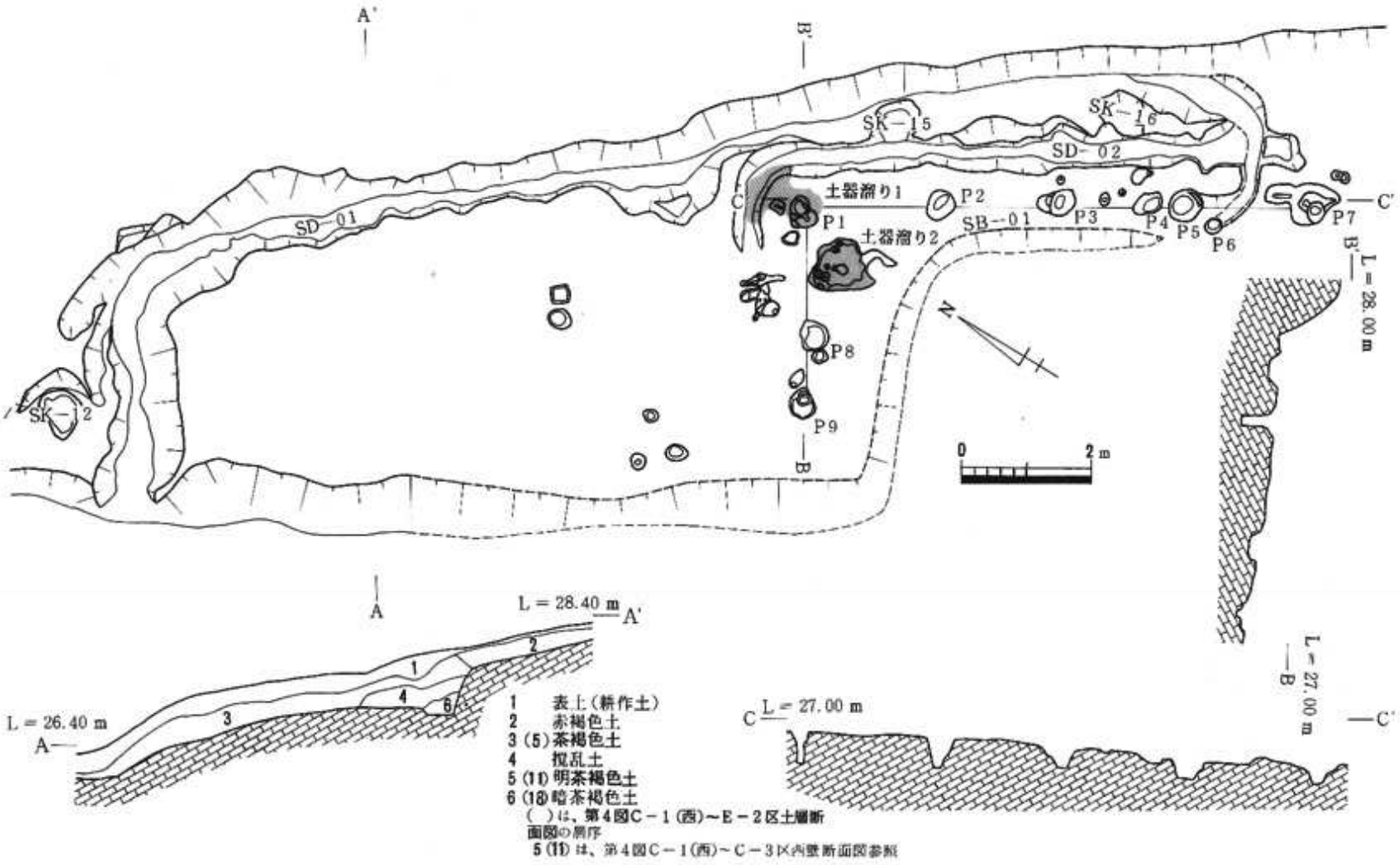
遺物は遺構面である地山面からの出土がなく，堆積土層の２層以外から出土しているが，量的にはかなり少ない。また，池ノ奥１号墳の須恵器甕片が３片，池ノ奥C遺跡の特殊土器片も２片落ち込んでいた。

SK－05（第70図）：平面プランはほぼ円形をしている。上端径125×120cm，下端径100×80cm，深さは30cmを測り，かなり大きな円形焼土壙である。壁面上部が，一部を除き非常によく焼け締まっており，その厚さは20～30mmを測る。床面は軟らかい焼土で覆われていた。土壙内の堆積土は大まかに４層に分かれ，上層炭化物粒子・小礫を含む暗褐色粘質土，中層炭化物粒子を多量に含む暗褐色粘質土，下層炭を多量に含む黒褐色粘質土，最下層直径30mm以下の炭を多量に含む炭化物層であった。土器片はなかった。

第71図は堆積土層から出土した須恵器で，土師器は出土量そのものが少なく図化できるものはなかった。281は蓋で，口縁内面にかえりが付くが，つまみの痕跡はなし。282は底外面に回転糸切り痕を残す坏。283は壺の口頸部。284は小形の壺と思われるが，甕かも知れない。285は平底の坩で，切り離しは篦切り。



第71図　堆積土層内出土須恵器（⅓）



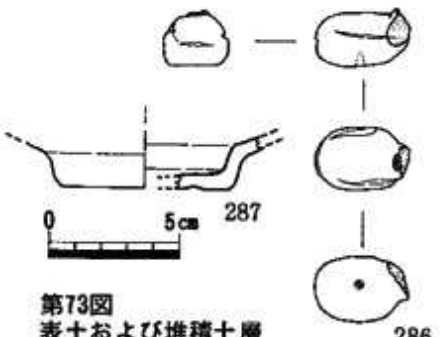
第72図　C－3・D－3区地山面実測図（S＝1/100）

［C－3・D－3区］

C－2，D－2区北側の一段高いところの緩斜面に，調査の中途で新たに設けた拡張区である。(第72図)

1層表土下10～40cmで，南側は3(5；77～78頁第4図C－1(西)～E－2区土層断面図の層序，以下同じ）層茶褐色土に，北側ではC－3区からD－3区東北方にかけては明褐色の地山に，D－3区北西方では厚み8～30cmの2層赤褐色土を挟んで，明褐色の地山に達した。1層および2層内からは，磨滅した須恵器・土師器片が少量出土した。3(5)層の厚みは，C－2区へつづくC－3区南端で最大50cmを測り，須恵器・土師器片，土師質の土錘（137頁第96図480）が出土している。4層は攪乱土で，厚さは12～30cmを測り，D－3区中央部の3(5)層下に存していた。5(11)層は明茶褐色土で，厚さは30～34cmを測り，C－3区西側の表土下に存しており，須恵器片が少量出土した。

第73図286は表土内から出土した須恵質の土製品だが，一部欠けており形状不明。287は2層から出土した須恵質の灯明皿で，底外面に糸切り痕を残す。



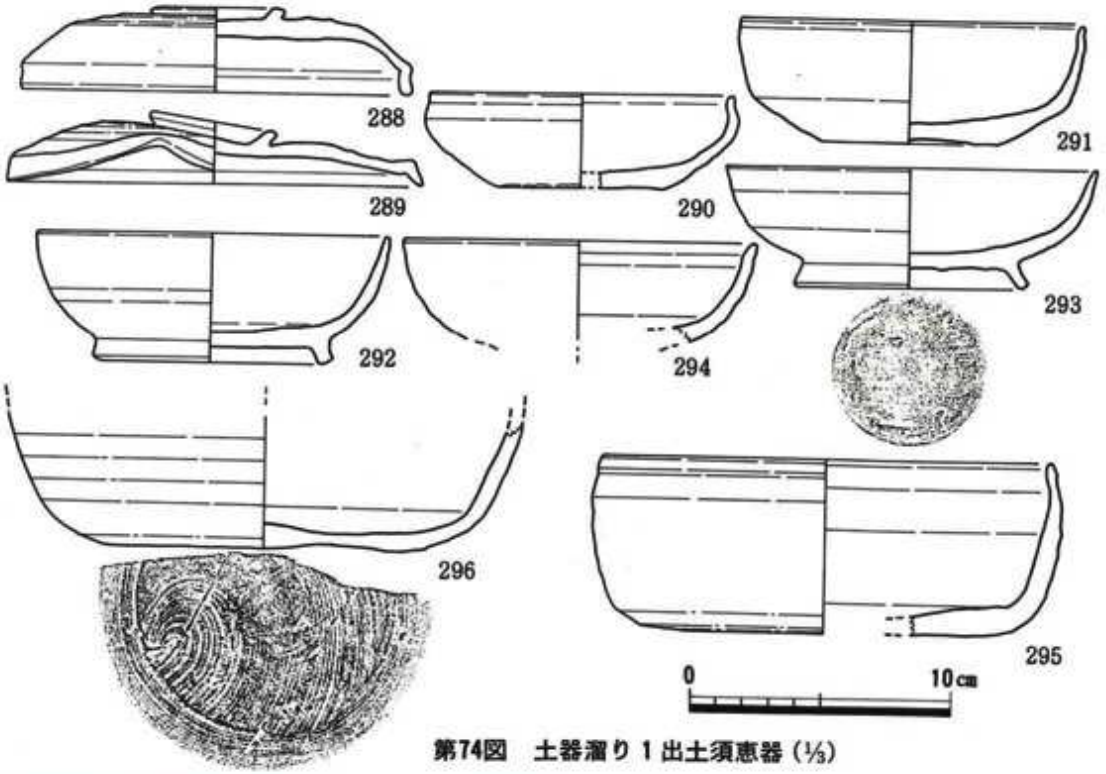
第73図
表土および堆積土層
内出土須恵質品(⅓)

北側で検出された明褐色の地山は，3(5)層，5(11)層の北端付近で急激に落ち込み，6(18)層暗茶褐色土を伴った溝状遺構（SD－01）を形成し，3(5)層下を南へ緩やかに傾斜し，C－3区，C－2区との境付近で40～50cmの壁面を作り下っている。SD－01は，東西方向に伸びD－3区西端で南に回り込み途切れていた。SD－01上の6(18)層からは，赤色塗彩を施した土師器がよく出土している。

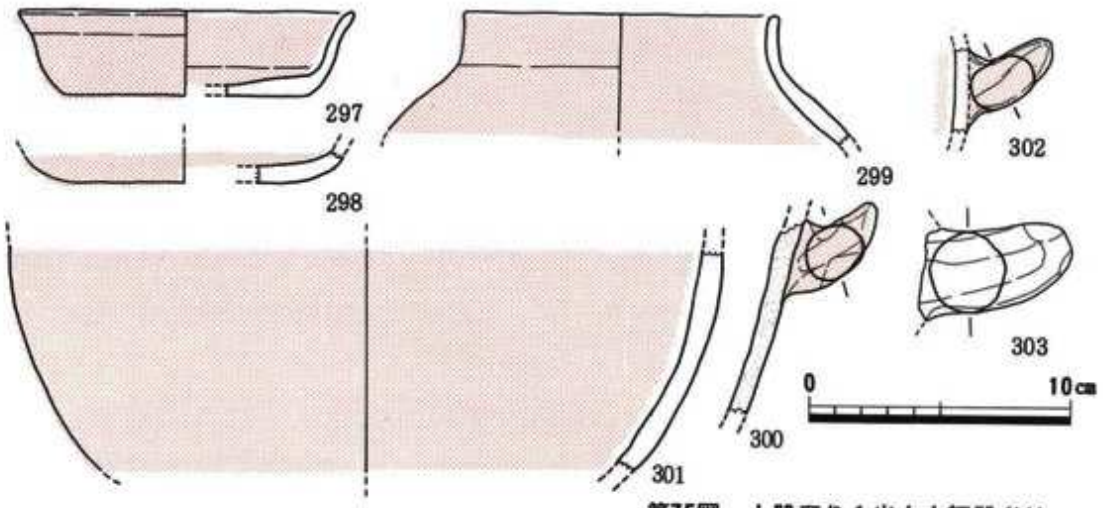
C－3区の地山面で，北東側に淡黄色，淡緑色を呈した粘土塊の入っていた円形土壙（SK－15・16）が付いている溝状遺構（SD－02），須恵器および赤色塗彩を施した土師器を中心にして成り立っている土器溜り1，赤色塗彩を施した土師器が大部分を占める土器溜り2を伴った，掘立柱建物址（SB－01）を検出した。このSB－01は，南側の大半を後世の開墾で削平され失われているが，東西方向に4間，南北方向に1間の柱穴が「L」字型に残存していた。

D－3区の地山面では，南に回り込んで途切れているSD－01の西外側に，円形土壙（SK－12）を確認した。

SB－01（第73・76図）：主軸方向はN35°Wで，南側は後世の開墾で削平され失われて



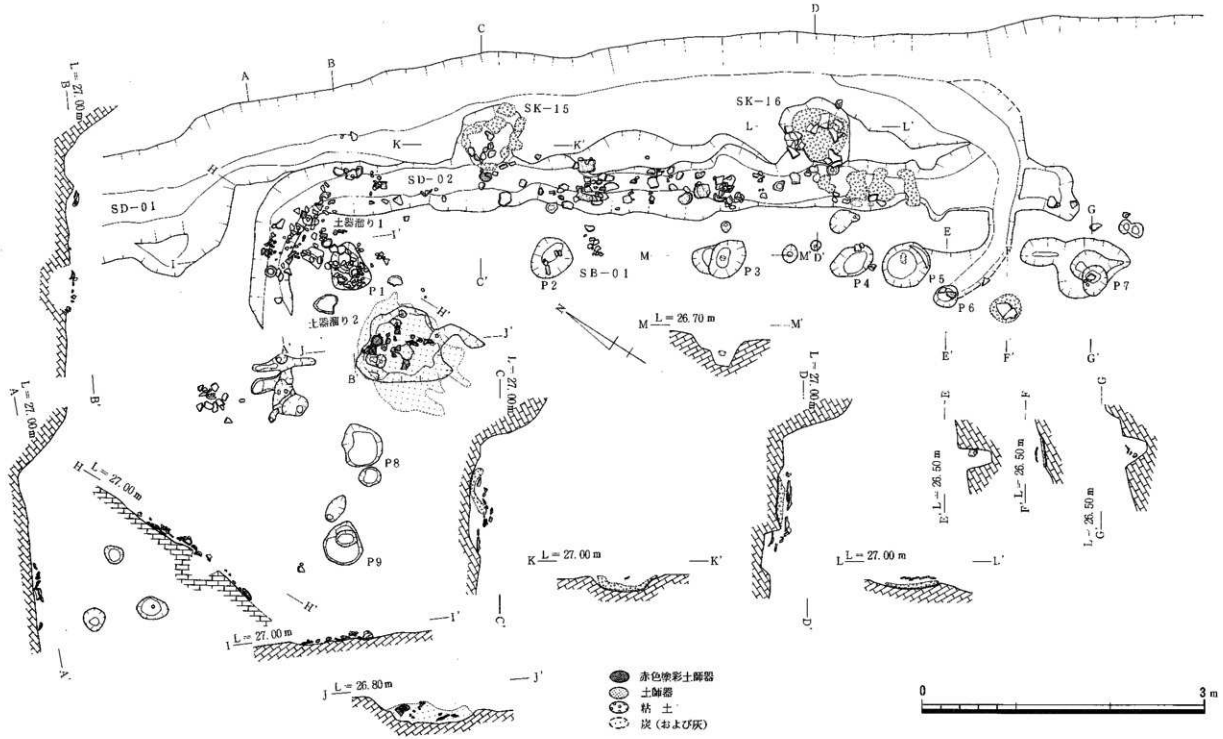
第74図　土器溜り１出土須恵器（⅓）



第75図　土器溜り１出土土師器（⅓）

いるが，東西方向に桁行４間，南北方向に梁行１間が「L」字型に残存している。柱間寸法は，桁行7.9m（西方P1から2.1＋1.9＋1.9＋2.0m），梁行3.0mを測る。柱穴の掘り方はほぼ円形あるいは楕円形で，P9は２段掘りで，径18cmの円孔がある。各柱穴の法量は，P1－東西径30×南北径56×深さ50cm，P2－42×44×44cm，P3－56×40×32cm，P5－52×48×32cm，P7－57×44×31cm，P9－42×48×20cmを測る。

P1上，および，そこから北側SD－02の北隅角にかけての地山面に，須恵器，赤色塗彩



第76図　C－3区SB－01，SD－02，SK－15・16実測図（S＝1/40）

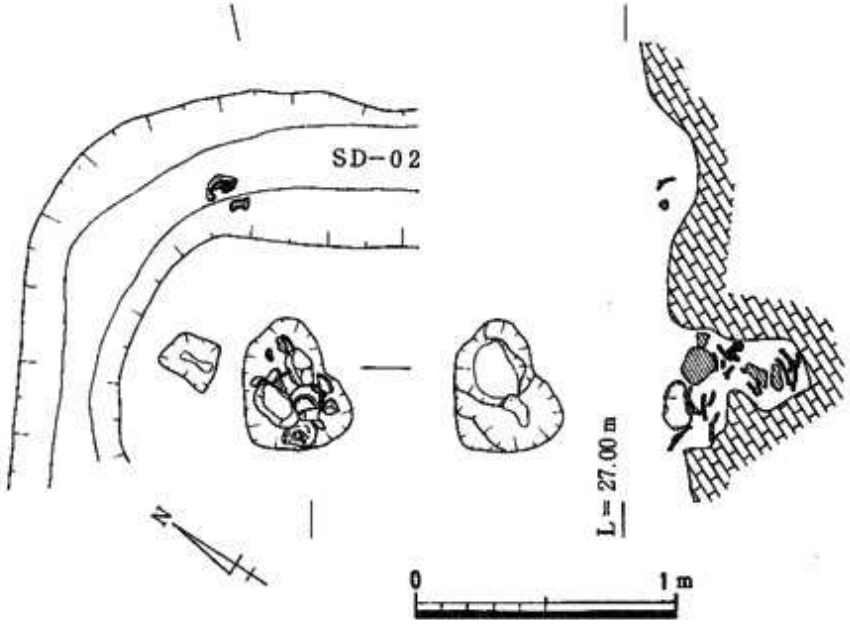
を施した土師器等から成り立っている土器溜り1が存していた。

土器溜り1からの須恵器としては，蓋・坏・高坏・鉢が出土している。第74図288・289は蓋である。輪状つまみを有し，口縁部はやや外方に開いているが短く直立するもの。289は器高が低い。高広編年のⅡB～ⅣA期。290・291は無高台の坏で，底外面に回転糸切り痕を残す。290は，体部がやや丸みを帯び口縁端部が内傾している。292・293は高台付きの坏で，293の底外面には静止糸切り痕がみられる。294は高坏の坏部，295・296は鉢である。296の底外面には，回転糸切り痕が残っている。

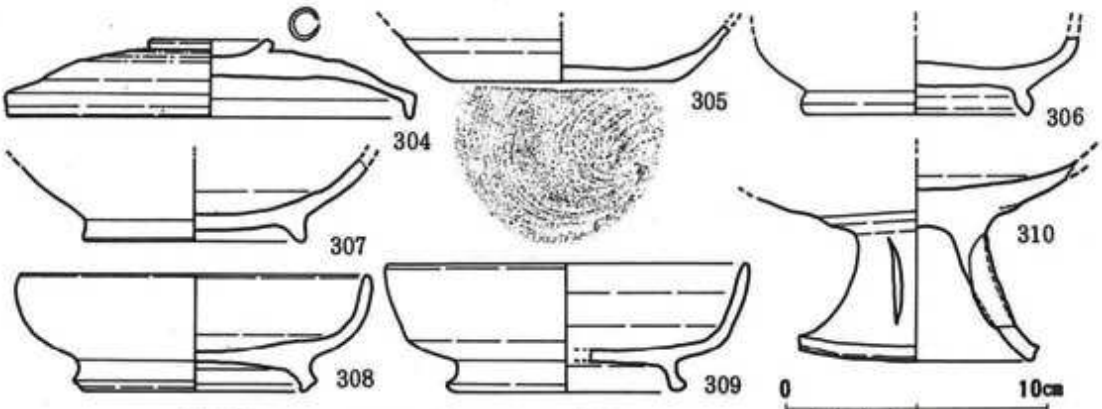
赤色塗彩を施した土師器（第75図）では，坏・把手等が出土している。303以外は全て，赤色塗彩が施されている。297・298は坏で，内外面ともに赤色塗彩。299は壺で，頸部は短く直立し，内外面ともに赤色塗彩。300・301は，接合できないが同一個体。把手付きの鍋か。把手は，先端が上方に反り返り断面は扁平。内外面ともに赤色塗彩。302も小形の把手で，先端はやや上方を向き断面は扁平。内外面ともに赤色塗彩。300・301と同一個体の可能性がある。303は普通の把手である。

土師質土錘（137頁第96図481）も，一つ含まれている。

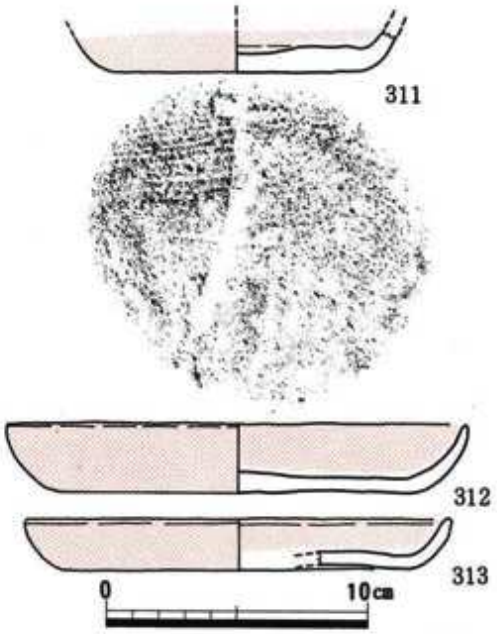
また，この土器溜り1直下のP1内にも，底まで須恵器，赤色塗彩を施した土師器が，多量に詰まっていた（第77図）。須恵器（第78図）は，蓋・坏・高坏が出土している。304は蓋で，輪状つまみを有し口縁部が短く直立するもの。天井部外面に，径1cmの竹管文が



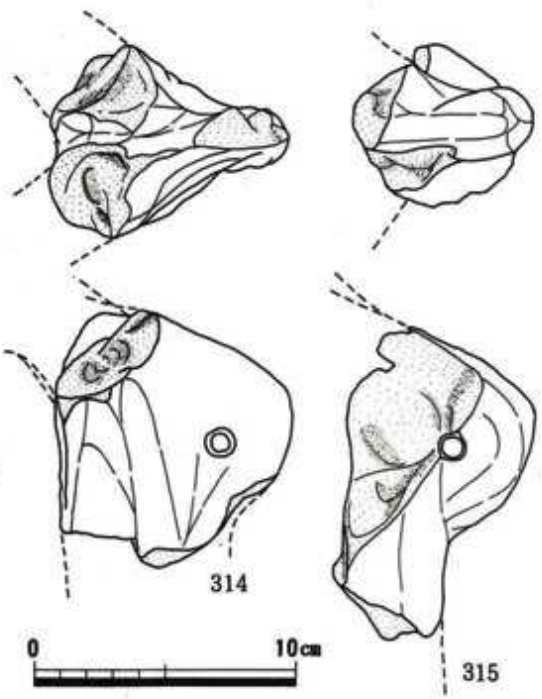
第77図　C－3区SB－01P1内遺物出土状況実測図（S＝1/30）



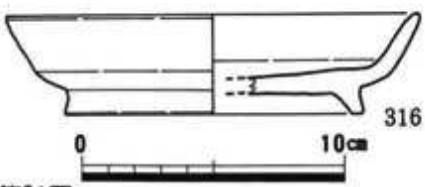
第78図　SB－01P1内出土須恵器(⅓)



第79図　SB－01P1内出土土師器(⅓)



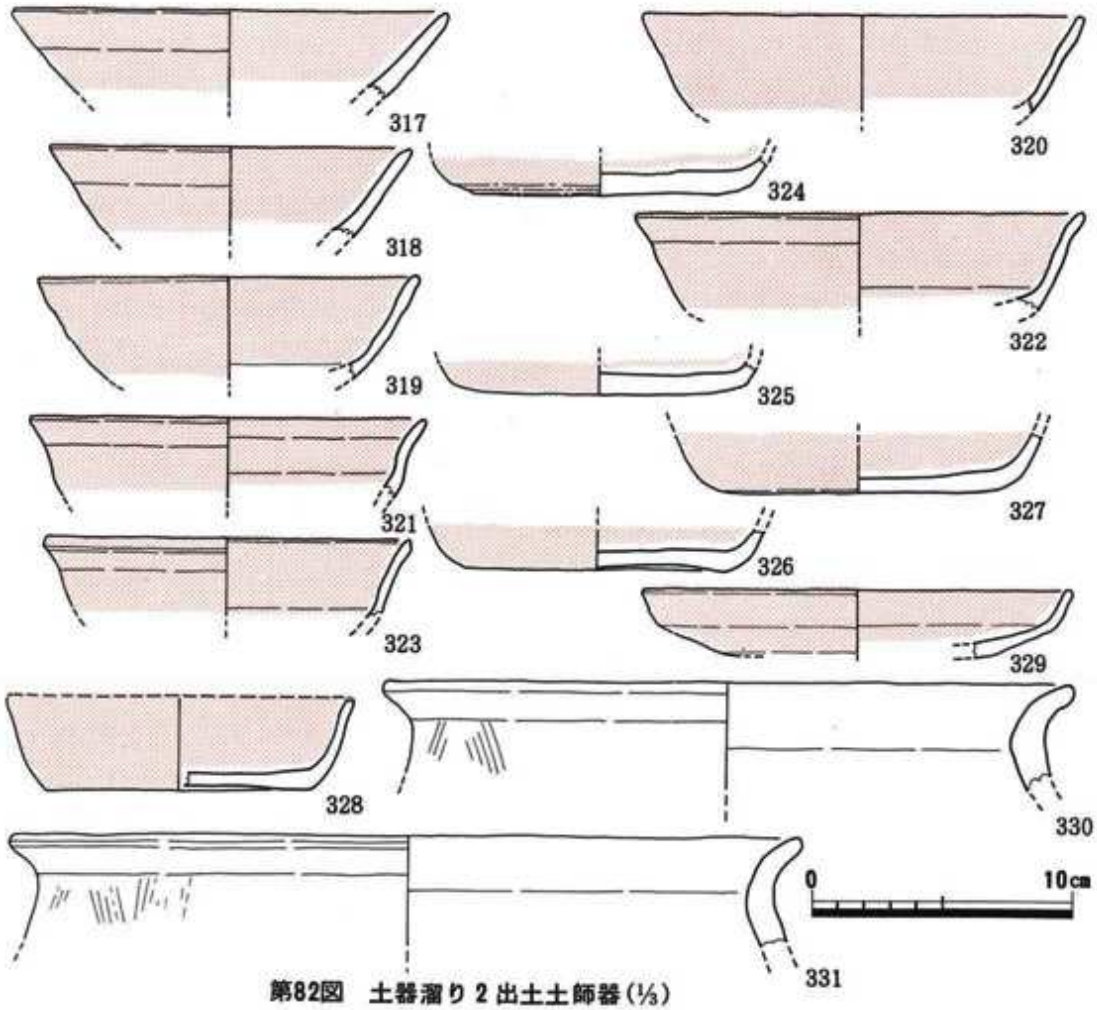
第80図　SB－01P6内出土土製支脚(⅓)



第81図
SB－01P7内出土須恵器(⅓)

一つみられる。つまみの周囲は，右回りの篦削りを施している。高広編年のⅢB期か。305は無高台の坏で，静止糸切り痕を残している。306～309は高台付坏で，308・309の底外面には静止糸切り痕が残っている。高広編年のⅢB～ⅣA期か。310は高坏で，脚部に二方向の切り込みがある。内外面ともに赤色塗彩を施した土師器は，坏と皿が出土している。第79図311は坏で，静止糸切り痕がみられる。312・313は皿で，312の底外面にはロクロ回転による篦切りの同心円の痕がみられる。

P6内からは土師質の土製支脚（第80図314・315），P7内からは須恵器の高台付きの皿



第82図　土器溜り２出土土師器(⅓)

（第81図316）が出土している。さらにP3とP5内には，SK－15・16内にあるのと同様な粘土塊が入っていた。

残存しているところはわずかしかないが，建物址内およびその近辺に焼土は認められなかった。しかし，P1とP8との間で検出した不整形土壙内に，内外面ともに赤色塗彩を施した土師器を多量に含む炭・灰土層を確認した（土器溜り２）。この不整形な土壙は，上縁で長径139cm，短径80cm，深さ11cmを測り，形状がまちまちな小ピットを６穴伴っている。炭・灰土層は，土壙全体をほぼ覆っており厚みは最大23cmもあり，一部は土壙の外まで広がっている。この土器溜り２内から出土した赤色塗彩を施した土師器の器種は，坏がほとんどで高坏もみられた。

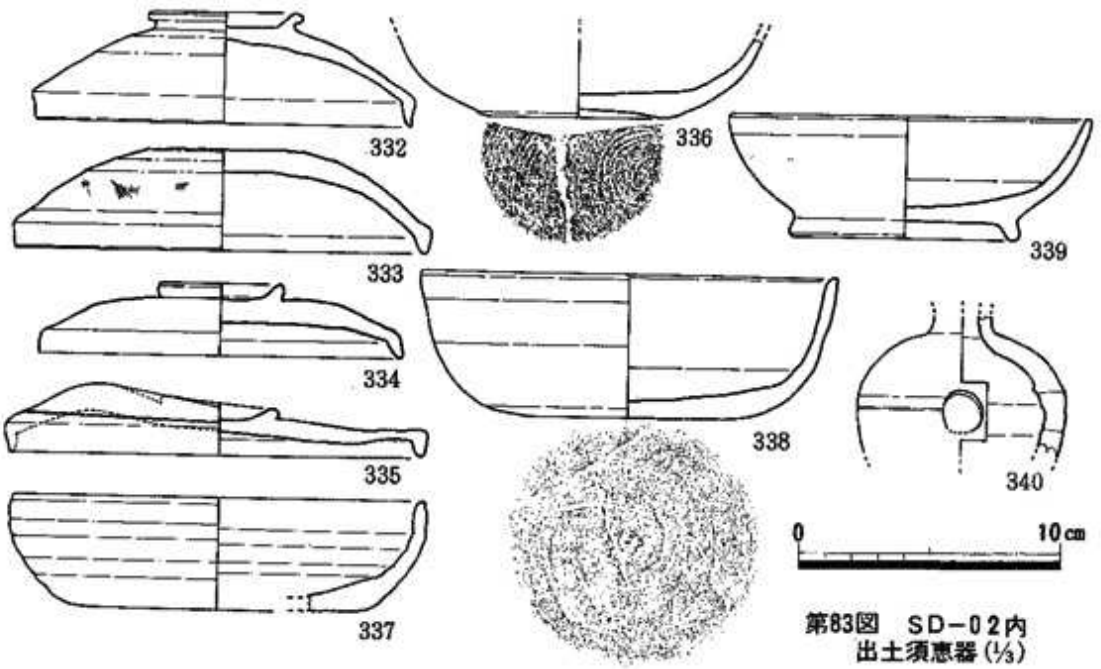
第82図317～328は坏で，内外面ともに赤色塗彩を施している。324の底部の切り離しは篦切りで，何かが当たった線痕を多方向に残している。底部と体部の境目に篦削りを施している。325は底外面に回転糸切り痕を残している。327も底外面に糸切り痕を残している。

329は高坏の坏部と思われ，内外面ともに赤色塗彩を施す。318の体部外面，325・328の底部外面，319の内外面には，二次焼成を受けた痕の黒斑がみうけられる。330・331は，普通の甕類の口頸部である。

SD－02（第73・76図）：SB－01北東側で検出された。上端幅は最大で86cm，下端幅16～51cm，深さ13～20cmを測る。掘り方は「U」字状を呈している。SB－01を取り囲むように巡っているが，西側では地山面が緩やかに傾斜しているなかに消えている。東側の方では，「T」字状になっており，「－」部分北側の方は地山の壁面にぶつかり，そこで途切れている。また，南側に曲がった溝は，SB－01の柱穴であるP5とP7との間をとおり，P6の方へ向かっていると思われるが，後世の開墾による削平のためにはっきりしない。この溝内からは，多量の須恵器，赤色塗彩を含む土師器および粘土塊が出土している。このSD－02は，SB－01を巡るように掘られていることから推察して，SB－01内に雨水が入らないようにした排水溝と思われる。

第83図は須恵器である。332～335は蓋で，輪状つまみを有し口縁部が短く直立するものである。333はつまみが剥離しており，つまみを付す前についた箆状工具による線痕をみることができる。高広編年のⅡB～ⅣA期。336～339は坏で，339は高台の付くもの。336は静止糸切り痕を，337は糸切り痕を残し，338の切り離しは箆切りである。高広編年のⅡB～ⅣA期か。340は甕である。

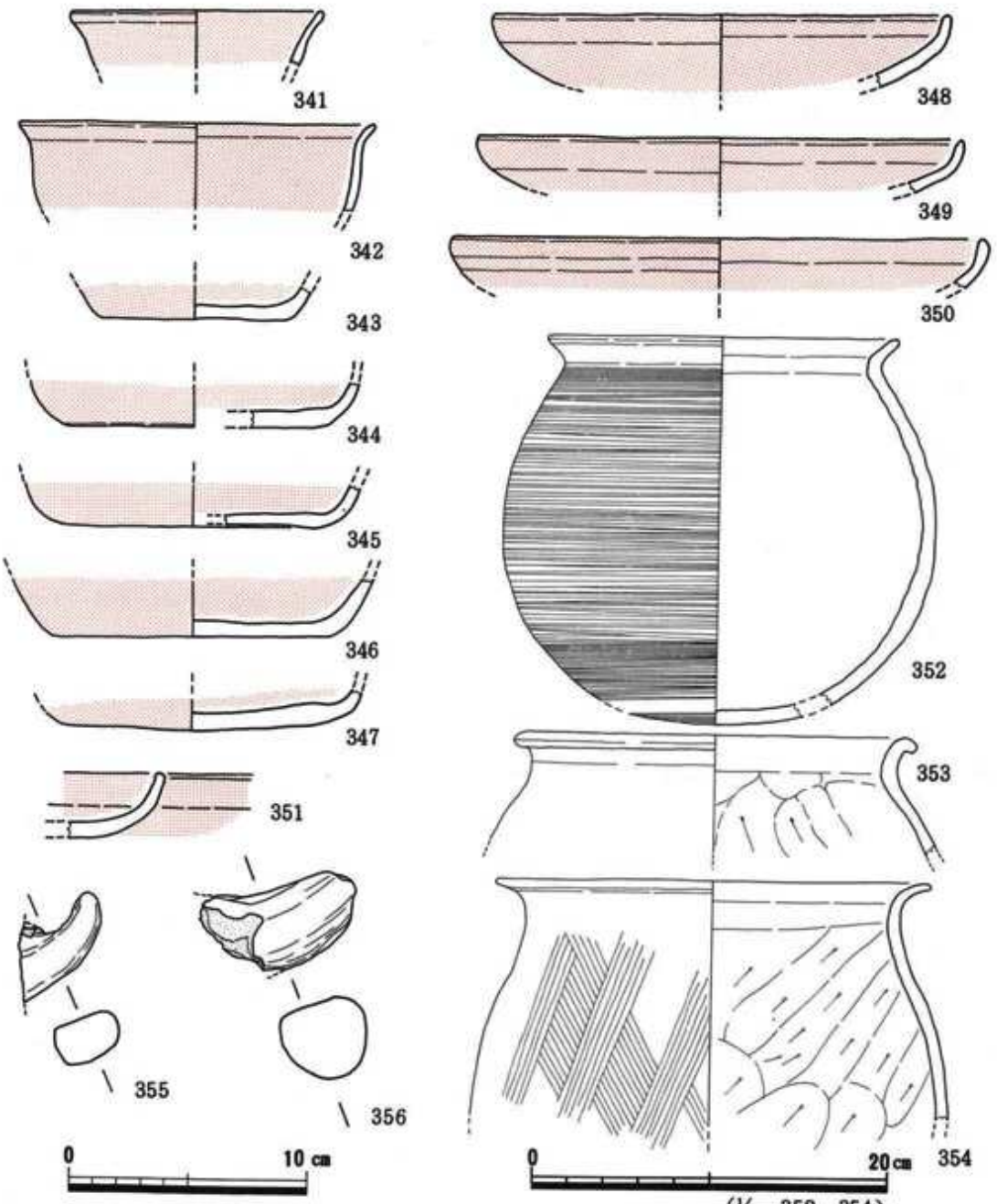
第84図は土師器である。341～351は，内外面ともに赤色塗彩を施したものである。341



第83図　SD－02内出土須恵器（⅓）

～347は坏，348～351は皿類である。ほとんどのものは磨滅が著しく，調整，切り離し等不明である。342・347は同一個体の可能性がある。352～354は壺・甕類で，352の外面は櫛状工具によるカキ目調整か。354には外面に刷毛目調整がみられる。355・356は把手の部分であり，355は先端が上方に反り返り扁平な断面をしている。

SK－15（第76図）：SD－02に付設しているややいびつな円形土壙である。上端径64×85

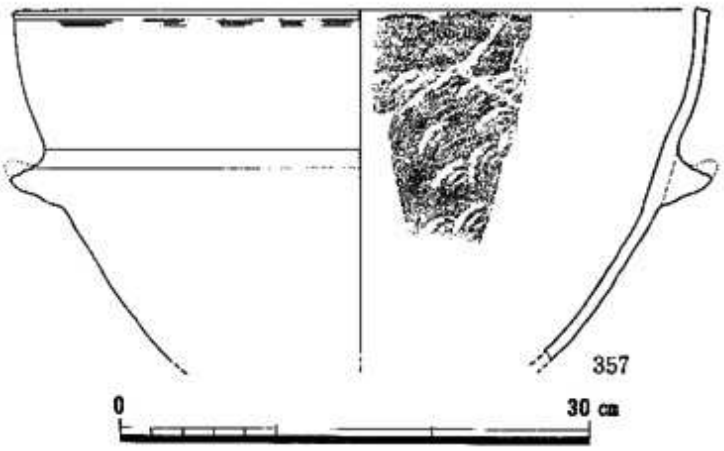


第84図　ＳＤ－０２内出土土師器（⅓，¼）

（¼－352～354）

cm，下端径42×55cm，深さ19cmを測り，SD－02とは底部が連なっている。淡黄色，淡緑色をした粘土塊が，底部の方に詰まっており，その上には須恵器，土師器片が散らばっていた。

SK－16（第76図）：SK－15と同様に，SD－02に付設しているややいびつな楕円形土壙である。上端径60×85cm，深さは中心部で7cmを測り，壁面はなだらかに傾斜している。SD－02とは底部がつながっていない。内部は，ほぼ全面に淡黄色，淡緑色をした粘土塊が敷き詰められており，その上には，須恵器の大きな把手付きの鍋（第85図357）と思われる土器片が散在していた。口縁部に僅かな櫛状工具によるナデがみられ，端部は平坦である。焼成はかなり不良で，外面は黒褐色から黄褐色を帯び，内面は赤褐色または淡黄灰色を呈している。

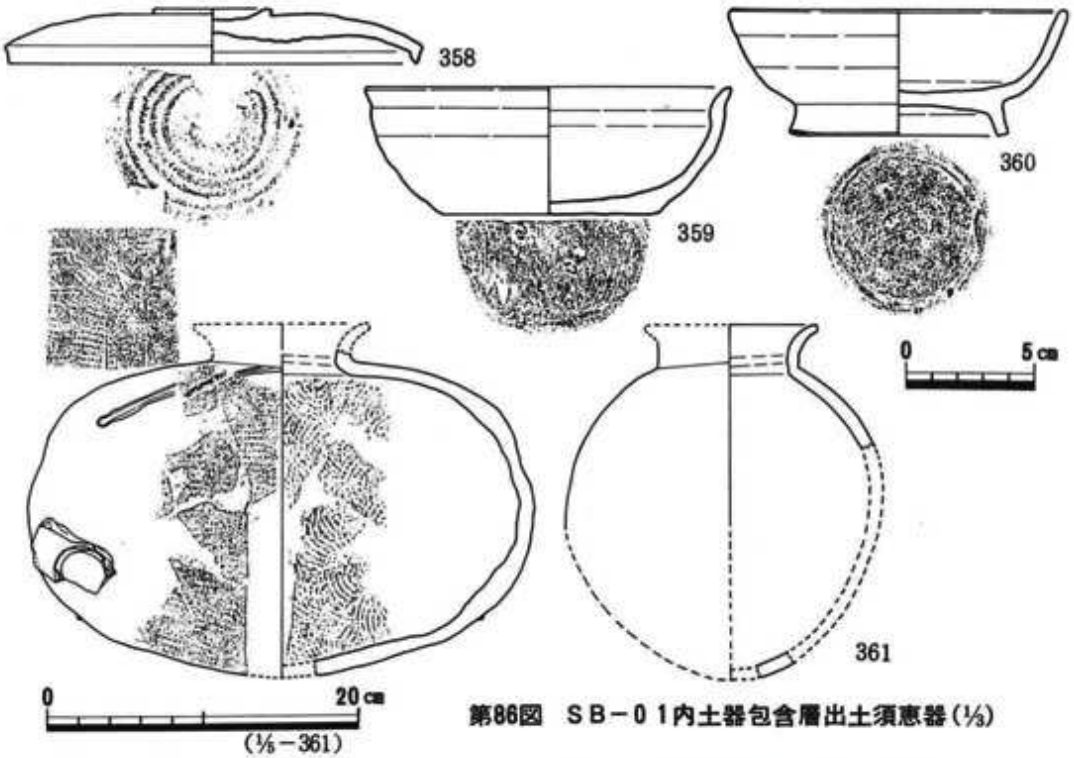


第85図　ＳＫ－１６内出土須恵器（⅓）

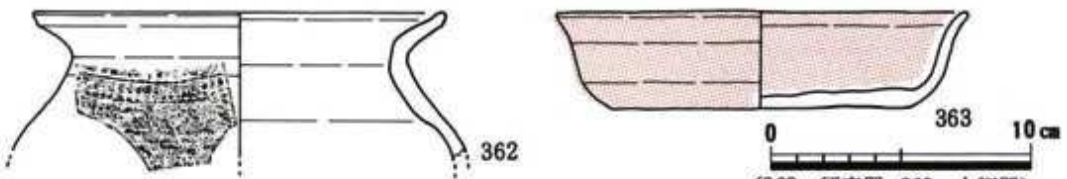
第86図は，SB－01内の土器包含層から出土した須恵器である。358は蓋で，輪状つまみを有し口縁部が短く直立するもの。天井部内面には，沈線状の左回りのカキ目がみられる。高広編年のⅣＡ期か。359・360は坏で，359は無高台のもので，静止糸切り痕を残し，口縁がやや直立し外傾している。360は高台付きで，静止糸切り後ナデを施している。高広編年のⅢＢ期か。361は横瓶で，肩部に「×」印の篦記号があり，自然釉付着のためか体部外面の叩き目は不明瞭。焼き台が付いている。また，土師質（137頁第96図484）も出土している。

第87図は，SB－01床面出土の土器である。362は須恵器の壺で，肩部に平行叩き目痕がみられる。363は内外面ともに赤色塗彩を施した土師器の坏で，回転糸切り痕を残している。また，土師質の土錘（137頁第96図485）も１点出土している。

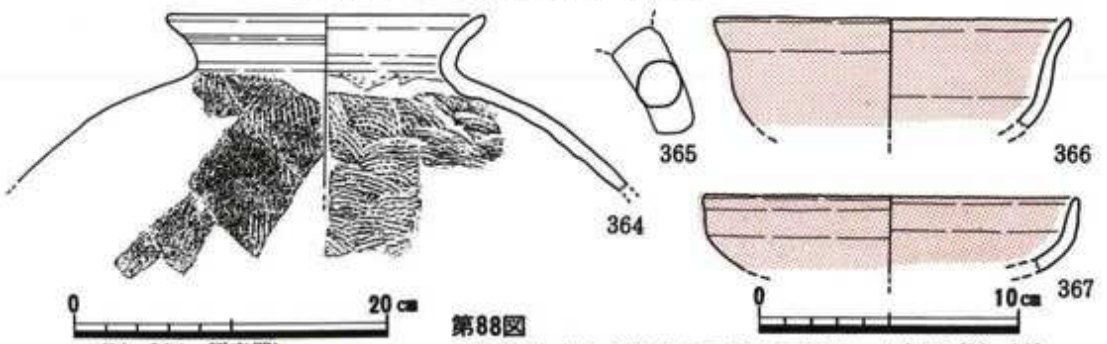
第88図は，SB－01残存部南側の後世行われた削平により，落ち込んでいる地山面上の土器包含層から出土した土器である。364は須恵器の大甕である。365は土師質のもので，土馬の脚あるいは尾のようにもみえる。366・367は，内外面ともに赤色塗彩を施した土師器の坏である。また，土師質の土錘（137頁第96図486）もみられた。



第86図　ＳＢ－０１内土器包含層出土須恵器(⅓)

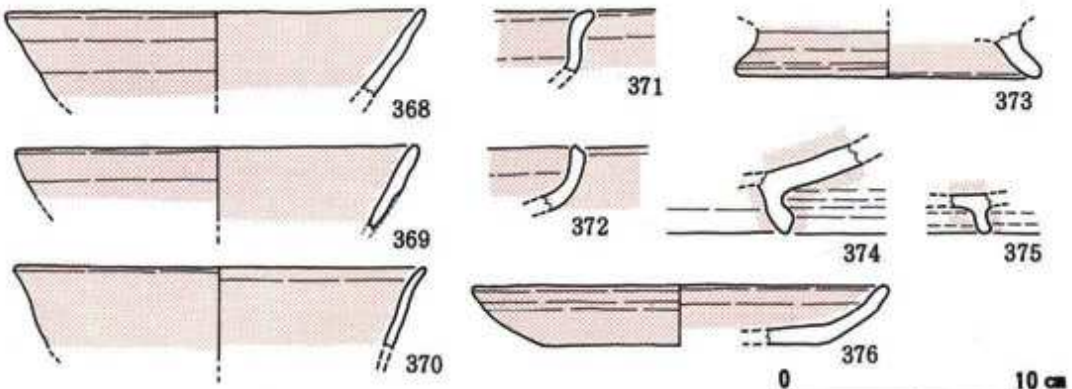


第87図　ＳＢ－０１床面出土土器(⅓)

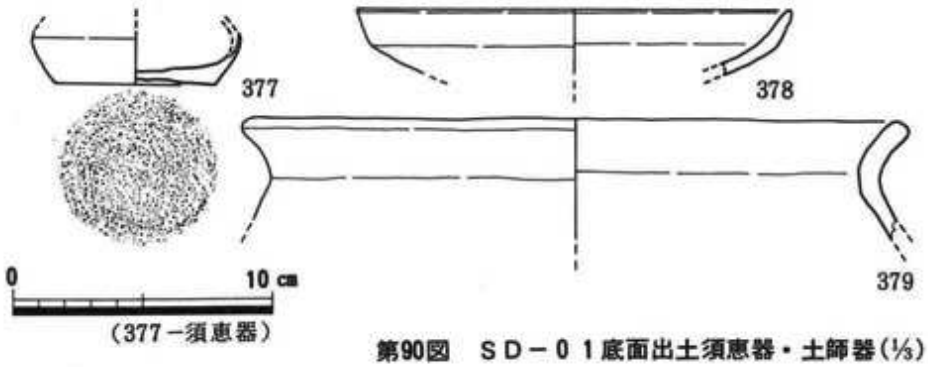


第88図
削平部地山上土器包含層出土須恵器・土師器(⅓，⅙)

SD－01（第73図）：地山はSD－02北側で，高低差78～61cmの壁面を形成し一段高いテラスに連なっており，このテラスは西の方へ伸びている。SD－01は，このテラス西方の壁面直下に存している。上端幅141～51cm，下端幅58～８cm，深さは南側の上端から測り24～８cmである。掘り方は，ほぼ「U」字状を呈している。東方では，SD－02につながっている。

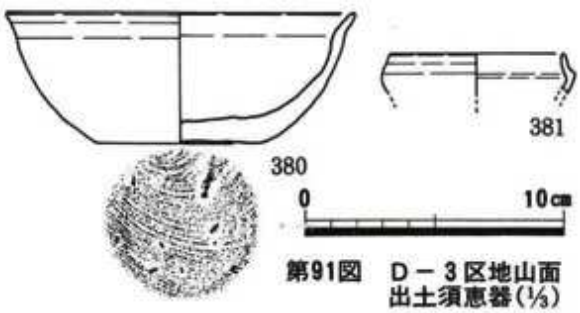


第89図　ＳＤ－０１内６層出土土師器(⅓)



(377－須恵器)

第90図　ＳＤ－０１底面出土須恵器・土師器(⅓)



第91図　Ｄ－３区地山面出土須恵器(⅓)

このSD－01内の堆積土でもある6(18)層暗茶褐色土内からは，赤色塗彩を施した土師器片がよく出土している。器種は坏が多く，皿類もみられる。第89図368～375は坏で，368～372は口縁部片，373～375は高台の部分である。376は皿である。他に土錘も土師質のものが２点（137頁第96図482・483）出土している。

また，SD－01底面からは須恵器の小形壺（第90図377）と思われるものと，土師器の坏類（378），甕類（379）も出土している。

ところで，SD－02東端部の「T」字状の「－」部分の溝については，SD－01のつづきとみなした方が妥当と推察される。

第91図は，D－3区側の地山面から出土した須恵器である。380は坏で，静止糸切り痕を残している。381は小形の壺型土器と思われる。

［E－3区，G－3区，および，その他の出土遺物］

E－3区は，E－2区北側の斜面に調査の中途で新たに設けた幅３m，長さ11mのトレンチで，南北の標高差は５mを測る。この斜面の竹林の中で，池ノ奥C遺跡を発見する手掛かりとなった，突帯および竹管文を施した特殊土器片を表採したことに基づいて設定したものである。

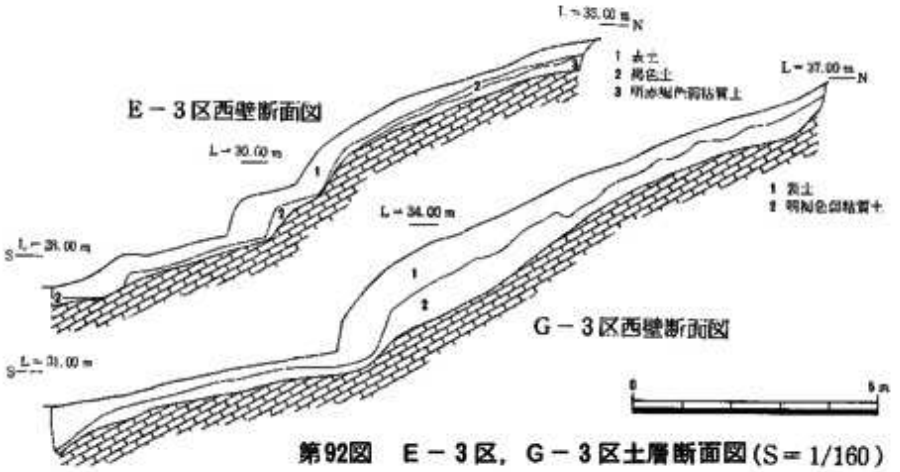
表土下0.35～1.0mで赤褐色の地山に達し，その間は三つの層に分かれた。遺構はみあたらなかった。(第92図)

遺物は，１層，２層から磨滅した須恵器片が極少量出土した。しかし，池ノ奥C遺跡の特殊土器片は出土しなかった。

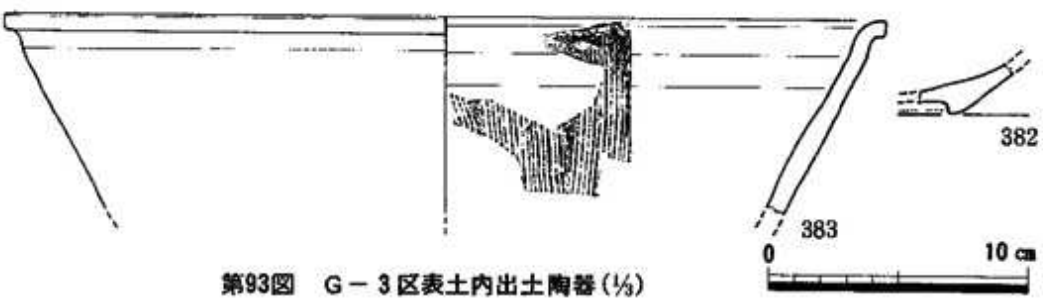
G－3区は，G－2区北側の石垣により一段高くなったテラス，および，そのつづきの斜面にやはり調査中途で新たに設けた幅３m，長さ15mのトレンチで，南北の標高差は6.7mを測る。

表土下0.4～1.6mで赤褐色の地山に達したが，遺構は確認できなかった。(第92図)

遺物は，１層から少量の須恵器片，および，高台を削り出した陶器片（第93図382)，近世以降の擂鉢型陶器片（383)，２層からの須恵器片３片ぐらいしか出土していない。

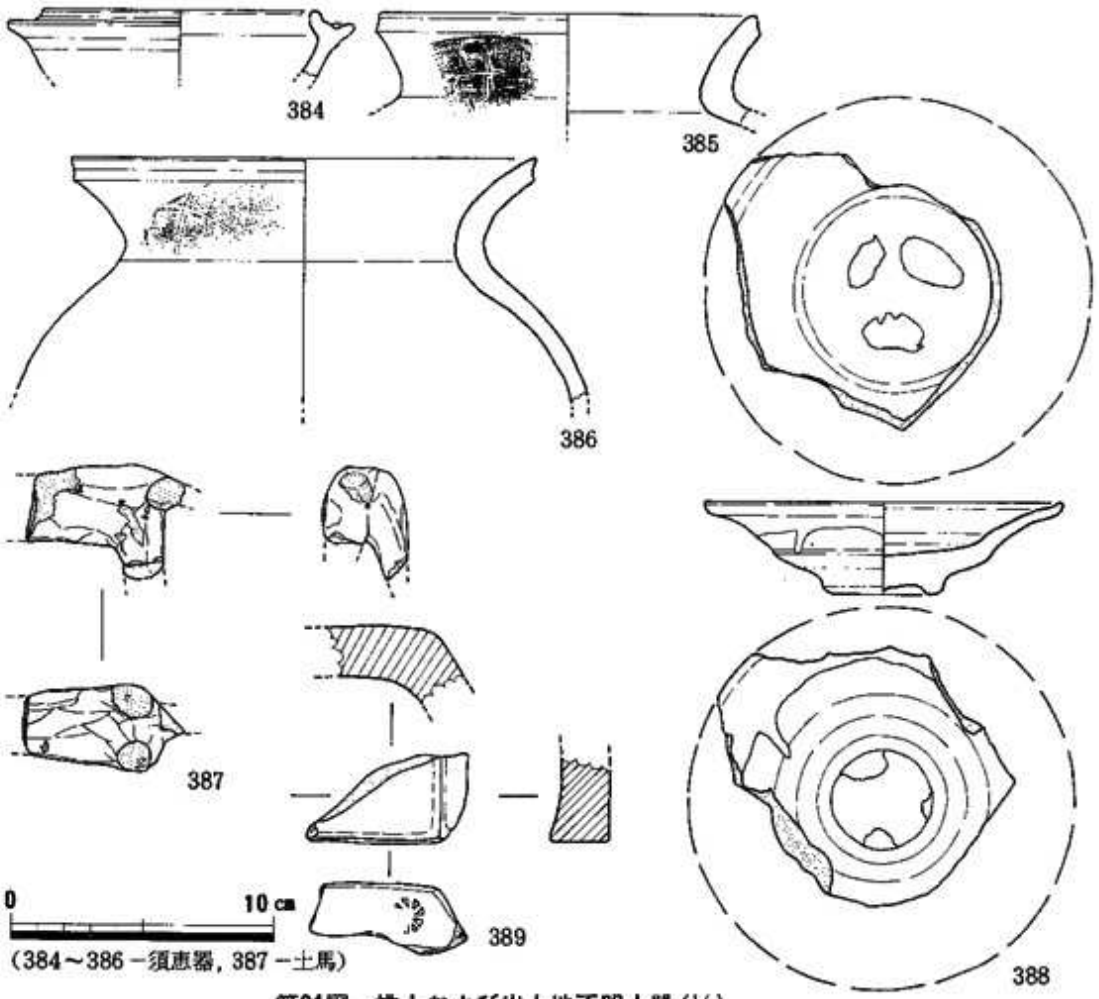


第92図　E－3区，G－3区土層断面図(S＝1/160)



第93図　G－3区表土内出土陶器(⅓)

第94図は，排土内および出土地の不明な遺物である。387は須恵質の土馬で，胴部下半残存。尻部に径2×3㎜，深さ5㎜の肛門孔を穿いているが，性別の表現はない。



第94図　排土および出土地不明土器（⅓）

4．出土遺物の検討

［土錘について］

本遺跡から出土した土錘の総点数は107点にのぼる（第95・96図）。胎土で分けてみると，瓦質のものが1点，須恵質2点，残りの104点が土師質のものである。出土層位をみてみると，遺構面上およびその覆土内からは，土師質のものが10点しか出土していなく，排土および出土地不明の7点（土師質）を除いた残り全ての土錘は，表土ならびに上層の堆積土層内からである。

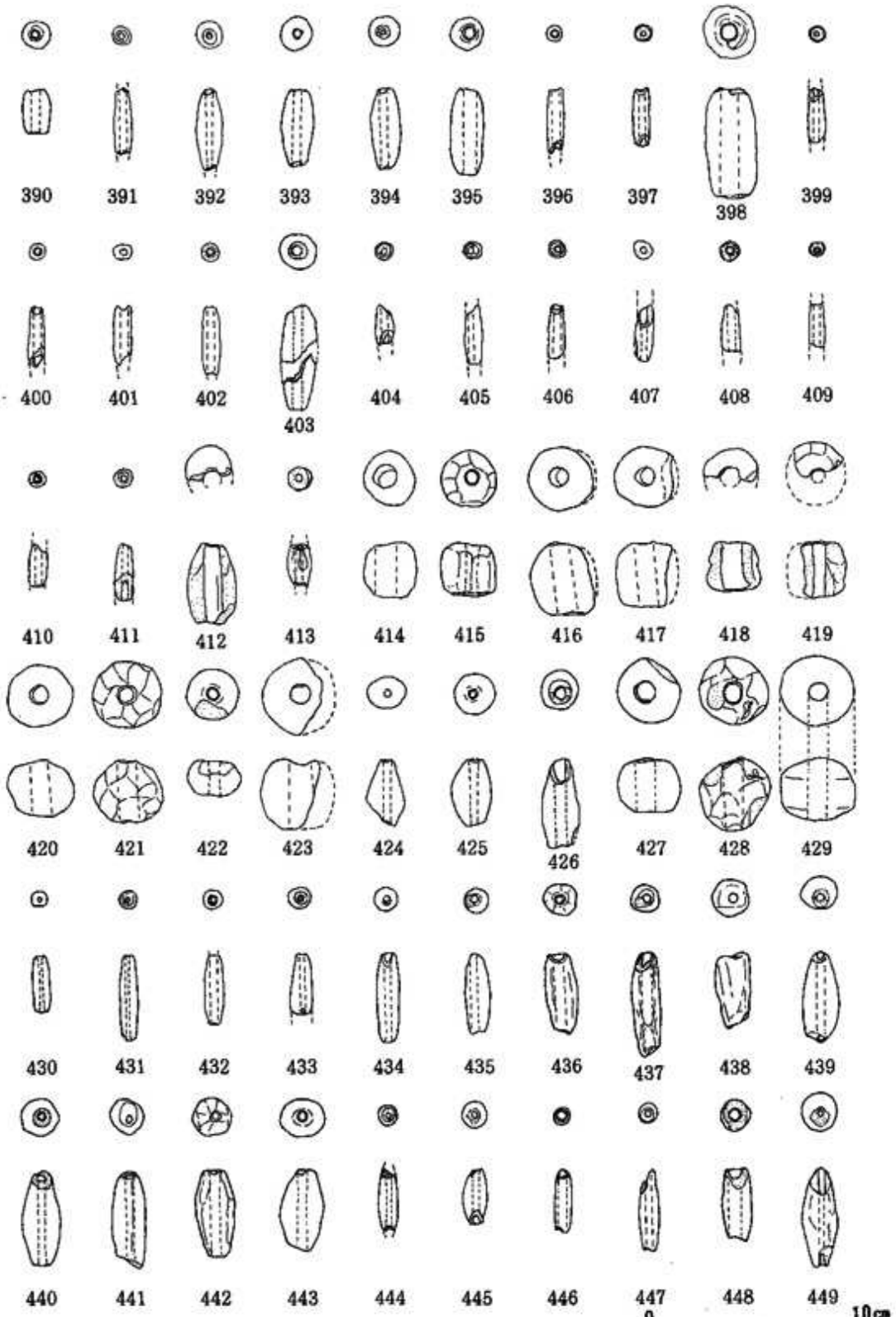
土錘の形態から便宜的に管状土錘，円筒形土錘，球形土錘，紡錘形土錘の4種類に分類

してみた。各々の出土数は，管状土錘75点（内瓦質１点），円筒形土錘11点（内須恵質１点），球形土錘17点（内須恵質１点），紡錘形土錘４点で，圧倒的に管状土錘が多い。

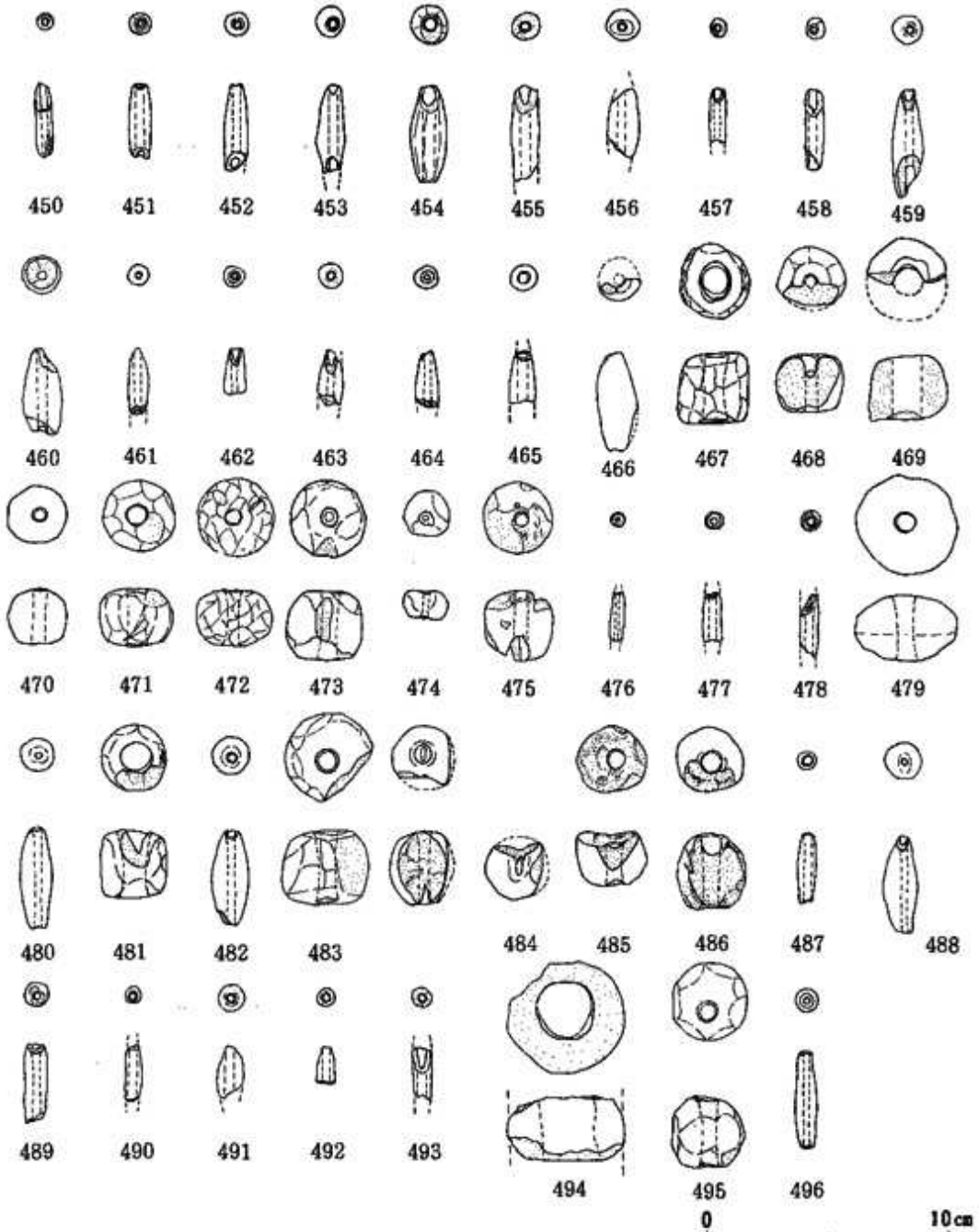
管状土錘としたものは，細長い管のような形で長軸に沿って円孔が貫通している土錘のことである。平均的なものの長さは２～５cm，径0.5～２cmで，重量は1.3～12.4ｇを測る。398はやや大形で，412・443のように長さに比して径が大きく太いものも含まれる。成形は棒状のものに粘土を巻き付けていると思われ，指頭による押圧痕の残るものが多い。440には，ナデ調整がみられる。円筒形土錘としたものは，管状ののものより径が大きく長さと径にあまり差のない円柱状の土錘である。長さは2.3～3.3cm，径は2.4～3.0cmで，重量は11.8～26.4ｇを測る。成形は棒状のものに巻き付けていると思われるが，467は形を整えた後一方からの穿孔，468は二方から穿孔したものか。494は須恵質のもので，長さは不明だが径は4.85cmと大きく，本遺跡では異質な土錘である。球形土錘としたものは，球形に近い外観を呈している土錘である。大きさは2.5～3.2cm前後で，重量は11～30ｇ程である。成形は棒状のものに粘土を巻き付けているのと，形を整えてから二方（421・423・472？），あるいは一方（484・495）より穿孔しているものがある。484は穿孔時の指圧によるのか片側が扁平になっている。また，475にはナデ調整を施している。紡錘形土錘としたものは，円柱状で両端の尖った土錘である。479は長さ2.7cm，径4.2cmで，重量は46.8ｇあり，形を整えてから二方向穿孔したものと思われる。本遺跡出土中最も重い土錘である。

以上のように本遺跡出土の土錘について形態から分類を行ってみたが，それではこの土錘の用途は何かを考えてみたい。歴史時代における土錘の用途としては，漁網錘，あるいは，祭祀関係遺物いわゆる玉類という二つの考え方がある。漁網錘の場合，現在の漁網錘と同様水中に垣根のように立つ漁網の下端に垂下したものと推定され，上端には浮子が付いていたものと思われる。また，現在漁網に盛んに使用されているのは管状土錘で，その他の形態の土錘を使用している例はあまりないようである。今使用されている例をみてみると，網の下端に土錘を付けた紐を下げているようである。重量も小型の刺網の２ｇのものから大きいのは１kgを超えるものまでと幅がある。[註1] 玉類とは，古墳時代祭祀の伝統を伝える土製模造品の一つである。[註2]

ところで，出雲国風土記に「朝酌促戸渡。…則ち筌を東西に亙す。…大き小き雑の魚にて，浜曝がしく，家闐ひ，市人四方より集ひ，自然に廛を成せり。[茲より東に入り，大井浜に至るまでの間の南北二つの浜は，並びに白魚を捕り，水深し。]」という記載がみられる。[註3] [　] の記述は，福富の浜と岩汐谷の出口にあたる浜についてのことで，白魚の漁場があったようである。この二つの浜は近世末以来埋め立てられて，今では大井新田とい



第95図　土錘実測図(1) (⅓)



（494・495－須恵質，496－瓦質）

第96図　土錘実測図(2)（⅓）

う広い水田地帯になっているが，当時はこの浜辺まで，イガラビ遺跡から直線距離にして，約1kmぐらいと推察される。今でもある「矢田の渡し」付近では，笠という竹を編み川に仕掛けて魚を捕っていたようである。しかし，この二つの浜は，水深があるようなので刺

網を仕掛けて漁をしていたのだろうか。また，同風土記には「大井浜。則ち海鼠（こ）・海松（みる）あり。又，陶器を造れり。」と記載されているが[註4]，この大井浜は，本遺跡の東側谷が開けたところを流れる大谷川の河口付近である。この浜は岩汐谷の浜より東側にあたり，やはりナマコやミルという緑色藻類等の水産物を捕っていたようである。以上のような出雲国風土記の記載内容からも推定して，管状土錘については，漁網錘と考えて差し支えないと思われる。

これに対して，球形土錘は玉類すなわち祭祀関係遺物と考えたほうがよいと思われる。それというのも，池ノ奥A遺跡[註5]からも土錘が35点出土しているが，3点ほどが円筒形土錘であとの32点は全て球形土錘であり，管状土錘は1点も出土していない。しかも，この池ノ奥A遺跡の立地条件を考えると漁網錘とは考えにくい。池ノ奥A遺跡は，標高32～45mのところにあり，浜辺に出ようとすると東隣にある池ノ奥窯跡群[註6]（池ノ奥A遺跡とほぼ同じ時期にも操業をしていたようである）を横切らなくてはならなく，漁網を持っての歩行は難しいとみうけられる。またこの遺跡は，その他の出土遺物から推定してみると祭祀に関係した遺跡の可能性が強く，さらに，土錘も管状のものが1点も出土していなく，土錘のこの形態的な差が遺跡の在り方を示しているようにも思われる。

また，円筒形および紡錘形土錘については，円筒形土錘の一部は管状土錘の大形品と推察されるが，やはり大部分は玉類すなわち祭祀関係遺物であると考えられる。

註

註1　鳥羽市教育委員会『鳥羽貝塚遺跡』1975年

註2　金子裕之編『律令期祭祀遺物集成』1988年

註3　加藤義成『出雲国風土記参究』（松江今井書店）
なお，［　］は細川家本「出雲国風土記」原文の割注。

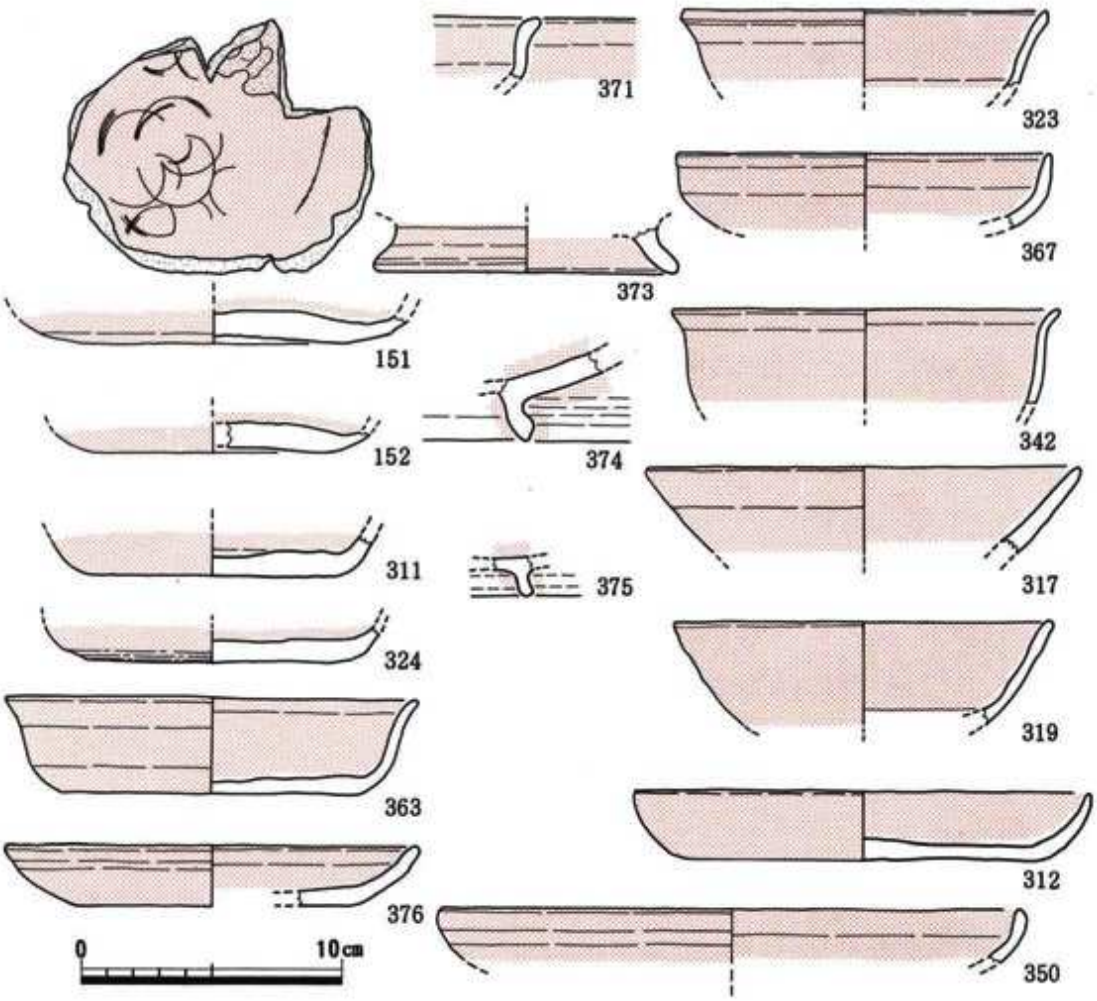
註4　註3に同じ。

註5　本報告書第2分冊「池ノ奥A遺跡」参照。

註6　本報告書第2分冊「池ノ奥窯跡群」参照。

［赤色塗彩土師器について］

本遺跡では，多量の内外面ともに赤色塗彩を施した土師器が出土している。特に，C－3・D－3区において検出された土器溜り1およびその下のSB－01の柱穴であるP1内，土器溜り2，SD－02内，さらにSD－01内からよく出土している。正確な個体数ははっきりしないが，破片を数えると約1600片にもおよぶ。しかしそのうち，接合，復元を行い，図



第97図　赤色塗彩土師器実測図（⅓）

化できたのは57点に過ぎない。

器種は，大半が坏・皿類（第97図）に大別でき，高坏・壺・鍋も少しみうけられる。

坏類の口径は13～15cm前後のものが多いが，最小で10cm，最大で17cmを測る。無高台のもの（151・152・311・324・363）と，高台の付くもの（373・374・375）に分かれる。口縁部の形態は，内弯するもの（367），外反するもの（342）もみられるが，やや外反するもの（363）や，体部から口縁部にかけて外傾するもの（317・319）がほとんどである。また口縁端部を観察すると，丸みを帯びるものが大半を占めるが，外面に平坦面を形成するもの（323），内面にやや平坦面を形成するもの（371）もみうけられる。

皿類は，口径15.5～22cm前後，器高は2～3.5cm前後のもので，体部から口縁部にかけて外傾するもの（376）と，内弯するもの（312・350）に分かれる。

暗文を施しているのは，図化できたものでは151の坏しか確認することはできなかった。底部内面に円弧文を施している。

調整についてみてみると，確認できたものは全て，口縁部から体部にかけて，内外面ともにロクロナデの手法を用いている。また，324は外面の体部と底部の境目に篦削り調整を施している。底部の切り離しは，篦切り後ナデ調整を施しているもの（151・152），篦切りのまま未調整のもの（324），ロクロ回転による篦切り（312），静止糸切り痕を残すもの（311），回転糸切り痕を残すもの（363）に分かれる。

坏・皿類について，出雲国庁跡で分類されたもの[註1]と比較してみると，暗文だけを施した土師器の第1型式とされるものは，1点もみあたらない。赤色塗彩を施し暗文を入れる第2型式については，1点（151）あり，他にも小破片だが極少量みられる。赤色塗彩を施し暗文を欠く第3型式に，大半のものが該当する。しかし，出土数に比して図化できたものの量は少なく，大多数の破片については磨滅が著しく判別できないものが多い。そのうえ，図化はできても，やはり磨滅が著しく調整等の観察不可能なものがかなりあった。時期については，出雲国庁跡出土例からみて概ね8世紀後半頃から末にかけての奈良時代から平安時代初頭に属するものと推定される。

坏・皿類の他に，高坏の坏部と思われるもの（127頁第82図329），壺（89頁第21図65・122頁第75図299）も出土している。65は長頸壺の頸部で，調整はロクロナデを用い，体部との接合目に凹みがあり内面に指押さえの痕がみられる。299は短頸壺で，やはり調整はロクロナデを用いている。さらに，把手付きの鍋（122頁第75図300・301，同一個体）があるが，極めて稀有なものであろう。

歴史時代の赤色塗彩を施した土師器は，周辺の池ノ奥A遺跡[註2]（破片数約50点，無高台の坏，盤），池ノ奥窯跡群[註3]（土馬）からも出土している。さらに島根県内では，松江市大草町・出雲国庁跡[註4]，同福原町・芝原遺跡[註5]（無高台の坏，高台付坏，皿，蓋等），安来市・高広遺跡[註6]（無高台の坏，高台付坏，皿）での出土例がみうけられる。

ところで，赤色塗彩に用いた顔料物質は，全てベンガラ[註7]（酸化第2鉄；Fe_2O_3）である。また，鏡鉄鉱（Specularite；206頁写真図版）という，銀色を呈した赤鉄鉱（2〔Fe_2O_3〕）の一種である鉱物を磨滅すと赤色に発色するとのことであるが，その鉱脈が朝酌・川津地区に所在する嵩山に，僅かだが存在するようである[註8]。この鏡鉄鉱が，本遺跡および池ノ奥窯跡群から小さな破片であるが数十片出土している。鏡鉄鉱を採掘してきて，顔料のベンガラを作り出していたのだろうか。興味深い問題点である。

本遺跡は，赤色塗彩を施した土師器と他の出土遺物とを考え合わせると，何らかの祭祀

的な性格を持ち合わせた遺跡とも推察されるが，赤色顔料の一つに成り得ると推定される鏡鉄鉱の小破片が出土していることから，ここでは祭祀に用いる赤色塗彩を施した土師器を生産していた可能性も高いのではないだろうか。

註

註1　松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1970年

註2　本報告書第2分冊「池ノ奥A遺跡」参照。

註3　本報告書第2分冊「池ノ奥窯跡群」参照。

註4　註1に同じ。

註5　松江市教育委員会『芝原遺跡』1989年

註6　島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984年

註7　武庫川女子大学薬学部教授　安田博幸氏，同助手 森眞由美氏の分析結果による。
本報告書第2分冊「自然科学的考察」第1節参照。

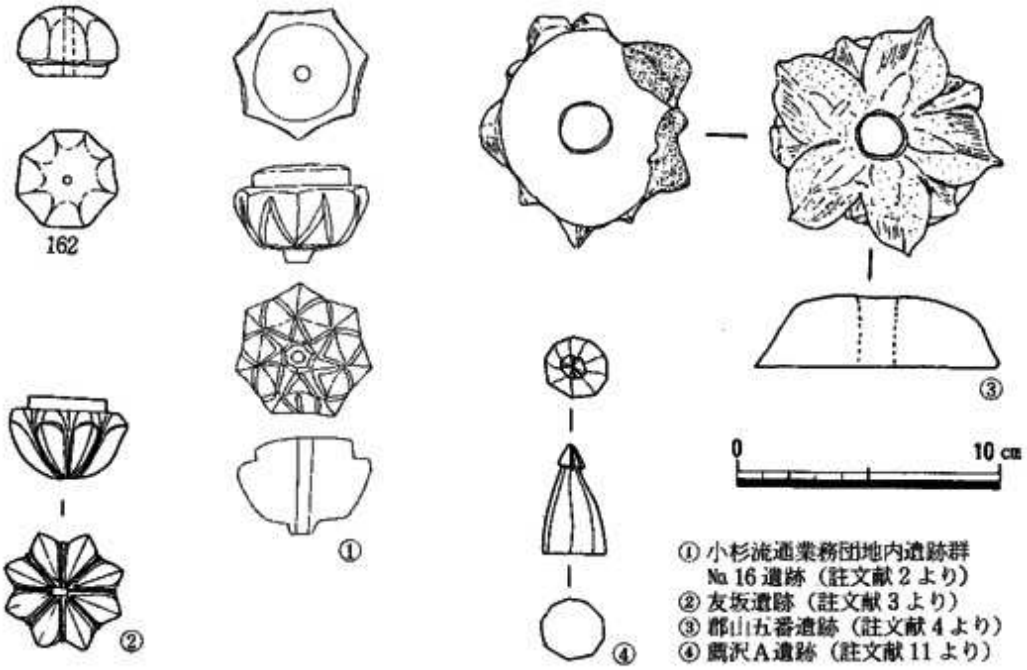
註8　島根大学教育学部教授 三浦清氏の御教示による。

［小形台座型土製品について］

小形台座型土製品とは，C－1(西)～E－2区の第1遺構面上から出土した土師質の土製品（第98図162）の仮称で，島根県内での出土は初めてのものである。しかし，やや形態的には少々異なるが類例としては，富山県で2例および福島県で1例の出土品をみることができる。[註1]

富山県小杉町・大門町・小杉流通業務団地内遺跡群No.16遺跡[註2]出土品（第98図①）は，須恵質のもので7枚の蓮弁から構成されており，生焼けのためか灰白色を呈している。径5～5.2cm，高さ3.8cmを測り，上下に4～6㎜の円孔を穿っている。天平～平安時代前期中葉頃のもの。同婦中町・友坂遺跡[註3]出土品（②）も，須恵質のもので8枚の蓮弁から構成されている。径3.8～4.8cm，高さは3.2cmを測る。蓮弁の稜線はくっきりと浮き彫りにされ，先端部は鋭く成形されている。長方形の孔が上下に貫通している。奈良・平安時代の作である。福島県双葉町・郡山五番遺跡[註4]の出土品（③）は，中央に上下に貫通した円孔を有し，蓮花をあしらっている。径7.7cm，高さ2.7cm，孔径1.8cmとやや大きい。中世以後の土製品のようである。No.16遺跡および郡山五番遺跡の出土品は，本遺跡出土品に比して大きく，しかもこの3遺跡からの出土品には，蓮弁状の文様がみうけられるところに差異がある。これらの小形土製品は，土製仏像（例えば，誕生釈迦仏立像[註5]）の台座（蓮華座）とみられている。

本遺跡出土品には，蓮弁状の文様は彫り込まれていないが，漆か何かを塗ったと思われる痕があり，塗彩を施して表したとも考えられるが断定はできない。この部分だけを捉えて本遺跡出土品を，土製仏像の台座（蓮華座）とするのは早計であると思われる。なお，この土製品が出土した遺構面上の覆土内から托と円面硯（95頁第33図109・110）が，上層の堆積土層内からは二段重ねの灯明皿（108頁第49図225）等が出土しており，何か関連があるのかも知れない。



第98図　小形台座型土製品等実測図（⅓）

ところで，本遺跡出土の土製品の形態は，一方では出雲国庁跡から出土した銅製の鍾[註6]にも類似している。大きさもほぼ同じぐらいであり，上面に蓮弁状の文様を入れ上部中央に紐と環を付け，円孔がないのが相似点である。この銅器は，重さが157.77ｇあり，度量衡の管理もしていたとされている役所からの出土品であるため，分銅ではないかとみられている[註7]。同様の銅製品は，静岡県袋井市・坂尻遺跡[註8]や同藤枝市・山廻遺跡[註9]からも出土しており，分銅と推定されている。しかし，土製品で分銅と推測されるものの例はない模様である。律令制度以降の分銅は，現段階では金属製品が使用されていたとみられているが[註10]，重量が乾湿により少々変化する土製品は不向きなのだろうか。しかし，厳密に重さを測っていたかどうかは判らないし，出土したのが役所跡ではないところなので，概ね重さが揃えればよいとして用いたとも考えられないだろうか。因に本遺跡出土品の重量は，晴れた日

で36.45ｇを測った（平成元年７月７日測定）。

また，近くの鷹沢Ａ遺跡からも須恵質の９角錘（④）が出土している。[註11] 丁寧な作りでそれぞれの面は滑らかである。上段は４角錘を呈し切り込みがあり紐を掛けることができそうである。重さは，8.5ｇを測る。この９角錘の用途もはっきりしないが，分銅の可能性も考えられないだろうか。

以上のように，本遺跡出土の小形台座型土製品（仮称）について，その用途を類似品から考察したみたが，現段階では不明であると言わざるを得ない。今後資料が増加した時点で明確になるのではないだろうか。

註

註１　島根県教育委員会文化課主事　内田律雄氏の御教示による。

註２　富山県教育委員会『小杉流通業務団地内遺跡群－第６次緊急発掘調査概要』1984年

註３　婦中町教育委員会『友坂遺跡調査報告書』1984年

註４　福島県双葉町教育委員会『郡山五番遺跡Ⅱ』1980年

註５　石見国分寺跡から昭和63年度の調査で，７世紀後半白鳳時代の銅造誕生釈迦仏立像が出土している。「石見国分寺跡出土銅造誕生釈迦仏立像について」（島根県文化財愛護協会誌『季刊文化財』64号 1989年）

註６　松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1970年

註７　宮本佐知子「古代の度量衡」（町田章編　古代史復元８『古代の宮殿と寺院』講談社 1989年）

註８　財団法人大阪市文化財協会　宮本佐知子氏の御教示による。袋井市教育委員会「推定遠江国佐野郡衙跡坂尻遺跡」

註９　註８に同じ。藤枝市教育委員会『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書』奈良時代～近世編 1981年

註10　松江市竹矢町・才ノ峠遺跡から出土した石製品の中に１点分銅ではないかと推定されるものがある。島根県教育委員会「才ノ峠遺跡」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1983年

註11　松江市教育委員会『鷹沢Ａ遺跡・鷹沢Ｂ遺跡・別所遺跡』1988年

5. 小　結

調査の結果，本遺跡では地山面を含め三つの遺構面を確認し，溝状遺構（SD－02）を伴う掘立柱建物址１棟（SB－01），円形焼土壙11基，建物址を復元するまでには至らなかったが多数のピット，円形土壙５基等を検出した。また，土器も須恵器，土師器の他縄文式土器（後期・晩期），中世の陶器（亀山焼系統他），中国産（？）の白磁片，近世以降の陶器等と出土している。しかし，中心となるものは須恵器と土師器で，全出土量に占める割

合は須恵器が一番多く約2/3近くを占めている。須恵器の形態および赤色塗彩を施した土師器から推察して，本遺跡の営まれていた中心的な時期は，概ね7世紀中頃から9世紀初頭にかけての期間で，特にSB−01の時期は8世紀代と思われる。

SB−01等が検出されたC−3・D−3区などの拡張区以外の本遺跡は谷底に位置しており，各遺構面およびその覆土内には石，礫が多量に混じっていたので，自然災害に遭った可能性が強いと思われる。しかも，災害に見舞われてもその後場所を替えず元のところで営みを続けていたものと考えられる。なお，上部の遺構に比べて下の遺構面およびその覆土内の遺物は，出土量が少なくなっていく傾向がみられた。

また，上層の堆積土層からの出土遺物は，池ノ奥C遺跡の特殊土器片および池ノ奥1号墳の須恵器甕片を伴っているので，その他の器種のものも例えば坏とか壺についても，全て本遺跡での営みによる遺物とみることはできないように思われる。

つぎに，本遺跡の性格について考えてみたいと思う。まず，遺構面から考察してみると，掘立柱建物址（SB−01）および建物址に復元するまでには至らなかったがピット群の存在から，ここに小さな集落があった可能性が強い。そして，SB−01に付帯するSD−02やSK−15・16等には粘土塊が残っていたが，イガラビ，池ノ奥周辺で現在みることができる粘土は，土師器の胎土として申し分ないようである。[註1] さらに，赤色顔料であるベンガラの原料に成り得るとみられる鏡鉄鉱（Specularite）が，本遺跡内から出土していることと考え合わせると，土師器の出土量が須恵器に比してかなり少ないが，ここでは赤色塗彩を施した土師器の坏類，鍋やその他の甕，壺等を生産していた工房址があったのではとも考えられる。しかも，それを裏付けるかのような壁面は焼け締まっているが，床面はあまり焼けていない円形焼土壙を検出している。この円形焼土壙の用途は，やや大き過ぎるかも知れないが竈を掘付た炉の跡とも推察されるが，土師器焼成窯の可能性もあると考えられる。[註2] また，出土遺物をみてみると，土師質の管状土錘がかなりあることや，出雲国風土記の大井地区に関する記載[註3]から，ここに生活拠点を持っていた人々は，浜辺からは少し離れてはいるが漁業にも関わりを持っていたのではと推定される。

本遺跡から出土した遺物には，この他にも幾つかの特徴を持つものがみられる。

◎土馬5個体以上（A〜F区）

◎ミニチュア土製支脚（須恵質）1点（B−1区）

◎小形坏（土師質）1点（B−1区）

◎球形・円筒形・紡錘形土錘（土師質・須恵質）32点

◎円面硯1〜2？点（D−2区，C−1区？）

◎托１点（D－2区）

◎灯明皿２点（C－2・D－区間畔内，C－3区）

以上の何らかの祭祀に用いられたものではと推察されるものである。土馬については，祈雨，祈止雨等の水霊信仰との関わり，あるいは，荒ぶる神に対する生贄の馬の形代として神に捧げられたもの。また，災いや病をもたらす疫病神から免れるため，その乗り物である馬（土馬）の脚を折ってその動きを封じるものといった説がある。本遺跡では，自然災害，荒ぶる神への捧げ物であったのだろうか。

さらに，須恵器の坩が31個体以上（特にF～I区に集中して出土），横瓶８個体以上（A～E区およびC－3区）と他の遺跡に比べて多く出土しているが，これらも祭祀に関わりを持っていたのだろうか。

上記のことから，本遺跡についてまとめてみると，つぎのようになる。

① 小さな集落跡。

◎須恵器の出土量が多く，北隣の谷筋に所在する池ノ奥窯跡群[註4]（窯本体は確認できなかったが，本遺跡とほぼ同時期頃と思われる須恵器もよく出土している）を開いた工人集団と密接な繋がりを持っていたのか。例えば生活拠点の一つか。

◎土師器，特に赤色塗彩を施した土師器の制作をしていた工房跡か。

◎漁業にも携わっていたのか。

② 祭祀に関わりを持つ遺跡。

◎集落に付帯する祭祀を執り行っていたのか。

◎住居内で祭りが行われていた可能性がある。例えば地鎮祭等か（SB－01内の土器溜り２はその跡か）。

◎土馬を用いた祭祀を執り行っていたと思われる。

何れにしても，本遺跡だけをみて論ずることは全体を見誤る可能性があり，イガラビ，池ノ奥両地区の各遺跡との相互関係を見極めて検討しなければならないだろう。特に池ノ奥Ａ遺跡[註5]の祭祀に関わりを持つ遺物との共通点あるいは相違点については，本遺跡を考えるうえで重要なことであると思われる。

また，今まで朝酌・大井地区では，縄文，弥生時代の遺跡が見つかっていなかったが，本遺跡から後期，晩期の縄文式土器片が６個体分出土した。このことにより，朝酌・大井地区での人の営みが始まった時期が，一気に縄文時代にまで遡れることは注目されよう。今後の資料増加に期待するものである。

註

註1　島根大学教育学部教授 三浦清氏の御教示による。

註2　財団法人滋賀県文化財保護協会 近藤滋，松沢修両氏の御教示による。滋賀県内に，時期は下るが黒色土師器を焼成した円形焼土壙の検出例があるようである。

註3　加藤義成『出雲国風土記参究』（松江今井書店）

註4　本報告書第2分冊「池ノ奥窯跡群」参照。

註5　本報告書第2分冊「池ノ奥A遺跡」参照。

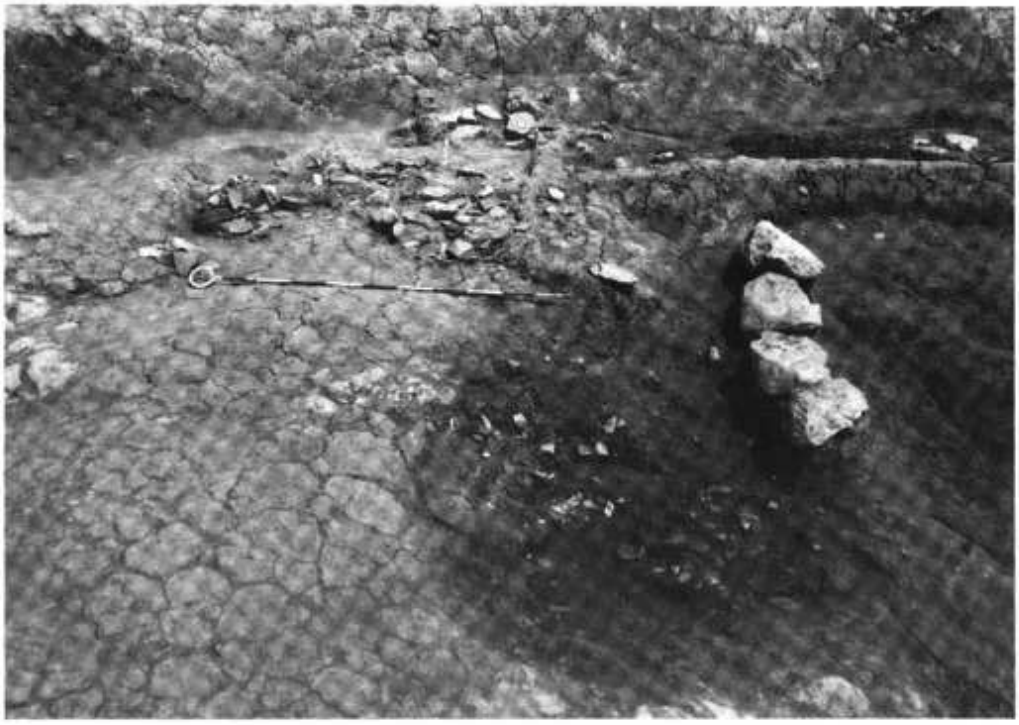


写真1　C－3区土器溜り1(上)・土器溜り2(下)

附編

池ノ奥窯跡群４号窯附近に見られる金属様破片について

島根大学教育学部　三　浦　　清

光沢ある黒色(Steel Gray)の見掛上金属様破片である。筆者のもとで調べたものは二点で，両者は発見場所が異っている。各試料の発見された層準は以下のとおりである。

(1)：窯跡４号アー１区第４層遺物包含層

(2)：窯跡４号A－W区８層

両試料ともに自形結晶片で，特に(2)の試料は新鮮でやや大きく長径７ミリメートル程度の薄片状をなす。この試料の表面の電顕写真を示しておくが，恐らく天然の鉱物結晶であろうと思われる。

両試料の分析値は表に示すとおりで，特に(2)の試料は新鮮な赤鉄鉱であり，(1)の試料はやや変質しているように見える。

この種の金属光沢を示す赤鉄鉱(Hematite)を特にSpecularite と呼んでいる。

両者ともに，條痕色は赤茶色を示す。従って細粉にすると赤茶色のベンガラになる。

池ノ奥窯跡群４号窯附近に見られる金属様破片の分析値

試料 / 成分	(1)	(2)
Si	0.33 (Wt %)	0.13 (Wt %)
Ti	0.01	0.62
Al	0.60	0.33
Fe	69.46	67.35
Mn	0.19	0.40
Mg	0.30	0.53
P	0.15	0.10
S	0.11	0.04
Fe_2O_3 換算値	99.31	96.42

(1)：窯跡４号アー１区第４層遺物包含層
(2)：窯跡４号A－W区８層

出土遺物観察表

縄文式土器

番号	形態	特徴	胎土	色調	出土地点
1		表 隆帯	1㎜までの砂粒含	淡緑灰色	A－2・B－2間畦8層
2			2㎜までの砂粒含	黒褐色	〃 〃
33	深鉢	表 太い沈線，条線	〃	淡黄褐色～黒褐色	A－2 11層
79		表 二条の沈線	〃	黒褐色	B－1 6層
80		表 沈線	4㎜までの砂粒含	〃	〃 〃
266		表 突帯部刻目文有 二条の沈線 裏 二条の条線	3㎜までの砂粒含	灰褐色，黒褐色	G－1 8層

須恵器

番号	形態	口径cm	器高cm	形態・手法の特徴	その他	出土地点
4	坏蓋	11.0	4.05	箆切り	㋮箆記号	B－1 8層
5	〃	16.4	3.5	輪状つまみ・かえり，㋮箆削り＋回転ナデ	㋮箆傷有，重ね焼き痕	A－2 10層上面
6	蓋	23.1		㋮回転ナデ	大形品	B－2 8層
7	坏身	10.0	3.0	箆切り後ナデ，㋮回転ナデ	㋮自然釉斜掛	B－1 〃
8	〃	9.8	3.55	箆切り，㋮箆削り＋回転ナデ	㋮箆記号	〃 〃
9	低脚付坏		残 3.8	㋮回転ナデ	低脚部	〃 〃
10	高坏	14.4	残 8.2	台形透し（一方），切り込み（一方）		〃 〃
11	〃	15.25	残11.1	三角形透し・切り込み（二方向）		〃 〃
12	高台付壺		残 8.3	静止糸切り，㋮回転箆削り後回転ナデ		B－2 〃
13	甑	9.0	7.8	糸切り，回転ナデ	自然釉付着	B－1 〃
14	壺	44.8	残18.2	沈線＋波状文，回転ナデ	口縁部	C－1（東）10層上面
15	〃	21.0	残12.8	口頸部回転ナデ，肩形㋮平行叩き後カキ目	㋮自然釉付着	B－1 8層
16	横瓶	12.6		口頸部回転ナデ	口頸部	〃 〃
17	〃			㋮平行叩き後カキ目，充填痕有	㋮自然釉付着	〃 〃
23	坏身	8.2	残 1.5	回転ナデ	重ね焼き痕，㋮自然釉斜掛	A－1 10層
24	高坏		残12.45	台形透し・切り込み（二方向）＋沈線		B－1 〃
25	〃		残 9.2	二段切り込み（二方向）＋沈線，回転ナデ		〃 地山面P内
26	壺		残 3.5	箆切り後静止ナデ，回転ナデ		〃 〃
27	長頸壺		残15.7	箆切り後ナデ，㋮箆削り＋回転ナデ・カキ目有	自然釉付着	A－1 10層
28	甑			突帯部貼り付？，回転ナデ		〃 〃
30	坏身			㋮沈線有		B－2 11層
31	〃	11.1	3.2	糸切り，回転ナデ		〃 〃
34	坏蓋	13.2	3.2	輪状つまみ・かえり，箆切り，㋮回転ナデ	重ね焼き痕	A－1 7層
35	〃			輪状つまみ，㋮箆削り＋回転ナデ	㋮竹管文2つ有	B－1 〃
36	〃	12.4	2.45	宝珠状つまみ・かえり，㋮箆削り＋回転ナデ	完形，重ね焼き痕	B－2 3層
37	坏身	9.8	2.85	箆切り，㋮箆削り＋回転ナデ	㋮箆記号，重ね焼き痕	〃 〃
38	〃	10.2	残 2.5	回転ナデ	重ね焼き痕	A－1 7層
39	〃	9.4	残 1.7	〃		〃 〃
40	〃	6.3	2.25	〃	小形品，磨滅	〃 〃

須恵器

番号	形態	口径cm	器高cm	形態・手法の特徴	その他	出土地点
41	坏身		残3.0	箆切り，㋐回転ナデ	㋐箆記号，㋐粘土貼り付	A－1 7層
42	低脚付坏		残2.8	三角形透し（4方？）	低脚部	B－2 6層
43	〃		残3.2	㋐回転ナデ（底・体部境目箆削り）	〃	A－1 7層
44	高台付坏	15.4	6.4	回転ナデ		B－1 6層
45	高坏		残2.5	低脚型，台形透し		A－1 4層
46	〃	15.2	9.9	切り込み（一所）	脚部切り込み部分箆記号	〃 7層
47	〃		残8.7	〃 （二方向）	竹管文2条，重ね焼き痕	〃 〃
48	壺			沈線＋波状文，回転ナデ	口縁部	B－2 6層
49	〃		残8.6	箆切り，㋐箆削り＋回転ナデ・沈線	自然釉付着	B－1 7層
50	把手				壺の把手	B－2 3層
51	小形壺		残3.1	糸切り？，回転ナデ	㋐箆記号	B－1 〃
52	〃			回転糸切り，回転ナデ	〃	A－2 7層
53	壺			箆切り後ナデ，㋐箆削り，㋐回転ナデ	〃 ㋐自然釉付着	A－1 〃
54	〃		残3.9	回転糸切り，回転ナデ	底部㋐傷痕	A－2 6層
55	〃		残6.6	回転ナデ，㋐平行叩き目有，㋐指頭圧痕有		B－2 8層上面
56	鉢	24.0	残6.5	〃		〃 7層
57	甕又は鍋				㋐自然釉剥離	B 1 3層
58	〃			口縁端部回転ナデ		〃 〃
59	甕	25.0	22.5	把手付，㋐沈線有，円孔一所に2穴		B－2 7層
60	土製支脚		3.2	ミニチュア品，三叉突起，ナデ		B－1 3層
61	甕	16.1	残5.6	口縁部回転ナデ	頸部㋐押当て具の木口痕有	B 2 〃
62	〃	19.4	残39.4	口縁端部切み有・回転ナデ		〃 7層
63	〃	26.0	残24.7	口縁部回転ナデ	㋐自然釉剥離	A－2 〃
86	坏蓋	13.3	3.3	輪状つまみ・短いかえり，㋐箆削り＋回転ナデ		D－2 12層下部
87	〃	14.0	3.1	輪状つまみ，糸切り，㋐回転箆削り＋回転ナデ		〃 〃 〃
88	〃	14.8	2.7	〃 ㋐回転ナデ		〃 〃 〃
89	坏身	8.6	2.85	箆切り，㋐箆削り＋回転ナデ，㋐回転ナデ	㋐自然釉付着，受部ややいびつ	C－1（西）12層下部
90	〃	10.3	2.85	箆切り後乱ナデ，㋐回転ナデ	ほぼ完形	〃 〃 〃
91	〃	10.6	4.15	箆切り後ナデ，㋐回転ナデ		〃 〃 〃
92	〃	10.8～11.6	4.1	㋐回転箆削り＋回転ナデ	口縁部楕円形	E－2 15層下部
93	〃	12.0～13.5	5.0	静止糸切り後ナデ，㋐回転ナデ	〃 ，重ね焼き痕	D－2 12層 〃
94	高台付坏	14.2	4.1	㋐回転ナデ		E－2 15層 〃
95	〃	12.6	4.5	糸切り，㋐回転ナデ	㋐箆記号	D－2 12層 〃
96	高坏	17.6	12.5	台形透し・切り込み（二方向）＋沈線		C－1（西）12層下部
97	〃		残5.5	脚部回転ナデ，坏底部㋐回転箆削り	坏部欠損	D－2 〃 〃
98	鉢	10.0	10.1	ジョッキ型，台座箇所箆削り，円孔4所有，	完形	C－1（内）〃 〃
99	長頸壺		残14.7	底部㋐回転箆削り，体部㋐箆削り＋回転ナデ	㋐自然釉付着	〃 〃 〃
100	〃		残7.1	肩部㋐カキ目，他回転ナデ	〃 〃	C－2 〃 〃
101	高台付壺		残8.9	箆切り後ナデ，回転ナデ	㋐ 〃 （底部）	C－1（西）〃 〃
102	壺		残7.2	体部下半㋐箆削り，他回転ナデ	㋐ 〃	D－2 〃 〃
103	甕		残24.85	頸部沈線＋波状文・回転ナデ	〃 〃	C－1（西）〃 〃
104	〃	40.0	残18.7	沈線＋波状文・回転ナデ	〃 口頸部	D－2 〃 〃

須恵器

番号	形態	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	その他	出土地点
105	甕		残35.2	胴部と底部別々に成形，㋣平行叩き後カキ目		C－1（西）12層下部
106	把手			先端部切れ込み有，挿入式		D－2 〃 〃
107	瓶又は鍋		残 9.3	㋣平行叩き，口縁端部回転ナデ，他ナデ	口縁部	C－1（西） 〃 〃
108	横瓶	14.0	27.0	体部開口部円形粘土板で蓋をしている	胴部箆記号	D－2 〃 〃
109	托		残1.25	箆切り		〃 16層
110	円面硯	14.9	2.8	静止糸切り	使用痕跡なし	〃 〃
111	坏蓋	16.6	3.0	輪状つまみ・かえり，箆切り後ナデ ㋣箆削り＋回転ナデ		〃 17層上面
112	〃	18.0	2.9	輪状つまみ・かえり，回転箆切り後ナデ ㋣回転箆削り＋回転ナデ		C－2 〃
113	〃	16.4	2.65	輪状つまみ・かえり	㋣自然釉剥離	D－2 〃
114	〃	14.8	3.4	輪状つまみ，㋣箆削り＋回転ナデ		〃 〃
115	〃	14.6	1.65	〃 〃		〃 〃
116	〃	14.6	2.3	輪状つまみ，静止糸切り後ナデ ㋣箆削り後回転ナデ	完形	C－2 〃
117	蓋			輪状つまみ剝離，天井部内外面カキ目有	大形品，中心に円孔有	D－1 〃
118	坏蓋	14.2	2.7	輪状つまみ，静止糸切り，㋣回転ナデ	輪状つまみの口径大	C－2 〃
119	蓋	19.3	3.5	宝珠状つまみ・かえり，㋣箆削り＋回転ナデ	重ね焼き痕，㋣箆痕有	D－2 〃
120	坏蓋			乳頭状つまみ，㋣回転ナデ		D－1 〃
121	坏身	10.5	3.8	箆切り後ナデ 〃	ほぼ完形	〃 〃
122	〃			〃 〃	㋣箆記号，㋣スノコ痕有	C－2・D－2間畦 17層上面
123	〃	8.7	3.15	糸切り後ナデ，回転ナデ	小鉢型	C－2 17層上面
124	〃	13.0	5.6	静止糸切り，㋣回転ナデ	重ね焼き痕	〃 〃
125	〃	12.8 ～13.6	4.65	〃 〃	口縁部楕円形，重ね焼き痕	E－1 〃
126	〃	12.6	3.9	糸切り指押痕有，㋣箆削り＋回転ナデ	㋣沈線有，㋣焼成後の箆痕有	D－2 〃
127	高台付坏	13.6	5.1	㋣回転箆削り＋回転ナデ	㋣箆記号	C－2 〃
128	〃	11.8	5.3	㋣箆削り後ミズヒキ	㋣自然釉付着	E－1 〃
129	〃			箆切り後ナデ，㋣回転ナデ	㋣箆記号	D－2 〃
130	〃	10.0	3.85	〃 ㋣箆削り＋回転ナデ	自然釉付着	〃 〃
131	〃	10.4	4.2	〃 ㋣回転ナデ		C－2 〃
132	〃	16.7	3.9	〃 〃		C－2・D－2間畦 17層上面
133	〃	14.0	5.05	静止糸切り後ナデ，㋣回転ナデ		C－2 17層上面
134	〃	12.6	残 3.7	〃 ㋣箆削り＋回転ナデ		〃 〃
135	〃	13.6	5.1	静止糸切り，㋣回転ナデ	体・底部境目に細い沈線有	D－2 〃
136	高坏	15.9	12.15	台形透し・切り込み（二方向）＋沈線		E－1 〃
137	〃		残9.75	切り込み（二方向）	片側「Y」形	D－1 〃
138	鉢	14.8	残 7.2	㋣箆削り＋回転ナデ，4条の沈線		D－2 〃
139	〃		残 5.0	静止糸切り，㋣回転ナデ	㋣箆記号	C－2 〃
140	長頸壺	11.0	残 5.7	回転ナデ	口頸部	D－1 〃
141	〃	15.6	残 5.8	〃	〃	C－2 〃
142	短頸壺	8.0	5.6	㋣箆削り（底部）＋箆削り後ミズヒキ		E－1 〃
143	小形壺		残 6.6	静止糸切り後ナデ，同転ナデ	㋣自然釉剝離	D－2 〃
144	長頸壺		残16.4	回転ナデ	胴部，紐の剝離痕有	E－2 〃
145	小形壺		残 7.1	胴部下半㋣箆削り，他回転ナデ	高台付	C－2 〃
146	壺		残10.25	㋣平行叩き後カキ目	胴部片，円孔有	D－2 〃

須恵器

番号	形態	口径cm	器高cm	形態・手法の特徴	その他	出土地点
147	坩	4.6	4.8	㊥粗い箆削り＋回転ナデ		D－2 17層上面
148	鉢		残9.7	㊥箆削り＋ミズヒキ	不完全沈線有	E－1 〃
149	提瓶	7.0	残3.3	回転ナデ	口頸部，自然釉剝離	〃 〃
150	横瓶	12.0	26.6	体部開口楕円形粘土板で蓋をしている	肩部線記号 焼き台・自然釉付着	D－2 〃
165	長頸壺	7.7	16.7	箆切り後ナデ，回転ナデ	ほぼ完形，自然釉付着	D－1 地山面P1内
166	坏蓋	13.4	3.3	輪状つまみ，箆切り，㊥箆削り＋回転ナデ	重ね焼き痕	C－2 17層
167	〃	14.8	3.0	〃 〃 〃		〃 〃
168	〃	14.6	3.2	〃 ㊥箆削り＋回転ナデ	㊥箆傷有，重ね焼き痕	〃 〃
169	〃	14.0	2.3	輪状つまみ，箆切り後ナデ ㊥箆削り後ナデ＋回転ナデ	重ね焼き痕	〃 〃
170	〃	14.75	1.8	宝珠状つまみ・かえり	㊥線記号，㊥自然釉付着	D－1 〃
171	〃	12.5	3.4	宝珠状つまみ，㊥箆削り＋回転ナデ		C－2 〃
172	坏身	9.0	2.6	箆切り，㊥回転ナデ		C－1（西） 17層
173	高台付坏	10.8	4.2	箆切り後ナデ，㊥箆削り＋回転ナデ		C－2 17層
174	〃	15.0	4.9	〃 ㊥回転ナデ		D－2 〃
175	〃	14.2	4.0	㊥箆削り＋回転ナデ		C－2 〃
176	〃	13.0	4.9	静止糸切り，㊥回転ナデ		〃 〃
177	〃	14.5	5.8	静止糸切り後ナデ，㊥回転ナデ	㊥線記号	〃 〃
178	〃	15.0	5.45	回転糸切り，㊥回転ナデ	底部㊥爪痕	E－2 〃
179	高坏		残6.8	切り込み（二方向）	坏部㊥線記号	D－2 〃
180	〃		残5.0		脚部線記号	C－1（西） 17層
181	高台付壺		残6.4	箆切り後ナデ，㊥回転ナデ		C－2 17層
182	坩	7.2	8.8	〃 回転ナデ	自然釉付着，重ね焼き痕	E－1 〃
183	鉢		残7.3	箆切り，㊥箆削り＋回転ナデ，沈線	〃	C－1（西） 17層
184	甕	20.8	残7.3	頸部沈線・回転ナデ	肩部気泡有，㊥自然釉付着	〃 〃
185	〃		残18.4	㊥平行叩き後カキ目，胴・底部別々に成形		C－2 17層
186	〃		残16.4	沈線＋波状文，回転ナデ	口頸部	E－1 〃
187	〃	19.2	残36.6	口頸部沈線・回転ナデ	自然釉剝離	C－2 〃
188	甑		残16.5	円孔（4所），底部端箆削り，他回転ナデ		〃 〃
192	坏蓋	12.4	残3.6	体部中央に鍵・口縁内面に薄い沈線有	自然釉付着	D－2 16層
193	〃	8.4	2.8	かえり，箆切り，回転ナデ	小形品，重ね焼き痕	C－1（西） 12層
194	〃	9.6	残3.5	宝珠状？つまみ剝離・かえり，㊥箆削り＋回転ナデ	〃 自然釉剝離	D－1 9層
195	〃	13.8	2.9	輪状つまみ	自然釉付着	D－2・E－2間畔 16層
196	坏身	11.0	3.25	箆切り後ナデ，回転ナデ	㊥線記号，㊥自然釉付着	C－1（西）・D－1間畔 12層
197	〃	10.6	2.7	〃 ㊥箆削り＋回転ナデ	㊥ 〃	C－1（西） 8層
198	〃	9.2	3.6	箆切り，㊥回転ナデ		E－1 9層
199	〃			箆切り後ナデ，㊥箆削り＋回転ナデ	㊥線記号	D－2 12層
200	〃	11.2	2.75	箆切り，㊥回転ナデ	〃	D－1 8層
201	〃	11.2	3.45	箆切り後ナデ，㊥箆削り＋回転ナデ	㊥自然釉付着	C－2 10層
202	〃	16.0	2.75	回転糸切り，回転ナデ	〃 重ね焼き痕	E－2 12層
203	低脚付坏		残4.1	切り込み（二方向），㊥回転ナデ		C－2 〃
204	坏蓋・身		残2.8	回転ナデ	重ね焼き溶着	D－2 9層
205	高坏	14.9	9.45	三角形透し（二方向）		D－1 〃

須恵器

番号	形態	口径cm	器高cm	形態・手法の特徴	その他	出土地点
206	高坏		残 8.2	切り込み（二方向）	重ね焼き痕	C−1（西）・D−1間畦12層
207	〃		残 6.4		竹管文2ヶ有	C−1（西）12層
208	〃		残 8.1			〃 〃
209	〃		残 3.3		㊥柿渋塗布（赤茶褐色）	D−1 〃
210	〃		残 8.6	低脚型		C−1（西） 〃
211	壺		残14.6	箆切り，㊥箆削り＋回転ナデ	底部㊦指頭圧痕有	D−2 〃
212	坩	7.6	残 4.9	頸部ボタン状飾り有，回転ナデ		D−1 9層
213	〃	6.1	残 3.6	㊥沈線有，回転ナデ		C−1（西）・D−1間畦12層
214	甕		残 7.7	口縁部回転ナデ		C−1（西）12層
215	〃		残 8.2	㊥平行叩き有		C−1 9層
216	〃	24.4	残13.2	㊥沈線有，口縁部・㊦回転ナデ，格叩き	把手付	D−2 〃
217	〃		残13.2	㊥底部端平行叩き・他刷毛目，㊦回転ナデ，円孔有	㊦穿孔時の指押痕有	E−1 〃
218	甕			沈線＋波状文，回転ナデ	口縁部，㊥自然釉斜掛	D−2 〃
219	〃	27.2		回転ナデ	㊥竹管文有，㊦自然釉付着	E−2 〃
220	〃	43.2	残12.8	沈線＋波状文，回転ナデ	口縁部	D−1 〃
221	〃	36.2	残15.8	〃 〃	〃	E−1 〃
222	横瓶	13.0	残 3.4	回転ナデ	〃 頸部㊦指頭圧痕有	E−1 12層
223	壺				イガラビ1号墳出土品とは別型	C−2・D−2間畦 5層
224				㊥箆削り後ナデ＋回転ナデ	蓋の可能性有	C−1（西） 8層
225	灯明皿		3.0	三段型一体成形，回転糸切り，回転ナデ		C−2・D−2間畦 9層
226				底部㊦カキ目，脚部刷毛目有	脚部三角柱状	D−2 8層
227					池ノ奥C遺跡特殊土器片	〃 9層
228					〃	〃 〃
242	坏身	9.0	4.2	箆切り，㊦回転ナデ		G−1 7層
243	低脚付坏		残 2.8	㊥回転ナデ	脚部	F−1 〃
244	蓋	8.8	3.8	回転ナデ	頂部㊦指頭圧痕有	〃 〃
245	坩	5.2	5.6	箆切り，㊥箆削り＋回転ナデ，㊦回転ナデ	自然釉付着	G−1 〃
246	〃	6.4	7.0	〃 〃 〃	㊥自然釉付着	F−2・G−2間畦 7層
247	〃	6.0	6.45	㊥箆削り＋回転ナデ	〃 （倒置）	F−1・G−1間畦 〃
248	〃	5.3	残3.25	頸部～胴部沈線有，回転ナデ	〃	〃 〃
249	把手				一部自然釉付着	G−1 7層
250	甕	16.6		口頸部回転ナデ	㊥自然釉付着	F−2 〃
251	坏蓋		残2.65	宝珠状つまみ，回転糸切り，㊥箆削り＋回転ナデ		F−1 12層上面
252	坏身	11.4	4.4	回転糸切り，㊦回転ナデ		G−1 8層上面
253	小形壺		残6.75	箆切り，㊥箆削り＋回転ナデ，㊦回転ナデ	㊥自然釉付着（倒置）	〃 〃
254	坩	6.4	6.5	㊥箆削り＋回転ナデ，㊦回転ナデ	自然釉付着	F−1 12層上面
255	〃	6.2	6.7	箆切り，㊥箆削り＋回転ナデ，㊦回転ナデ		〃 〃
256	〃		残 4.0	胴部ボタン状飾有，㊥箆削り＋回転ナデ		〃 〃
257	〃	6.2	6.6	箆切り，㊥箆削り＋回転ナデ		G−1 8層上面
258	〃		残 4.8	〃 〃	底外面粘土塊付着	〃 〃
260	坏身	8.6	4.0	〃 ㊦回転ナデ	㊥自然釉付着	〃 8層
261	〃	8.8	3.2	回転ナデ	㊥箆記号	〃 〃

須恵器

番号	形態	口径cm	器高cm	形態・手法の特徴	その他	出土地点
262	小形壺		現 2.6	底切り，㋣箆削り＋回転ナデ		G－1 8層
263	坩	6.4	6.5	〃 〃 ㋣回転ナデ	㋣自然釉付着	〃 12層上面
264	〃		現 5.1	〃 〃	自然釉付着	〃 〃
265	〃	6.0	現 4.7	回転ナデ	㋣自然釉付着	〃 〃
267	低脚付坏		現3.05	㋣回転ナデ		F－1 12層
268	坏 蓋	13.15	4.5	突帯有，㋣箆削り＋回転ナデ		〃 13層上面
269	坩	6.2	6.2	箆切り，回転ナデ，肩部沈線有	自然釉付着	〃 〃
270	〃	5.6	6.0	〃 〃	㋣自然釉付着	〃 〃
271	〃		現 4.4	〃 ㋣箆削り＋回転ナデ，㋤回転ナデ	自然釉付着	〃 〃
272	長頸壺		現11.1	〃 〃 〃		〃 〃
277	坏 身	10.7	2.8	㋣箆削り後回転ナデ，㋤回転ナデ	底外面粘土塊貼付	G－1 5層
278	坏（鉢）			静止糸切り	重ね焼き痕	F－2 〃
279	坩	6.0	7.0	箆切り後ナデ，㋣箆削り＋回転ナデ，㋤回転ナデ	㋣自然釉付着	F－1 〃
280	〃		現 3.4	箆切り，㋣箆削り＋回転ナデ，沈線有		G－2 〃
281	坏 蓋	10.8	1.5	つまみ無・かえり，箆切り，㋤回転ナデ	㋣自然釉剝離	H－1 4層
282	坏 身			回転糸切り		H－2 5層
283	甕	17.2	現 4.3	回転ナデ		I－2 3層
284	小形壺又は甕				㋣自然釉付着（倒置）	H－2 5層
285	坩	5.8	5.75	箆切り，㋣箆削り＋回転ナデ，㋤回転ナデ		I－1 4層
286					暗茶灰色	C－3表土
287	灯明皿		現 2.0	糸切り	㋣自然釉付着	〃 2層
288	坏 蓋	14.6	3.2	輪状つまみ，㋣箆削り＋回転ナデ	灰かぶり	〃 土器溜り1
289	〃	15.6	2.35	〃 箆切り，㋣箆削り＋回転ナデ	重ね焼き痕	〃 〃
290	坏 身	11.6	3.6	回転糸切り，㋤回転ナデ		〃 〃
291	〃	14.8	4.5	回転糸切り後ナデ，㋤回転ナデ		〃 〃
292	高台付坏	13.2	4.9	箆切り後ナデ，㋤回転ナデ		〃 〃
293	〃	14.2	4.6	静止糸切り後ナデ，㋤回転ナデ		〃 〃
294	高 坏	13.3	現 3.8	㋤回転ナデ	坏部	〃 〃
295	鉢	16.9	7.6	㋣箆削り＋回転ナデ	㋣自然釉剝離	〃 〃
296	〃		現 5.0	回転糸切り，㋣箆削り＋回転ナデ		〃 〃
304	坏 蓋	15.2	2.95	輪状つまみ，箆切り後ナデ，㋣箆削り＋回転ナデ	天井部㋣竹管文有 重ね焼き痕	〃 SB－01P1内
305	坏 身		現 2.0	静止糸切り		〃 〃 〃
306	高台付坏		現 2.9	箆切り後ナデ，㋤回転ナデ		〃 〃 〃
307	〃		現 3.1		磨滅	〃 〃 〃
308	〃	13.0	4.5	静止糸切り，㋤回転ナデ		〃 〃 〃
309	〃	13.6	4.9	〃 〃	㋣自然釉付着，重ね焼き痕	〃 〃 〃
310	高 坏		現 7.6	切り込み（二方向）		〃 〃 〃
316	甕	15.5	3.8	糸切り，㋤回転ナデ	高台付	〃 〃 P7内
332	坏 蓋	14.1	4.2	輪状つまみ，㋣箆削り＋回転ナデ	ほぼ完形，重ね焼き痕	〃 SD－02内
333	〃	15.5	現 3.8	静止糸切り 〃	輪状つまみ剝離痕有	〃 〃 3群
334	〃	13.8	2.75	輪状つまみ，箆切り後ナデ	㋣自然釉付着	〃 〃 1群
335	〃	15.6	2.6	〃 ㋤回転ナデ	ほぼ完形，灰かぶり 重ね焼き痕	〃 〃 4群

須恵器

番号	形態	口径cm	器高cm	形態・手法の特徴	その他	出土地点
336	坏身		残 3.0	静止糸切り，回転ナデ		C－3 SD－02内 1群
337	〃	15.4	4.25	糸切り，回転ナデ，沈線状回線有		〃 〃 5群
338	〃	15.7	5.5	箆切り，㋐箆削り＋回転ナデ		〃 〃 2群
339	高台付坏	13.5	4.7	静止糸切り後ナデ，㋐回転ナデ		〃 〃 〃
340	蓋		残 5.3	一条の沈線，回転ナデ		〃 〃 4群
357	鉢	43.2	残22.5	口縁部櫛状工具によるナデ，端部平坦	把手付，表面剥離，焼成不良	〃 SK－16内
358	坏蓋	15.6	2.1	輪状つまみ，天井部内面沈線状カキ目	㋐自然釉付着	〃 SB－01内
359	坏身	14.1	4.9	静止糸切り，㋐回転ナデ		〃 〃
360	高台付坏	12.8	4.8	静止糸切り後ナデ，㋐回転ナデ	ほぼ完形	〃 〃
361	横瓶	5.55	22.65	体部の叩き目不明瞭	肩部箆記号，焼き台付着	〃 〃
362	壺	15.5	残 5.6	肩部㋐平行叩き，他回転ナデ		〃 SB－01床面10群
364	甕	20.0	残10.8	口頸部回転ナデ	自然釉付着	〃 前半部土器包含層
377	小形壺		残 2.0	箆切り，㋐回転ナデ	㋐自然釉付着	D－3 SD－01底面
380	坏身	15.4	5.0	静止糸切り，㋐回転ナデ	重ね焼き痕	〃 地山面
381	小形壺	6.6	残 2.0		短頸壺型？	〃 〃
384	坏身	13.0	残 2.5	回転ナデ		排土
385	壺類	14.0	残 3.2	〃	頸部箆記号	不明
386	〃	17.6	残 8.3	〃	〃	〃

土師器

番号	形態	口径cm	器高cm	形態・手法の特徴	その他	出土地点
18	坏	7.8	1.2		小形品，磨滅	B－1 8層
19	鉢			ナデ		A－2 〃
20	甕	20.2	残 3.7	胴部㋐箆削り，他ナデ		B－1 〃
21	甕					〃 〃
32	壺	15.8	推19.0	胴部㋐刷毛目，他ナデ		B－2 11層
64	坏			静止糸切り	磨滅	A－2 3層
65	長頸壺		残 7.0	赤色塗彩，沈線有(二条)，回転ナデ	頸部	A－1 7層
66	把手				小形品	B－1 3層
67	〃					〃 7層
151	坏			赤色塗彩，暗文(円弧)有，箆切り後ナデ		D－2 17層
152	〃			〃 箆切り後ナデ，回転ナデ		〃 17層上面P内
153	甕	15.2	残 3.2	胴部㋐箆削り，他ナデ		C－1 (西) 12層下部
154	〃	22.8	残 4.2	〃 〃		〃 〃
155	〃	20.4	残 9.5	口頸部回転ナデ，胴部㋐刷毛目㋑箆削り		D－2 17層上面
156	〃	23.6	残 4.0	〃 胴部㋑箆削り	胴部㋐磨滅	C－2 〃
157	把手			箆調整		〃 〃
158	〃					〃 〃
159	甕					D－2 〃
160	土製支脚		残11.6	三叉突起		E－1 〃
161	〃		残16.1	〃		〃 〃
162	小形台座土製品		2.75	上部8面，上下に円孔(径3.75㎜)有	漆付着？，36.45 g	〃 〃

土師器

番号	形態	口径cm	器高cm	形態・手法の特徴	その他	出土地点
189	坏		残 2.8	赤色塗彩，底切り後ナデ	磨滅	C－2 17層
190	甕類			㋑回転ナデ	〃	E－2 〃
191	〃	22.0	残 5.6	口頸部回転ナデ，胴部㋑箆削り	〃	C－2 〃
229				内外面カキ目		C－2・D－2間畦 10層
230	坏			赤色塗彩，回転糸切り	磨滅	〃 9層
231	壺・甕類	21.4	残10.0	口縁部㋑回転ナデ，胴部㋑箆削り，他刷毛目	胴部㋐黒斑有	C－1（西） 12層
232	〃	30.0	残19.7	胴部㋐刷毛目㋑箆削り，他回転ナデ		E－2 9層
233	甕					〃 〃
234	土製支脚		残18.1	二又突起		C－1（西） 12層
235	〃		残12.8	〃		D・1 8層
259	壺	20.3	残 8.5	㋐口縁部回転ナデ・他刷毛目		F－1 12層上面
273	短頸壺	10.65	8.7	ナデ	ほぼ完形，㋐指押痕・黒斑有	〃 13層上面
274	壺	12.2	残 6.0	沈線有，㋐口頸部回転ナデ・他刷毛目	㋐磨滅	〃 〃
297	坏	12.7	3.0	赤色塗彩（剥離）	磨滅	C－3土器溜り1
298	〃			〃 ㋐回転ナデ		〃 〃
299	短頸壺	11.8	残 4.5	〃 回転ナデ	㋐黒斑有	〃 〃
300	把手			〃 断面扁平	301と同一個体	〃 〃
301	鍋		残 8.5	〃	把手付，磨滅	〃 〃
302	把手			〃 断面扁平	300，301と同一個体の可能性有	〃 〃
303	〃			体部外面接合		〃 〃
311	坏			赤色塗彩，静止糸切り		〃 SB－01 P1内
312	皿	18.0	2.6	赤色塗彩，ロクロ回転糸切り（同心円痕有）㋐回転ナデ		〃 〃 〃
313	〃	16.0	2.0	赤色塗彩（剥離）	磨滅	〃 〃 〃
314	土製支脚			円孔有		〃 〃 P6内
315	〃			〃		〃 〃 〃
317	坏	16.3	残 3.3	赤色塗彩，回転ナデ		〃 土器溜り2
318	〃	13.7	残 3.4	〃	体部㋐黒斑有，磨滅	〃 〃
319	〃	14.4	残 3.9	〃 回転ナデ	黒斑有	〃 〃
320	〃	16.5	残 3.7	〃 〃		〃 〃
321	〃	14.8	残 3.0	〃 〃		〃 〃
322	〃	17.0	残 3.7	赤色塗彩（剥離）	磨滅	〃 〃
323	〃	13.8	残 3.0	〃	〃	〃 〃
324	〃		残 1.5	赤色塗彩，箆切り，体底部境目箆削り	底部㋐多方向に線痕有	〃 〃
325	〃			〃 回転糸切り	底部㋐黒斑有	〃 〃
326	〃		残 1.6	〃 糸切り後ナデ	磨滅	〃 〃
327	〃			〃 糸切り	〃	〃 〃
328	〃	推13.0	推 3.6	赤色塗彩（剥離）	底部㋐黒斑有，磨滅	〃 〃
329	高坏	16.2	残 2.5	赤色塗彩，回転ナデ	坏部	〃 〃
330	甕	26.0	残 4.0		磨滅	〃 〃
331	〃	29.6	残 4.0	胴部㋐刷毛目	〃	〃 〃
341	坏	10.3	残2.35	赤色塗彩（剥離）	〃	〃 SD－02内5群
342	〃	14.8	残 3.1	〃	〃	〃 〃 4群

土師器

番号	形態	口径cm	器高cm	形態・手法の特徴	その他	出土地点
343	坏		残 1.5	赤色塗彩(剥離)	磨滅	C−3 SD−02内6群
344	〃		残 1.9	〃	〃	〃 〃 3群
345	〃		残 1.7	赤色塗彩	〃	〃 〃 6群
346	〃		残 2.4	赤色塗彩(剥離)	〃	〃 〃 5群
347	〃		残 1.8	〃	〃 342と同一個体の可能性有	〃 〃 3群
348	皿	18.8	残 3.0	赤色塗彩，口縁部回転ナデ	〃	〃 〃 4群
349	〃	20.1	残 2.2	赤色塗彩(剥離)	〃	〃 〃 3群
350	〃	21.9	残 2.0	〃	〃	〃 〃 4群
351	〃			赤色塗彩，口縁部回転ナデ	〃	〃 〃 3群
352	壺・甕類	19.4	残 21.6	胴部㋐カキ目，他ナデ		〃 〃 2群
353	〃	21.2	残 6.6	胴部㋐箆削り，口頸部回転ナデ	磨滅	〃 〃 5群
354	〃	24.0	残 13.2	胴部㋐箆削り㋑刷毛目		〃 〃
355	把手			断面扁平，体部外面接合		〃 〃 6群
356	〃					〃 〃 〃
363	坏	15.4	3.7	赤色塗彩，回転糸切り，回転ナデ		〃 SB−01床面
365					土馬の脚(尾)もどき	〃 削平部上層包含層
366	坏	13.5	残 4.15	赤色塗彩(剥離)	磨滅	〃 〃
367	〃	14.1	残 2.9	〃	〃	〃 〃
368	〃	15.8	残 3.3	〃	口縁部，磨滅	D−3 SD−01内6層
369	〃	15.0	残 2.8	赤色塗彩，回転ナデ	〃	〃 〃
370	〃	15.4	残 3.15	赤色塗彩(剥離)	〃 磨滅	〃 〃
371	〃			赤色塗彩，回転ナデ	〃	〃 〃
372	〃			〃	〃 磨滅	〃 〃
373	〃			〃 回転ナデ	高台部	〃 〃
374	〃			赤色塗彩(剥離)	〃 磨滅	〃 〃
375	〃			赤色塗彩	〃 〃	〃 〃
376	皿	15.6	2.3	〃 回転ナデ		〃 〃
378	坏	16.6	残 2.5		磨滅	〃 SD−01底面
379	甕	24.5		回転ナデ		〃 〃

陶磁器

番号	種類	形態	口径cm	器高cm	形態・手法・その他	出土地点
3	磁器	つまみ			白磁，中国産？	B−1 10層上面P内
81	陶器				常滑焼，㋐自然釉付着	〃 3層
82	〃	擂鉢			備前焼	〃 〃
83	〃	皿	28.0	残 3.7	亀山焼系統，磨滅	C−1 (東) 6層
163	〃				〃 ㋐平行叩き，㋑カキ目	C−2 17層上面
240	〃				〃 ㋐格子叩き 〃	D−1・E−1間畦表土
241	〃				〃 ㋐平行叩き 〃	D−1 5層
382	〃				高台付(削り出し)，㋐回転ナデ	G−3表土
383	〃	擂鉢			近世以降，口縁部，回転ナデ	〃 〃
388	〃	皿			高台付(削り出し)，釉有，砂目痕(重ね焼き痕)	不明

土馬（須恵質）

番号	形態	部位	性別	形態・手法の特徴	その他	出土地点
22		脚				B－1 8層
68	裸馬	右後脚	雄	男根（粘土貼り付）・肛門孔有	現存長 14.6cm	A－1 6層
69	〃	胴	表現なし	肛門孔有	〃 10.8cm	B－1 7層
70		脚				〃 3層
71		〃				A－1 6層
72		〃				〃 7層
73		〃				B－1 6層
74		〃		牛の脚？		A－1 4層
75		〃		牛の脚？，74と同一個体？		B－1 3層
76		尾				〃 〃
77		〃				A－1 4層
78		〃				B－1・C－1（東）間駐6層
236	裸馬	胴	雄	男根（粘土貼り付）有，焼成前柿赤焼布赤褐色に発色	現存長 7.4cm	D－1・E－1間駐 9層
237		脚				D－1 9層
238		尾				〃 5層
239		〃				E－1 8層
275	裸馬	胴	表現なし		現存長 7.8cm	F－1 12層
387	〃	〃	〃	肛門孔有	〃 5.6cm	排土

土錘（土師質）

番号	形態	長さ(cm)	径 (cm)	重量(g)	色調	成形	状態	出土地点
390	管状	2.0	1.3	2.5	赤褐色	巻き付け	ほぼ完形	B 1 2層
391	〃	3.1	0.8	1.5	〃	〃	〃	B－2 3層
392	〃	3.7	1.2	3.8	黄橙褐色	〃	〃	A－1 〃
393	〃	3.55	1.45	6.0	黄褐色	〃	〃	〃 〃
394	〃	3.7	1.5	6.3	暗褐色	〃	〃	B－1 〃
395	〃	3.95	1.5	8.0	赤褐色	〃	〃	〃 〃
396	〃	(3.0)	0.7	(1.15)	淡赤褐色	〃	約½欠	A－1 〃
397	〃	(2.7)	0.75	(1.2)	淡黄橙褐色	〃	〃	B－1 〃
398	〃	5.1	2.5	(26.6)	暗系褐色	〃	〃	B－2 6層
399	〃	(2.5)	0.8	(1.25)	赤褐色	〃	約½欠	B－1 3層
400	〃	(2.7)	0.75	(1.0)	〃	〃	約¼欠	〃 2層
401	〃	(2.7)	0.8	(1.2)	黄橙褐色	〃	〃	〃 〃
402	〃	3.15	0.8	(1.35)	赤褐色	〃	〃	C－1（東） 6層
403	〃	4.8	1.7	(9.0)	黄橙褐色	〃	約½欠	A－1 7層
404	〃	(1.85)	0.85	(0.85)	赤褐色	〃	約½欠	B－1 3層
405	〃	(2.75)	0.8	(1.35)	〃	〃	〃	A－1 〃
406	〃	(2.5)	0.8	(1.45)	橙白色	〃	〃	B－1 〃
407	〃	(2.6)	0.9	(1.35)	赤褐色	〃	約½欠	〃 2層
408	〃	(2.15)	0.9	(0.8)	〃	〃	〃	B－2 6層
409	〃	(1.95)	0.7	(0.85)	〃	〃	〃	B－1 3層

土錘（土師質）

番号	形態	長さ(cm)	径 cm	重量(g)	色調	成形	状態	出土地点
410	管状	(1.9)	0.75	(0.9)	淡黄褐色	巻き付け	約½欠	A−1 6層
411	〃	(2.6)	0.9	(1.2)	赤褐色	〃	〃	B−1 2層
412	〃	3.7	2.2	(8.0)	淡黄橙褐色	〃	〃	〃 3層
413	〃	(1.9)	1.1	(1.75)	赤褐色	〃	〃	〃 〃
414	円筒形	2.5	2.45	11.85	淡褐色～淡赤褐色	〃	ほぼ完形	〃 2層
415	〃	2.45	2.55	15.25	黄橙褐色	〃	〃	〃 3層
416	〃	3.3	2.9	(24.45)	淡褐色	〃	約½欠	A−1 4層
417	〃	3.0	2.8	(22.9)	〃	〃	約½欠	〃 6層
418	〃	2.3	(2.5)	(5.1)	黄橙褐色	〃	約½欠	B−1 3層
419	〃	2.55	(2.7)	(7.8)	黄褐色～灰色	〃	約½欠	A−1 4層
420	球形	2.6	3.0	19.35	淡褐色～淡赤褐色，一部煤付着	〃	ほぼ完形	B−1 3層
421	〃	2.85	3.15	22.1	淡黄褐色	2方向穿孔	〃	A−1 4層
422	〃	1.65	2.45	(7.5)	赤褐色	巻き付け	約½欠	A−1・B−1間畦表土
423	〃	3.2	(3.4)	(25.2)	淡褐色～赤黄褐色	2方向穿孔	約½欠	A−1 4層
424	紡錘形	3.0	1.7	5.8	黄橙褐色	巻き付け	ほぼ完形	B−1 2層
425	〃	3.1	1.85	8.5	暗黄橙褐色	〃	〃	〃 7層
426	管状	4.05	1.8	(8.9)	暗褐色～橙白色	〃	約¼欠	B−2 8層
427	球形	2.45	2.95	19.9	淡褐色～淡赤褐色	〃	ほぼ完形	B−1 10層上面P1内
428	〃	3.3	3.2	(23.75)	淡橙褐色	〃	約½欠	A−1地山面P1内
429	紡錘形	2.9	3.4	29.45	黒灰色～明褐色	〃	ほぼ完形	A−2 11層
430	管状	2.6	0.75	1.45	淡赤灰色	巻き付け，磨滅	〃	C−2 12層
431	〃	3.85	0.8	2.1	淡黄橙褐色	巻き付け，剥離	〃	〃 〃
432	〃	3.2	0.85	2.4	暗褐色	巻き付け	〃	〃 9層
433	〃	2.75	1.05	2.6	〃	〃	〃	D−1 〃
434	〃	4.1	1.05	3.05	赤褐色	〃	〃	〃 5層
435	〃	3.7	1.15	3.55	黄褐色	〃	〃	〃 〃
436	〃	3.7	1.55	6.25	黒褐色	〃	〃	D−2 9層
437	〃	4.8	1.35	6.35	暗灰色	〃	〃	E−1 8層
438	〃	3.4	1.75	8.2	灰白色～黒灰色	巻き付け，磨滅	〃	C−1(西) 8層
439	〃	4.2	1.7	8.7	淡黄橙灰色	巻き付け	〃	C−2 9層
440	〃	4.3	1.75	9.15	淡褐色	巻き付け，ナデ調整	〃	C−1(西)・D−1間畦12層
441	〃	4.5	1.6	9.2	灰白色～暗灰色	巻き付け	〃	C−2 9層
442	〃	4.0	1.8	11.0	黒褐色	〃	〃	C−1(西) 8層
443	〃	3.7	2.0	11.1	灰色	巻き付け，磨滅	〃	〃 〃
444	〃	(2.7)	0.9	(1.6)	淡黄橙褐色	巻き付け	約¼欠	C−2 12層
445	〃	(2.55)	1.1	(2.5)	赤褐色	〃	〃	C 1(西) 8層
446	〃	(2.9)	0.8	(1.2)	〃	〃	約½欠	D−1表土
447	〃	3.7	0.9	(2.2)	〃	〃	約¼欠	C−1(西) 8層
448	〃	3.4	1.4	(4.75)	黒灰色～暗灰色	〃	〃	E−1 5層
449	〃	4.6	1.75	(10.3)	暗灰色	〃	〃	〃 4層
450	〃	3.0	0.7	(0.95)	赤褐色	〃	約½欠	D−1 8層
451	〃	(3.1)	0.9	(2.4)	淡赤灰色	〃	〃	C−2 9層

土錘（土師質）

番号	形態	長さ㎝	径 ㎝	重量(g)	色調	成形	状態	出土地点
452	管状	(3.55)	0.9	(2.7)	灰色～黒色	巻き付け	約½欠	C-2 12層
453	〃	3.6	1.2	(6.7)	黄橙褐色	〃	〃	〃 8層
454	〃	3.8	1.6	(8.25)	淡黄橙褐色	〃	約½欠	〃 9層
455	〃	(3.9)	1.2	(4.8)	黒灰色	〃	約½欠	〃 〃
456	〃	(2.8)	1.4	(4.0)	黄褐色	〃	約½欠	〃 〃
457	〃	(2.2)	0.7	(1.0)	暗赤褐色	〃	約½欠	D-2表土
458	〃	3.3	0.75	(1.6)	赤褐色	〃	〃	D-1 9層
459	〃	(4.4)	1.2	(5.2)	暗褐色	〃	〃	C-2 〃
460	〃	(3.5)	1.6	(7.6)	淡黄橙褐色	〃	〃	D-1 〃
461	〃	(2.7)	0.85	(1.8)	赤褐色	〃	約½残	C-1(西)表土
462	〃	(1.85)	0.9	(1.05)	〃	〃	約½欠	D-1 9層
463	〃	(2.25)	1.0	(1.4)	淡黄橙褐色	〃	〃	C-1(西)・D-1間畦9層
464	〃	(2.25)	0.95	(1.6)	暗褐色	〃	〃	C-2 12層
465	〃	(2.15)	1.1	(1.85)	赤褐色	〃	〃	D-2 8層
466	〃	4.0	(1.7)	(4.4)	暗褐色	〃	〃	C-2・D-2間畦9層
467	円筒形	2.85	3.0	26.4	淡黄橙褐色	一方向穿孔？	ほぼ完形	C-2 12層
468	〃	2.35	2.8	(12.8)	灰白色	二方向穿孔？	約½残	C-1(西)・D-1間畦9層
469	〃	2.65	(3.2)	(13.05)	赤褐色	巻き付け	約½欠	E-1 4層
470	球形	2.3	2.45	11.55	淡赤褐色～黄褐色	巻き付け，磨滅	ほぼ完形	D-1 9層
471	〃	2.3	3.0	19.45	淡黄橙褐色	巻き付け	〃	C-1(西) 9層
472	〃	2.4	3.2	21.05	黄橙褐色	二方向穿孔？	〃	〃 8層
473	〃	2.85	3.2	29.25	淡黄橙褐色	巻き付け	〃	D-2 8層
474	〃	1.2	2.0	(3.5)	赤褐色	巻き付け？	約½欠	E-1表土
475	〃	2.95	2.85	(19.4)	淡褐色	巻き付け，ナデ調整	約½欠	C-1(西) 8層
476	管状	(2.0)	0.55	(0.75)	赤褐色	巻き付け	約½欠	F-1 2層
477	〃	(1.95)	0.75	(0.8)	〃	〃	〃	G-2 5層
478	〃	(2.55)	0.8	(0.95)	〃	〃	約½残	G-1 〃
479	紡錘形	2.7	4.2	46.8	暗灰色～明褐色	二方向穿孔？	ほぼ完形	F-1 12層
480	管状	4.2	1.3	6.2	赤褐色	巻き付け，剝離	〃	C-3 3層
481	円筒形	2.9	2.8	(18.65)	淡黄橙褐色	巻き付け	約½欠	〃 土器溜り1
482	管状	3.95	1.5	12.4	黒色～明褐色	〃	ほぼ完形	D-3 SD-01内6層
483	球形	3.0	3.6	(32.25)	灰白色	〃	約¼欠	〃 〃
484	〃	3.05	2.6	(14.9)	黄褐色	一方向穿孔 穿孔部片側扁平	約½欠	C-3 SB-01内
485	〃	(2.2)	2.9	(13.3)	黄橙褐色	巻き付け	約½欠	〃 SB-01床面
486	〃	3.1	2.9	(15.2)	〃	〃	約½欠	〃 削平部土器包含層
487	管状	2.9	0.75	1.3	赤褐色	〃	ほぼ完形	排土
488	〃	4.0	1.5	6.9	暗灰色	〃	〃	〃
489	〃	(3.3)	1.0	(2.9)	赤褐色	〃	約½欠	〃
490	〃	(2.3)	0.7	(0.75)	黄褐色	〃	約½欠	〃
491	〃	(2.1)	1.1	(1.95)	赤褐色	〃	〃	〃
492	〃	(1.45)	0.75	(0.65)	〃	〃	約½残	不明
493	〃	(2.1)	0.8	(0.8)	〃	〃	〃	排土

土錘（須恵質）

番号	形態	長さ(cm)	径 (cm)	重量(g)	色調	成形	状態	出土地点
494	円筒形？	(1.65)	4.85		灰白色			A－1 3層
495	球形	2.8	3.2	26.1	淡茶灰色	一方向穿孔	ほぼ完形	B－1 7層

土錘（瓦質）

番号	形態	長さ(cm)	径 (cm)	重量(g)	色調	成形	状態	出土地点
496	管状	3.95	0.9	2.85	赤褐色	巻き付け	ほぼ完形	C－2 12層

その他の遺物

番号	種類	材質	形態・その他	出土地点
29	石鏃	黒曜石	脈型凹三角形，最大長2.25 cm，最大幅1.6 cm，最大厚0.4 cm	A－1 10層
84	角釘	鉄	現存長3.1 cm，全面錆	B－1 4層
85	筒型鉄製品	〃	現存長1.6 cm，最大径0.9 cm，全面錆	A－1 7層
164	石鏃	黒曜石	脈型凸三角形，最大長2.4 cm，最大幅1.95 cm，最大厚0.5 cm	E－1 17層上面
276	古銭		『宋永通宝』，裏面「文」，遺存状態良好	F－2表土
389	瓦？		印花文有	排土

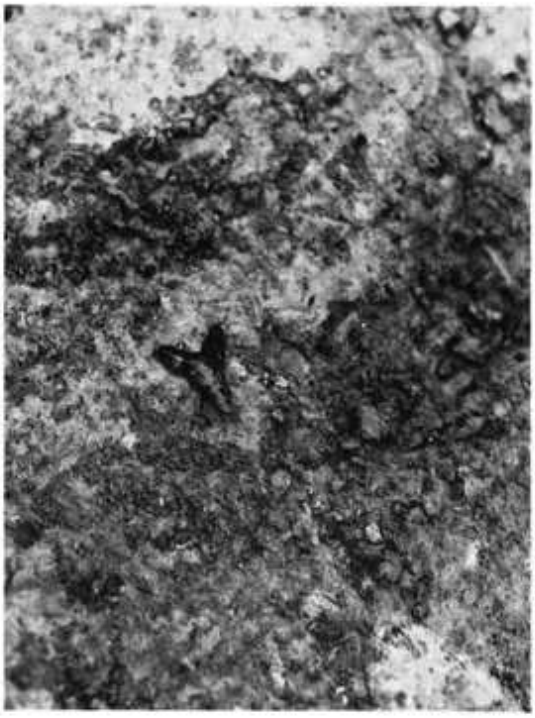


写真2　A－1区石鏃出土状況

写真3　E－2区竈片出土状況

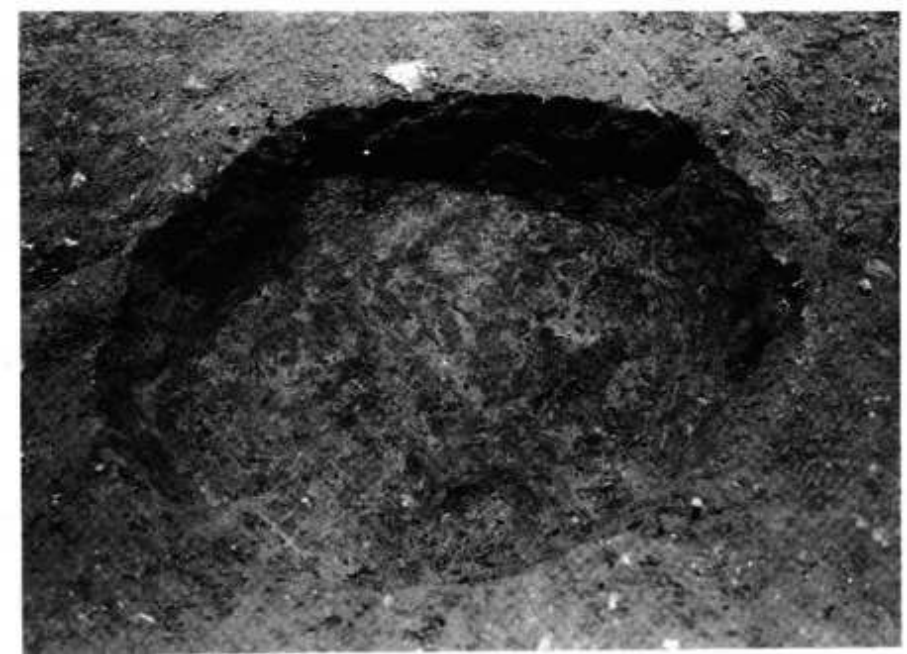
昭和60年度発掘調査前近景
（西から東方谷間入り口
方向を見る）

昭和60年度発掘調査風景

B－1・C－1（東）区間
畦内土馬出土状況

A－1～C－1(東)区第1遺構面（A－1区南側は第2遺構面）

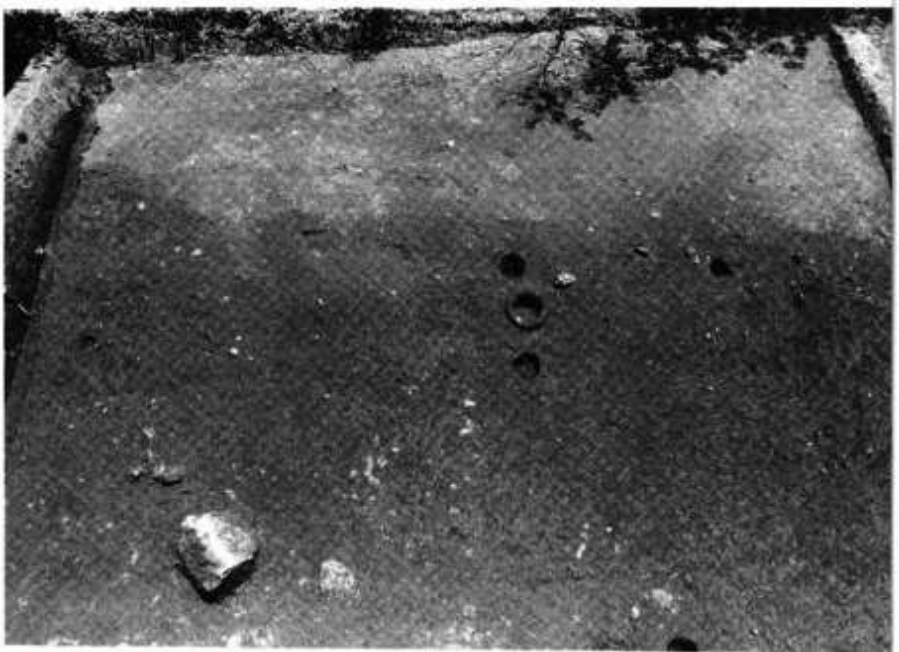
A－1区SK－01



A－2区SK－06

A－1～C－1（東）区第2遺構面（西から見る）

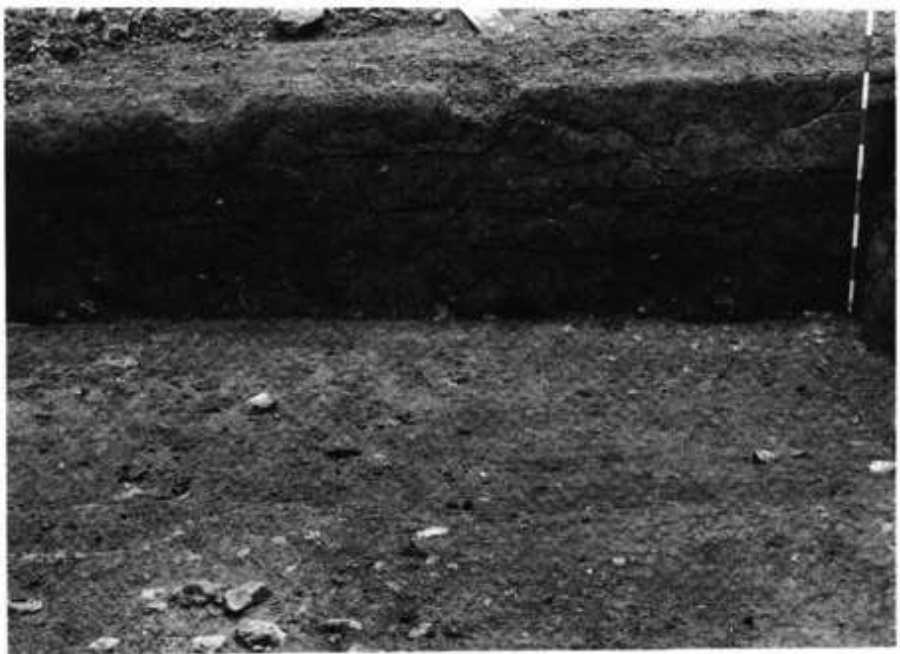
A－1区SK－02



B－2区第3遺構面

B－1区西壁

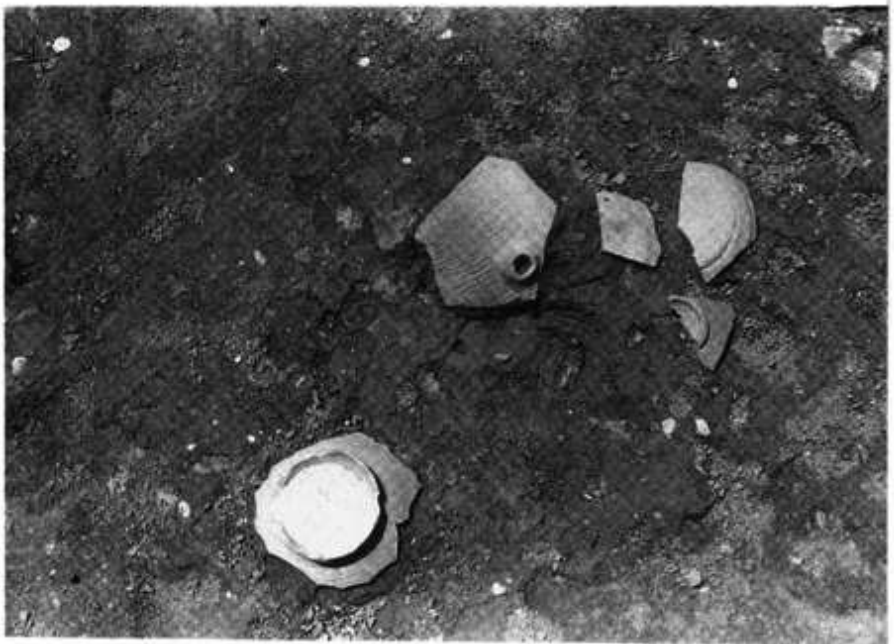
B－2区西壁



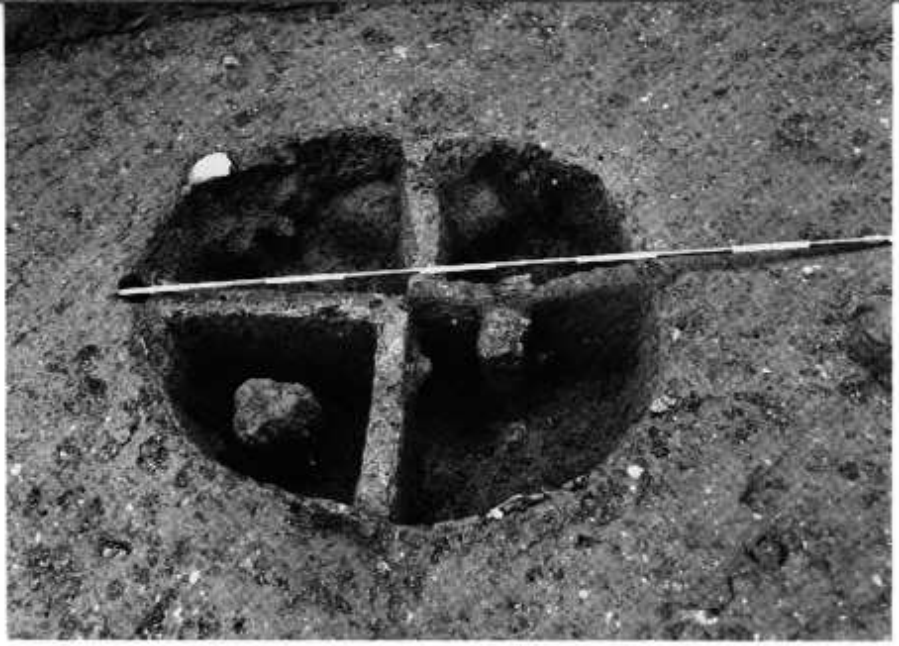
A－2区東壁

C－1（西）～E－1区
第1遺構面

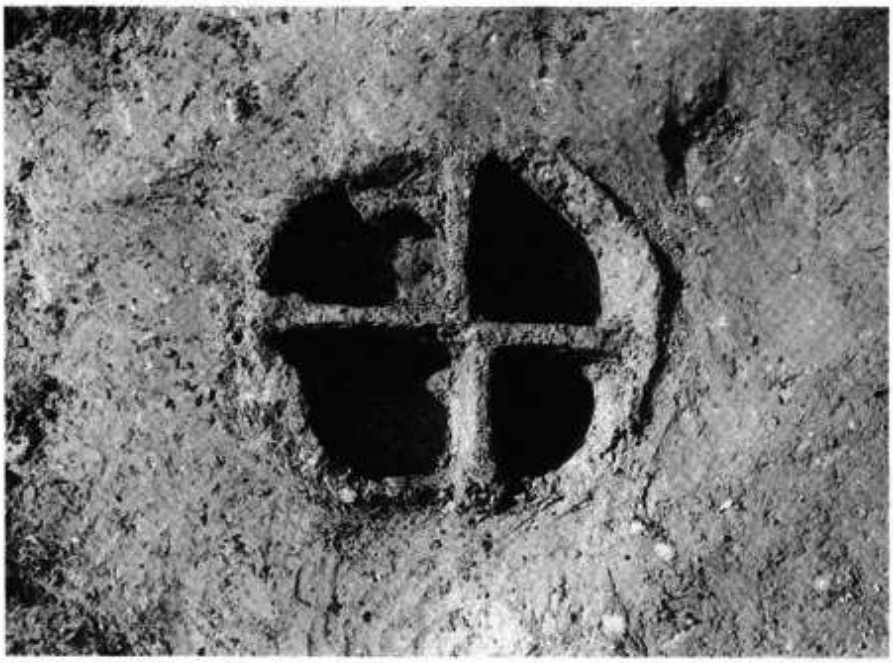
D－2区第1遺構面



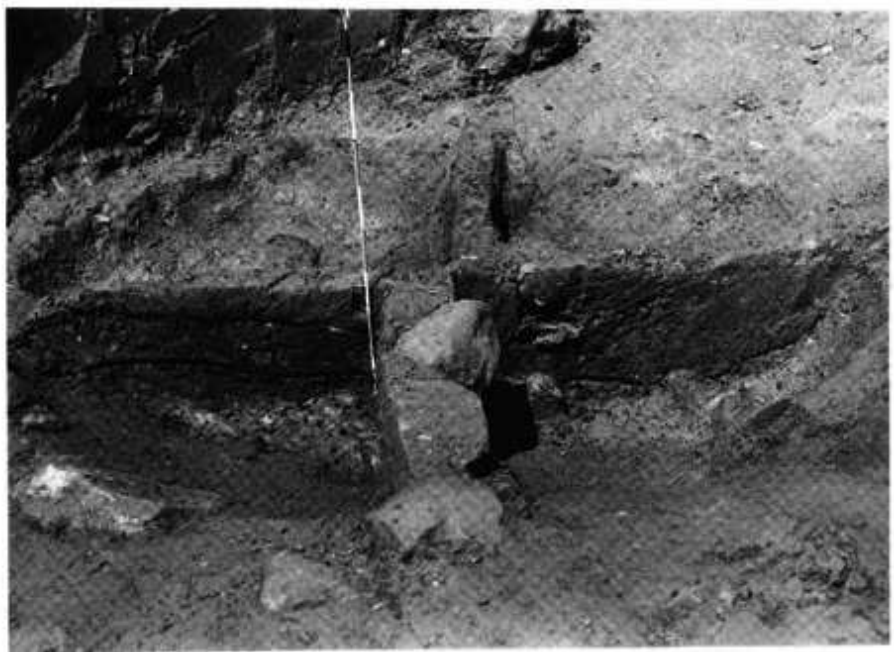
D－2区第1遺構面
土器出土状況



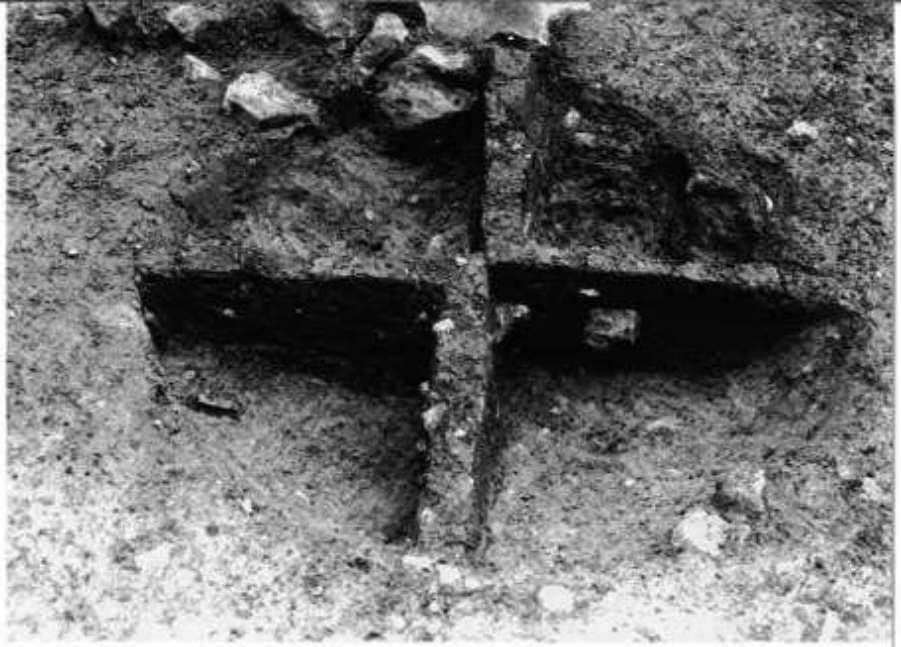
D－1区SK－03



D－1区SK－04

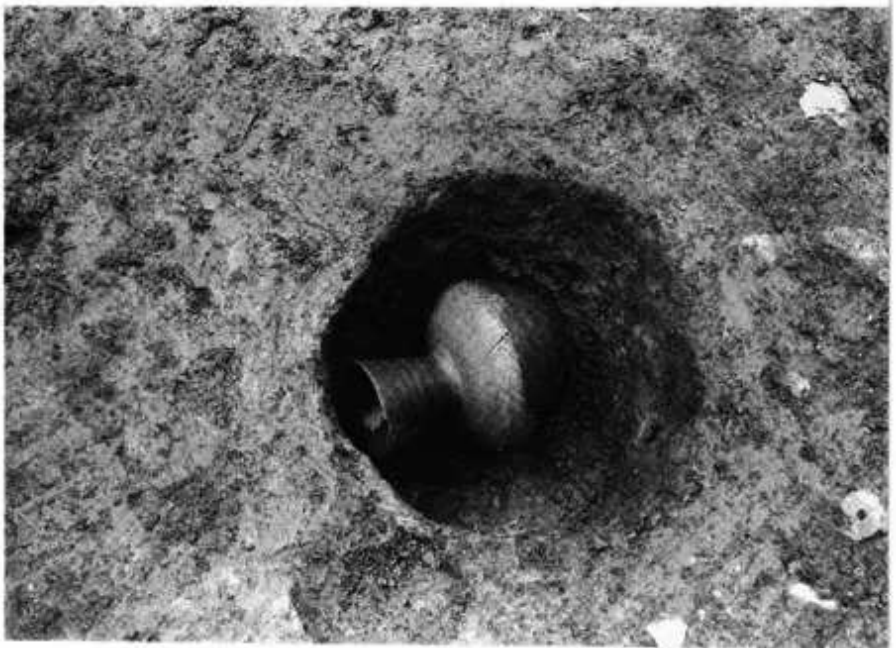


E－2区SK－07



D－2区SK－08

C－1（西）～E－1区
第2遺構面



D－1区第2遺構面
P1長頸壺出土状況